



○二五 新田宮執印并五大院院主職文書案  
(二五の1)

(端裏書)

允康友朝臣申被停止守護所御教書案  
(使脱カ)

〔外題〕  
「八幡新田宮執印神主職事、且〔任〕前之例、且止狼藉、可令知行□社務之状如件、在御判」

薩摩國 八幡新田宮執印左馬允惟宗  
康友解、申進申文事

請被殊任代々、將軍家御免許旨、重賜 御判、弥致  
丁寧御祈禱子細之状、  
(高脱カ)

右、謹檢案内、件 八幡新田者、大菩薩崇廟之靈社、殊勝擁衛之砌也、因之自故 大將殿御時、至于代々將軍家之御代、於彼社領者、被止地頭守護所 于今無相違、然

而如此御代之刻、令止旁々狼藉、任先例、不可有相違之由賜御判、弥神官所司等、為致丁寧之御祈禱、粗勒子細、言上如件、以解、

承久三年十月三日

左馬允惟宗康友上

(本文書ハ「旧記雜錄前編」三〇一號文書ト同一文書ナルベシ)

建仁元年

十一月廿二日

遠江守 在御判  
北条殿

(二五の3号ノ差出所及ビ年月日ナルベシ、尚カツテハ第六卷ニアリ)

(二五の2)

〔北條殿在御判〕  
(紙雜目)

藤内康友訴申、嶋津庄内鹿兒嶋郡司并弁濟使職事、召問兩方理非於庄官等、付文書道理、可令致沙汰給之由所候也、仍以執達如件、

建仁三年十二月九日

景成奉

長澤左衛門尉殿  
當國守護所

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二〇七号文書ト同一文書ナルベシ、尚カツテハ第三卷卷首ニ建仁三年十月廿六日付北条時政下文案(現六九の1号)ニ次イデ建仁三

年十二月九日付北条時政御教書案(現二五の2号)、次イテ承久三年十月三日付惟宗康友解状案(現二五の1号)アリ)

(紙継目)

(二五の3)  
嶋津庄内鹿兒嶋郡司弁濟使兩職事、康友与忠重召問兩方、任文書理、可沙汰付之由、先日令下知之處、件忠重不待裁許、令逃脱庄内之上、剩私用御米之条、罪科不輕之由、在廳并代官所申也、如聞者、忠重所行甚以

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一六六六号文書ト同一文書ニシテ、前出建仁元年十一月廿二日付差出所遠江守ノ前半部ナルベシ、尚カツテハ第六卷宝治元年十月廿五日付關東下知状案(現七一号)ノ次ニアリ)

(二五の4)

薩摩國御家人覺嶋太郎康村、(弘カ)  
上可罷入見參之由歎申候、且折紙令進覽候、便宜之時、可令披露給候、恐々謹言、

(嘉祿三年カ)  
十一月四日

(島津忠時)  
左衛門尉在判  
大隅前司入道殿

進上 後藤左衛門尉殿

(佐度前司基綱)  
(波)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一六六七号文書ト同一文書ナルベシ)

(紙継目)

(二五の5)  
薩摩國御家人覺嶋小太郎康弘申即郡司職事、訴状遣之、

如状者、論人忠重・忠光等、承久合戰之時、為京方云々、為被糺明實否、可令召進彼兩人也、明年四月以前、可參着關東、若過其期者、就訴状可有御成敗也者、依鎌倉殿仰、執達如件、

嘉祿三年十二月廿四日

(北条泰時)  
武藏守在御判  
(北条時房)  
相模守在御判

(紙目裏花押)

(島津忠時)  
豊後三郎左衛門尉殿

大隅前司入道殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一三五三号文書ト同一文書ナルベシ、尚カツテハ二五の4・5号ハ文暦二年九月十六日付關東御教書案(現二五の8号)ノ次ニアリ)

(紙継目)

(二五の6)  
覺嶋中務丞康兼訴状如此、郡司職事、為對決、可被召進  
矢上三郎盛澄之状、依仰執達如件、

貞永元年閏九月八日

(北条泰時)  
武藏守在御判  
(北条時房)  
相模守在御判

(島津忠時)  
豊後三郎左衛門尉殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一三六六の1号文書ト同一文書ナルベシ)

(二五の7)

薩摩國御家人中務丞康兼申覺嶋郡司職事、矢上三郎盛澄請文令披露畢、而康兼重訴狀如此、盛澄遲參之条、何様事哉、康兼令參向之時、盛澄可參會也、今度若及遲怠者、就康兼訴狀、可有御成敗也者、依仰執達如件、

天福元年六月廿八日

(北条泰時)  
武藏守 在御判  
(北条時房)  
相模守 在御判

(紙目裏花押)

### 豊後三郎左衛門尉殿

(本文書ハ「旧記雜録前編一」三七〇号文書ト同一文書ナルベシ)

(二五の8)

薩摩國覺嶋郡司職事、論人矢上三郎盛澄參上之時、被召決兩方、可有御成敗之状、依仰執達如件、

文曆二年九月十六日

(北条泰時)  
武藏守 在御判  
(北条時房)  
相模守 在御判

### 中務大夫殿

故康兼

(本文書ハ「旧記雜録前編一」三九一号文書ト同一文書ナルベシ、尚カツテハ二五の6・7・8号ハ承久三年十月三日付惟宗泰友解状案(現二五の1号)ノ次ニアリ)

(紙継目)

(二五の9)

薩摩國御家人覺嶋小太郎康弘申御郡司職越訴事、申状具書如此、尋究子細、可被申沙汰候、謹言、

仁治元年七月三日

泰時 在御判

(中原師員)  
摂津前司殿  
實名師員

(本文書ハ「旧記雜録前編一」四〇四号文書ト同一文書ナルベシ)

(紙継目)

薩摩國御家人覺嶋中務次郎康邦与矢上左衛門尉盛澄後家相論、當國

(紙切レテ文字一部ミヌルモ不明、尚カツテハ第六卷ニアツタ關東御教書案(現二五の3号)ノ次ニアリ、後ノ竄入カ、ママ)

(二五の10)

司矢上左(備カ)月中可催上

〔郡〕九日到来、謹以拜見仕候了、任被仰(下之カ)旨、相觸候之處、是阿状、進上之、以此趣、可有御披露候、恐惶謹言、

十二月廿二日

式部丞藤原忠継

請文

### 進上 佐治左衛門尉殿

(本文書ハ「旧記雜録前編一」六六四号文書ト同一文書ナルベシ)

(二五の11)

薩摩國御家人魔嶋中務次郎康邦与矢上左衛門尉盛澄後家相論、當國魔嶋郡司并弁濟使兩職事、散狀披見了、此事去二月中可召進彼後家之由、被下関東御教書之間、相觸之處、于今不參之条、太自由也、不日可被催

弘長元年四月五日

左近將監

(繼目裏花押)

大隅式部丞殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」六三三号文書ト同一文書ナルベシ、尚カツテハ二五の10・11号ハ現二五の3号ノ差出所及ビ年月日ノ次ニアリ)

(二五の12)

薩摩國御家人中務次郎康邦与矢上左衛門尉盛澄後家相論、魔嶋郡司并弁濟使兩職事、去四月五日重御教書、同七月四日到来、謹以拜見仕候了、任被仰下之旨、不日可令參上之由、令催促候之處、後家尼狀進上之、以此趣、可有御披露候、恐惶謹言、

七月十二日

式部丞藤原忠繼

請文

進上 佐治左衛門尉殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」六三四号文書ト同一文書ナルベシ、尚カツテハ仁治元年七月三日付北条家時書狀案(現二五の9号)ノ次ニアリ)

(二五の13)

魔嶋中務次郎康邦申、薩摩國魔嶋郡司并弁濟使兩職事、為有其沙汰、可令召進矢上左衛門尉盛澄後家之由、被部下之處、注進狀披露了、所詮、其身為所

勞者、来月十日以前、差進代官、可之由、可令下知

弘長三年九月三日

武藏守在御判

陸奥左近大夫將監殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」六六五号文書ト同一文書ナルベシ)

以上卷紙拾枚也、(花押)

○二六 江口信阿弥陀仏讓狀

江口信阿弥陀佛狀

讓進 上古佛田壹町事

右件田者、信阿弥陀佛か相傳之田地也、然間、信阿弥陀佛か親父新大夫正持入道、所令取出舉代ニ、差年記奉引畢、今又依有由緒、所奉讓(執印友員)備後守殿也、於自今以後者、以彼状、為永代之領主、無他妨、可令領知給之状如件、

文永五年三月 日

沙弥信阿弥陀佛(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一七〇八号文書ト同一文書ナルベシ)

〇 二七 石清水八幡宮檢校御教書案

(端裏書)

「謹上 新田宮執印隱岐守殿 法眼性(禪カ)」

在御判

神王面修復官祓間事、院宣并府宣如此、王面事者、宰府自元領状勿論也、於清祓者、不可事行之由、沙汰出来之間、雖為官祓、可令遂行之由、所被仰下也、社家存其旨、谷相觸宰府、可致沙汰之由、御氣色所候也、仍執達

如件、

(建長元年)

十月廿一日

法眼性禪

謹上 新田宮(惟宗友成)執印隱岐守殿

〇 二八 別府多田兩名主代行蓮請文

(端裏書)

「山門のへふたた兩名のうけ状之正文也」

つね(常見)のれ(例)いり(立用)う(免)よう(田)のめ(免)む(田)てん(免)の事

や(山門院)まとのあん(募)のつ(足)のりあし七石五斗のうち、へふた(別府多田)た(所)の

ふん(惣)、そ(願)うりやう(切符)のさ(所)りふ(所)ニまかせて、八ふん(所)一のそた(所)

う(未)まい(進)、いちねん(對)のふん九斗三升七合五夕ニあひあたり

候、し(自今以後)こん(安)い(建)こ(治)ハ、まいねん(弘)ニ(安)しむ(祈)む(祈)たい(祈)かんあるへか

らす、た(建)し(治)けんち(三)ねん(弘)より(安)こ(祈)うあん(祈)十ねん(祈)まで、拾

壹ケ年かみしん貳石一升七合候ニよて、上(祈)そ(祈)ニ(祈)をよひ候

といへとも、かつハしんもちそのをそれ候、かつハしや

う(祈)さい(祈)ハ、かり候あいた、このみしん(祈)ニ(祈)をきてハ、こん

ねんちう(解意)ニけたいなくわきまへ候へし、かのめんてん(免田)ニ  
いたりてハ、しこんいこたいかんをいたすへからず、よ  
て(後)こ日のために、しやうくたんのことし、

弘安十一年五月廿一日

別府多田名主代行蓮



(本文書ハ「旧記雜録前編」二八八五号文書ト同一文書ナルベシ)

〇二一九 沙弥蓮道請文

(端裏書)

「阿多名主請文田所入道状事」

阿多五大院田内、弥平太与大浦入道除知行分、今又河邊  
宮下仁令沽却参町六段下地候、被聞食之由の可給御状候、  
又去々年御年貢未進等、無一粒毛未進、八月中仁可致沙  
汰候、若未進候ハん時者、除此参町六段、所残候、先日  
任所入置候證文之旨、名主職お可有御知行候、仍為後日  
之状如件、

嘉元四年五月廿五日

沙弥蓮道



(本文書ハ「旧記雜録前編」二一〇四号文書ト同一文書ナルベシ)

〇三〇〇 泰忠請文

(端裏書)

「阿多八郎次郎うけ状事」

就御注進候、河邊左衛門三郎知行分、五大院内三丁六段、  
并兵衛大郎知行分、安堵仕候上ハ、公文所無御免候ハ、  
不可沽却于權門人候、若又御年貢以下社役等懈怠仕候者、  
知行分可被召候、仍為後日之状如件、

元亨三年四月十七日

泰忠



(本文書ハ「旧記雜録前編」二一三三五号文書ト同一文書ナルベシ)

〇三一〇 沙弥道嚴執印重友書下

(端裏書)

「莫称施行案市来四郎入道跡田園等事」

薩摩國 八幡新田宮執印職内、市来四郎入道如導跡田園  
等事、莫称彦太郎入道殿相傳知行云々、然者、早任如導  
跡輩手繼状、無相違可被領掌之状如件、

嘉曆貳年八月三日

(執印重友) 在判  
沙弥道嚴



(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一四八三号文書ト同一文書ナルベシ、尚花押ハ墨ニテ抹消サル)

〇三三 鎮西御教書

薩摩國新田宮執印入道道惠申江上村内荒野等事、重申状如此、来月廿日以前可參對也、仍執達如件、

嘉曆四年正月廿三日

(北条実時)  
修理亮(花押)

吉永又三郎入道殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一五〇五号文書ト同一文書ナルベシ)

〇三三 島津宗久請文案

去三月廿九日御奉書謹拜見仕候訖、抑左衛門大夫友雄申、所領薩摩國新田宮執印職并五大院之主職、及散在名田島免田等安堵事、當知行無相違候、將又可支申仁有無事、不令存知候、若此条偽申候者、

八幡大菩薩御罰可罷蒙候、以此旨、可有御披露候哉、恐惶謹言、

曆應四年六月廿三日

左衛門少尉宗久 請文

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」二二二六号文書ト同一文書ナルベシ)

〇三四 ゆた六郎忠経質券

(端裏書)

「ゆたの六郎とのゝ状也 ミつとみのめんでんの代下遅引状也」

さつまの國光富名内忠経知行分、新田宮めんでん米、か(兼)り多(永)い元年のとしよりして、いせんのみしんかたニ中むた壹丁を、康永三年より貳作を、所當公事とめて、ひき渡進候所也、此やくそくのとしすき候ハ、如本可返給候、仍如件、

康永三年二月廿五日

忠経



(本文書ハ「旧記雜錄前編一」二二八七号文書ト同一文書ナルベシ)

〇三五 惟宗時友請文

薩摩國新田宮前執印友雄代申、同國市比野村内原田壹町

参段、府宿園壹ヶ所事、件田園者、時友無違乱之儀候上者、押領之条不實候、此上者、時友安堵事、任先御沙汰旨、可蒙御成敗候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

觀應二年七月廿四日 惟宗時友(裏花押)

(本文書へ「旧記雜錄前編」二二二六二号文書ト同一文書ナルベシ)

〇二二六 惟宗友行書状

(端裏書)

「左衛門殿状正文延慶三」

度々令申候五大院内橋口水田坪うち万得、日向前司入道令押領候之間、御方ニ多年子細ヲ雖令申候、無執御沙汰候之条、何様次第候やらん、不審無極候、且被知食候様ニ、五大院ハ宗と桑代こそ得分にて候つか、皆枯失候て御年貢の足なく候へとも、私をかへりみす忠をぬき候て、たのひけい(秘計)をもて毎年御年貢無懈怠致弁候了、年々無足の致御年貢沙汰候事、難治子細候、且所々神領のはうにまかせて、御祭の時五大院所役をおさへて、可致沙

汰之由存候へとも、今までハ御計を相待まいらせて候、

誠執御沙汰あるましき子細候者、承候て候て(符カ)可存知仕候、

私ニ子細を申へきに候ハす候へハ、領家ニ此旨可令言上

候欵、執御沙汰候ましき左右を可承候へく候、無足御年

貢沙汰難治候之間、如此令申候、恐々謹言、

九月十八日

左衛門尉友行(花押)

謹上 執印殿

〇二二七 沙弥願真執印請文案

(端裏書)

「あたのきしん状」

一宮八幡新田宮御寄進事

薩摩國阿多郡南方鮫嶋跡水田屯町字龜喜御寄進云々、

殊可奉致御祈禱之丁寧候、仍所請申如件、

嘉慶二年九月 日

沙弥願真(執印友躬)

(本文書へ「旧記雜錄前編」二二四七二号文書ト同一文書ナルベシ)



○ 三八 阿蘇谷久治寄進狀  
八幡新田宮奉寄進園之事

右件園者、薩摩國高城郡内宮内五大院園一所、阿蘇谷久治重代相傳依為所領、毎月觀音經八卷為讀誦、所奉寄進也、至于子々孫々、此寄進狀可奉仰者也、仍寄進狀如件、

應永三年丙子二月十三日

藤原久治



〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」五六二号文書ト同一文書ナルベシ〕

○ 三九 島津忠宗警固番役覆勘狀

警固役事、自六月至七月、被勤仕了、仍執達如件、

永仁二

七月卅日

忠宗（花押）

新田宮執印殿代

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」九九二号文書ト同一文書ナルベシ〕

○ 四〇 島津忠宗警固番役覆勘狀

警固番役事、今年春分、以代官被勤仕候了、仍執達如件、

永仁三

四月十六日

忠宗（花押）

新田宮執印殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」九九八号文書ト同一文書ナルベシ〕

〔御當家四代目〕

○ 四一 島津忠宗問狀

石塚四郎入道後家妙忍代忠治申諸犬女童事、重訴狀如此、  
新田宮執印背度之奉書、不召進論人妙慶云々、早尋問實  
否、載起請之詞、可被注申候、仍執達如件、

元應二年十二月十日

(島津忠宗・道義)  
沙弥(花押)

山門郡司殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一八四号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 四二 足利尊氏軍勢催促狀

肝付八郎兼重以下凶徒誅伐事、随守護催促、可抽軍忠之  
狀如件、

建武三年三月廿八日

(足利尊氏)  
花押

新田宮執印又三郎殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一八二〇号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 四三 惟宗執印友雄着到狀

肝付八郎兼重与黨凶徒等為誅伐、御發向大隅國之間、為  
抽軍忠、薩摩國一宮新田宮執印又三郎友雄令馳参候、以

此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年四月廿八日

惟宗友雄(裏花押)

(島津貞久)  
「承了(花押)」

進上 御奉行所

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一八四号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 四四 足利直義軍勢催促狀

度々合戦之間、自身并郎從等被疵之条、尤神妙也、於恩  
賞者、追可有其沙汰、将又敦賀城凶徒誅伐事、嶋津孫三

郎相共、馳向彼戰場、可抽軍忠之狀如件、

建武四年二月十二日

(足利直義)  
花押

新田宮執印又三郎殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一八九号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 四五 足利幕府奉行入連署奉書

紀伊國冷水浦住人後藤三等申、奪取船已下勝載物由事、  
重訴狀副具如此、子細見狀、先度被仰之處、無音云々、

甚無謂、所詮、今月中可参洛之旨、相觸小河小太郎・同

弥次郎等、載起請之詞、可被注申、使節更不可有緩怠之  
狀、依仰執達如件、

康永三年二月四日

藤原



散位



山城守



執印又三郎殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二八六号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 四六 尾張義冬軍勢催促狀

大隅・薩摩兩國為凶徒退治所發向也、急速相催一族、可  
被致忠節之狀如件、

觀應貳年八月廿八日

(尾張義冬)  
左馬助



執印又三郎殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二三七四号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 四七 足利義詮軍勢催促狀

將軍家御臺所御領日向國穆佐院嶋津庄事、(重頼)島山修理亮・  
(祐光)伊東八郎已下直冬与同凶徒等、構城擲濫妨之間、可令對  
治之由、所被仰一色(範氏・道欽)少輔太郎入道也、可致合力之狀如件、

觀應三年六月五日

(足利義詮)  
(花押)

新田宮執印殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二四二九号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 四八 足利義詮御教書

於薩摩國致忠節之由、(師久)嶋津判官所注申也、尤以神妙、弥  
可抽戰功之狀如件、

文和二年三月十日

(足利義詮)  
(花押)

新田宮執印左衛門大夫殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二四七四号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 四九 一色直氏軍勢催促狀

薩摩國凶徒誅伐事、相談嶋津判官師久、可被致忠節、其  
子細可令注進也、仍執達如件、

文和二年四月廿六日  
(一色直氏) 右京權大夫(花押)

新田宮執印左衛門大夫殿  
(友雄)

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」二四七七号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 五〇 一色道猷範感狀

薩摩國凶徒退治事、令合力之由、嶋津上総入道所注申也、  
(貞久・道隆)

忠節尤神妙、可令注進、仍執達如件、

文和三年七月十日  
(一色範氏・道隆) 沙弥(花押)

新田宮執印左衛門大夫殿  
(友雄)

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」二五四二号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 五一 一色直氏感狀

薩摩國知色城凶徒退治合戰事、致忠節之由、嶋津判官所  
(前久)

注申也、尤神妙、可注進京都、仍執達如件、

文和三年八月廿九日  
(一色直氏) 右京權大夫(花押)

執印左衛門大夫殿  
(友雄)

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」二五五五号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 五二 足利尊氏御教書

凶徒對治事、致忠節之由、嶋津判官師久所注申也、尤以  
神妙、弥可抽戰功之狀如件、

文和三年九月三日  
(足利尊氏) (花押)

新田宮執印左衛門大夫殿  
(友雄)

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」二五五六号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 五三 島津師久軍勢催促狀

一色殿并大友刑部大輔攻入肥後國、被始合戰畢、仍為合

力、所打立也、来十五日以前、可被馳寄和泉城・同山門

院間、依執達如件、

文和四年三月三日  
(島津師久) 左衛門少尉

執印左衛門大夫殿  
(友雄)

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」二五七八号文書ト同一文書ナルベシ)



○ 五四 島津氏久書狀

此堺合戰事、今時分大綱候之間、憑存候、御同心候者、  
日来可為本望候、尚々憑存候、委細御返事可承候、

恐之謹言、

(貞治六年乙)

六月十七日

修理亮氏久 (花押)

謹上 執印殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二五八六号・「同前編」二一七四号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 五五

島津道鑑貞久施行状

去年十一月十日 將軍家御教書如此、早任被仰下之旨、

構要害、可被相待申御發向也、仍執達如件、

文和五年二月廿二日

(島津貞久・道鑑)  
沙弥 (花押)

新田宮執印左衛門大夫殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二六二四号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 五六

島津師久書状

和泉庄名主等引合于菊池、来朔日可寄来當所之城之由、

其聞候、彼日限以前、被馳寄候者悦入候、當國之案否此

時候欵、尚之此状到来候者、不替時御打越候者喜入候、

恐之謹言、

九月廿七日

師久 (花押)

執印左衛門大夫殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二六一五号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 五七

島津氏久安堵状

高城郡内重豊領分半分事、御知行不可有相違候、此段且

廷尉方可申談候、恐之謹言、

七月十六日

氏久 (花押)

執印左衛門大夫入道殿

(封紙ウハ書)

〔 (墨引) 〕

執印左衛門大夫入道殿 氏久

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二六一六号・「同附録」二五七六号文書ト同一文書ナルベシ、尚カッテ封紙ハ貞治七年二月三日付島津氏久契状(現五八号)ノ次ニアリ)

○ 五八

島津氏久契状

契約

右、雖以傳之說承子細候、不信用候之間、則申候早、就

其以契状如此承候之條、悦入候、向後も何様義聞得候と

も可申候、又其方にも風聞之説候ハん時者、則承候て可  
令落居候、若此條偽申候者、

當社新田八幡宮并天満大自在天神御爵お可罷蒙候、仍契  
状如件、

貞治七年二月三日

氏久(花押)

執印左衛門大夫入道殿

(友雄)  
〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」一八六号文書ト同一文書ナルベシ〕

○ 五九 某讓状案断簡并左衛門尉朝員奉書

案

(五九の一)  
(前欠)

者永所[ ]致也、於彼所等者、宗弘可令[ ]外相停也、

(雜目裏花押)

仍讓状如件、

正安貳年五月十日

(五九の二)  
新田宮執印職領内散在田島并花北村領主尼信蓮

在御判

薩摩國新田宮領内市比野村并散在田島事

就関東御教書、任重代被還補國分治部房宗海畢、兼又去

年之冬、又二郎友家掠給御下文、致濫妨之間、於鎮西有

其沙汰、蒙御下知云々、此上不及子細欵、向後於友家一

族者、競望當村事、永所被停止也、然者御年貢捌拾貫文

無未進懈怠者、不可有改替者、依領家仰、執達如件、

正安二年八月十七日

左衛門尉奉

在判

○ 六〇 島津元久安堵状

薩摩國阿多郡内五代院、同國指宿郡内石堂村、同國万徳

上井入道跡之事、今時分於被致忠節者、為祈所不可有相

違之状如件、

應永十年十月九日

(島津元久)  
陸奥守(花押)

(友念)  
執印豊前守殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」七〇九号文書ト同一文書ナルベシ〕

○ 六一 島津存忠(久)宛行状

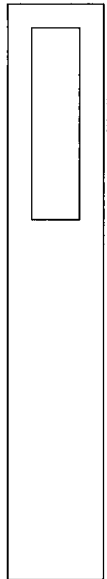
於薩摩郡十町分可相計者也、守先例、可被領知之状如件、

應永廿八年八月廿三日

存忠(島津久豊)  
(花押)

執印殿(友令)

〔本文書へ「旧記雑録前編二二〇〇六号文書ト同一文書ナルベシ」



○ 六二 執印重兼相博状案

(端裏書)

「これへるす入道まいりてそのくくのさう(相博)のしるしふみの  
あんもん」

さうはくせしむるそのくくの事

合

- 一所 さあもん殿ふるの御やしき、同くわうねんはうの  
やしき
- 一所 つや殿、同あくかゝねのやしき
- 一所 四らう殿
- 一所 みつま二らう
- 一所 くわんねんはう
- 一所 已上五ヶ所 このそのくくの代分

一所 たうくもん所の御やしき

一所 まへのその

一所 かわしりくらうのその

一所 ちやうにうたうのやしき

みぎ、くたんのそのくさうはくせしむるところなり、

たし、かやうにさうはくせしむとなといふとも、あり

にくしなともおもひ候はんときハ、もとのゆつりにまか

せて、りやうちせしむへし、又かのそのくのまへに、

ふねのつきたらんとときハ、つれうハせんれいにまかせて、

さたをいたすへししやうくたんのことし、

ふんえい四年十月廿三日

執印



(本文書ハ「旧記雑録前編」一七〇二号文書ト同一文書ナルベシ)

〇 六三 沙弥道教執印讓状

(端裏書)

「ゆつり状」

此内雖段歩、於令沽却者、一家寄合、不可令承引之

状如件、



永仁五年十一月十一日、新田宮執印職并五大院々主職内、

重友

田島并免田等を〇ゆつりあたふる所也、但一身同心の思

ひをなして、をのくちきやうせらるへし、もしこのゆ

つり状をそむきて、ことをさうによせて、惣領そしあひ

たかひにわつらひをなすへからず、よてきやうこうのゐ

らんをたゝんかために、しひちをもておく事如件、

永仁五年十一月十一日

沙弥道教



(本文書ハ「旧記雑録前編」一〇一八号文書ト同一文書ナルベシ)

〇 六四 沙弥道惠執印・同教忍友里連署田

地売券案

(端裏書)

「東郷ニ遣ス宇曾越賣券状案」

賣渡

薩摩國 新田宮執印職知行内、同國入来院中村内字宇



會越老町事

右田地之事、為重代相傳道惠也。知行無相違者也、而依有要用、代錢肆拾貫文仁、限永代、東鄉尼御前仁所奉賣渡也、

但彼水田事、聊依有子細、舍兄執印入道教并子息友里教等、兩方出契狀者也、隨而教忍令同心令沽却于同心之

間、加判刑於彼狀早、且為不審、親父重友道教讓狀并道重友教忍相傳之狀等、於正文者、為連券之間、案文仁封裏所

副渡也、任彼狀等、可被知行也、此田地者、迄于万雜公

事臨時役、自元不相懸之上者、為一圓不輸之地、可被知

行之、若又此田地不慮之外相違出來時者、本錢以一倍可

令糺返也、仍為後日賣券之狀如件、

嘉曆二年十月廿八日

沙弥友里・友郷教忍

沙弥忠兼道惠

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一四九二号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 六五 沙弥道重友教重友印・惟宗友雄連署田地

売券案

(端裏書)

「土穴免田楠本免田売券案東郷被上候讓狀書之遺之」

奉賣渡

薩厂國 八幡新田宮常見免田代引田、永利名内土穴

町并入来院内楠本免田五段事

右、件免田等者、知行無相違者也、而依有要用、代錢參

拾五貫文、限永代、東鄉尼御前奉賣渡早、然者為一圓不

輸之地、可有知行候、仍為後日之賣券狀如件、

嘉曆貳年七月卅日

惟宗友雄在判

沙弥重友道在判教在判

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一四八二号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 六六 執印友躬避狀

故日尊跡事、御口入之間、聊雖申子細候、新田宮御領内

卅六坪三反、彦八給分、宮脇園卷ケ所事、兼忍方ニ避渡

候了、於有限社役者、無懈怠可被勤仕候、至于彦八園者、

以後ニ年任質券狀、可請出候、但相互不可有違乱之義、

相違之義、仍為後日避狀如件、

正平七年十月廿二日

友躬



〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」二四五三号文書ト同一文書ナルベシ、尚花押ハ墨ニテ抹消サル〕

〔裏書〕

「吉所田四反 くす本三反 山本七反

五ヶ所蘭中ニヶ所

一火田分

一丁南郷 一丁光（富カ） 五段くすもと

五段中村 二丁東郷

○六七 沙弥願真執印讓狀

〔端裏書〕

「きちりのゆつり狀」

讓与

〔執印友令〕

豊前入道義忠所

薩摩國八幡新田宮執印職并五大院之主職之事

右、於件所職者、願真重代相傳之地也、然間次第相傳之

手継等相副而、限永代讓渡早、次所々散在之於田島等者、

本證文仁為明白之間、任證文之旨、無他妨、永代可令領知、仍為後證之讓狀如件、

應永廿年六月廿九日

〔執印友躬〕

沙弥願真



〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」九二二号文書ト同一文書ナルベシ〕

○六八 前遠江守康令讓狀

〔端裏書〕

「三郎讓狀」

雖如此讓渡、宮内五代之内ニ三町五ヶ所、薩广郡之内四町五反、くきもと一町之内浮めん五反、平田一丁、康令（期）一こハ可為計候、又計候熊少こゝろさしの分計候、熊一（期）この後者知行候へく候、かの神領おいて、そりやう一人より外ニ讓あるましく候、此旨をそむき候する人ハ、康令の子孫にてあるましく候、仍而おき文如件、

文安三年丙十二月十三日

前遠江守康令



〔康秀〕  
執印三郎所

〔本文書へ「旧記雜錄前編二」一三二一五号文書ト同一文書ナルベシ〕

○六九 新田宮執印并五大院院主職文書案

(六九の1)

北条殿

下 御判

薩摩國新田宮執印職并五大院之主職事

惟宗康友

右、件所職散在名田島等、無相違可令領掌、但于御公事者、任先例、可致沙汰之状如件、

建仁三年十月廿六日

〔本文書へ「旧記雜錄前編一」二〇二号文書ト同一文書ナルベシ、尚カツテハ第三卷ノ卷首ニアリ〕

(紙継目)

(六九の2)

(外題)

「八幡新田宮執印神主職事、且任前之例、且止狼藉、

可令知行社務之状如件、

在御判

薩摩國八幡新田宮執印左馬允惟宗

康友解、申進申文事

※(貞和五年十二月十三日付酒匂久景ノ裏書・花押アリ)  
請被殊任代々、將軍家御免許旨、重賜御判、弥致丁寧御祈禱子細状、

(紙継目)

右、謹檢案内、件八幡新田者、大菩薩崇廟之靈社、殊勝

擁衛之砌也、因之自故 大将殿御時、至于代々將軍家之

御代、於彼社領者、被止地頭守護所、于今無相違、然而

如此御代之刻、令止方々狼藉、任先例、不可有相違之由

賜御判、弥神官所司等、為致丁寧之御祈禱、粗勒子細、

言上如件、以解、

承久三年十月三日

左馬允惟宗康友上

〔本文書へ「旧記雜錄前編一」三〇一号文書ト同一文書ナルベシ、尚二五の1号ト同文ナリ〕

(紙継目)

(六九の3)

(重兼)

薩摩國新田宮執印三郎兵衛入道道教申、所職并名田島事、

訴状如此、相觸本所、可被執進雜掌陳状也者、依仰執達

如件、

永仁三年五月六日

(北条宣時) 陸奥守御判

(北条貞時) 相模守御判

(酒匂久景) (繼目裏花押)

(北条盛房)  
丹波守殿

(北条久時)  
刑部少輔殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」九九九号文書ト同一文書ナルベシ、尚九号ト同文ナリ)

(六九の4)

(本文書ハ一〇号ト同文ニツキ省略ス)

(紙綴目)

(六九の5)

去三月廿九日御奉書謹拜見仕候訖、抑左衛門大夫友雄申、所領薩摩國新田宮執印職并五大院之主職、及散在名田畠免田等安堵事、當知行無相違候、

(酒匂久景)  
(綴目裏花押)

将又可支申仁有無事、不令存知候、若此條偽申候者、八幡大菩薩御爵可罷蒙候、以此旨、可有御披露候哉、恐惶謹言、

曆應四年六月廿三日

左衛門少尉宗久  
請文  
裏判

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二一六号文書ト同一文書ナルベシ、尚三三三号ト同文ナリ)

(六九の6)

左衛門大夫友雄申、所領薩摩國新田宮執印職并五大院之主職、及散在名田畠等地頭職安堵事、去三月廿九日御奉書謹拜見仕候早、抑彼所領所職并五大院之主職、及散在名田畠免田等、當知行無相違候、将又支申仁無之候、若此條偽申候者、

八幡大菩薩御爵可罷蒙候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

曆應四年四月七日

沙弥禅庵  
請文  
在裏判

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二〇七号文書ト同一文書ナルベシ、尚六九の5・6号ハカツテハ永仁五年六月日付左衛門尉朝員奉書案(現七五号)ノ次ニアリ)

※(裏書)

「於彼状正文者、依路次難儀、留置國之間、案文仁可封裏之旨、被望申之間、所封裏也、」

貞和五年十二月十三日

(酒匂)  
久景(花押)

(コノ裏書ハ六九の2号ノ裏ニアリ)

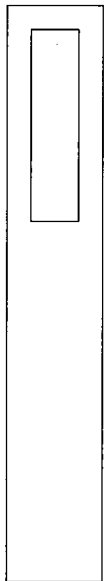
○七〇 新田宮執印兼五大院院主迎阿大間

伏案

(前欠)

(本文書ハ二三号ト同文ニツキ省略ス)

(第六卷 卷子表紙)



○七一 関東下知伏案

(前欠)

任彼例付代官畢、地頭給田參町參段也、有御不審者、  
 宣澄親類并宣澄舅平權守忠景子孫多之、可被尋問欵、  
 康和紛失狀・建久圖田帳事、依為往昔、不知及之、宣  
 澄之時結解狀事、當國之習目代相交之所者、稱公領、  
 不相交之所者、稱不輸領、就彼狀、本地頭何不致沙汰  
 哉、國分寺御下知事、依為非勸、所訴申也云々、永慶  
 等申云、西迎為行願代官之由虛言也、西迎請作土田之  
 時、行願召仕之許也、社家代々任符進之云々、行願申  
 云、西迎為行願代官否事、地頭給田有無事、可被尋問  
 國云々者、如社家所進康和立券紛失狀・宣澄治承四年  
 結解狀・建久八年惣圖帳・年々取帳目錄者、為社家之  
 進止、地頭不相交之由所見也、如行願所帶御下文以下  
 狀者、不令領知神領欵、而行願任自由押領地本之条、

難遁無道之科矣、

一年貢事

右、如御前檢校生西申者、一向為社家之進止、遂檢注、令收納之處、行願去年始企濫妨、行檢注、納取所當之間、本所年貢闕如、恒例神事退轉、去々年者百廿余石徵納之處、去年者并五十余石之条、無謂云々、如行願申者、每年自官方遂檢注、收納所當之處、寄事於左右、為致煩、依不遂其節、為全年貢、郡司代吉行遂檢注、收納所當、下行棍取畢、百廿余石事、滿作之時者不知之、去年分五十九石余也、依賃之高下、有進米之相違云々、前々自社家遂檢注、令收納之處、行願去年始行檢注、遂收納、減失年貢之条、承伏已畢、難遁其科矣、

一社家政所敷地并宮蘭白苧・桑・藍事

(紙雜目)

右、如座主觀宗申者、行願背先例、押取彼色々物畢、可被札返云々、如行願申者、社家政所事、無先例、以執印安貞二年下知狀備證文事、新儀之条顯然也、宮蘭白苧・桑・藍者、自本取畢云々者、彼敷地等社家進止

之由、見先段、然者子細同前矣、

一神王面事

右、如生西申者、彼面者、往古之靈物大菩薩之御鉢也、寬元四年八月為明所當之濟否、罷向神領之處、奪取一神王面、奉置百姓下平太之許、打破二王面畢、承久之比、依正八幡宮領帖佐鄉事、御家人良西奪取彼宮王面之間、關東有御沙汰之上、公家被行仗議之處、所奪取之罪、當大辟之由、議奏畢云々、如行願申者、神王面何物哉、不知名字、若王舞面形狀、大菩薩御鉢之由、有何所見哉、不及破損、無奪取之儀、奉置下平太許之由事、不知之、神人寄事於左右、打鼓合聲、響郡内之間、不知手足之所措、若打落狀云々、打破二神王面事、以問注奉行人康連(三替)・基氏等、被實檢之處、無異儀狀、一神王面者、奉置百姓下平太許之由、生西令申之處、不知之旨、行願陳詞、非無矯飭狀、行願或押領不輸神領地本、或遂自由檢注、令減失年貢之間、狼藉事、雖論申、不足信用、然者難遁罪科矣、

一撈拂社家政所事

右、如權太宮(大)司末綱申者、寛元三年十二月廿八日行願差遣子息三郎家用・郡司代吉行・四郎丸、為燒政所、雖令放火傍在家、無風難之間、政所者令殘之處、其後行願加下知、令燒畢云々、如行願申者、燒拂政所由事、極無實也、自本無政所、安貞二年執印下知狀事、新儀也云々者、不燒社家政所之由、行願雖論申、自餘條、行願所行、旁為無道之間、放火之条、無所遁欵、

一 打破神人福万法師頭、折宗清指、(勝友安・末光等事カ)

右、如宗清并福万法師申者、行願刈取神領田之間、為(尋カ)子細、罷向彼所之處、郡司太郎景吉・越後房・二郎大夫以下、遣數多人勢之間、福万者以杖被打破頭也、宗清者被折(其カ)中指畢、友安・末光者被付繩畢云々、如行願申者、打破(頭)折指、付繩由事、極無實也、且先年國分寺神人令付(原カ)小門退出、訴申事由間、給御教書畢、交名注文如此、(原カ)越後房・次郎大夫罷向之由申之、然者随仰可召進也、可(有御カ)尋欵云々者、打破神人福万頭、折宗清指、搦友安・末光等、論申之、

可被召對交名輩之由、行願雖令申、被實檢之(處カ)、其疵見在之間、為勿論欵、然者行願旁難遁其科矣、

一 被運取西迎稻由事

右、如行願申者、西迎請作郡領田之處、所當未進五十余(石カ)、為明子細、立點札於西迎稻畢、而神人藤平太并定使發神(人彼カ)取畢云々、如末繩申者、田所二郎吉忠西子耕作宮領之處、(刈カ)取稻、為弁所當、依刈置宮園運取畢、有未進者、可被責(カ)欵云々者、被改易行願所帶之上、不及沙汰焉、

一 兩方惡口事

右、如行願訴狀者、行願還俗之身、不可參侍所之由、師久令申(畢カ)、可被糺明也云々、如師久陳狀者、師久祖父為嶋津豊後前司忠久小舍童之由、令申畢、尤可被糺也、如行願甥二郎左衛門尉(申書カ)行願還俗之由依申之、申子細畢云々者、彼此申狀為枝葉之間、非沙汰之限矣、以前條々、子細如斯、行願所行旁難遁罪科之間、於阿多郡北方行願知行分地頭職者、被改補他人畢、至下手之輩者、召上京都、可被斷罪之由、令下知六波羅畢者、依鎌

倉殿仰、下知如件、

寶治元年十月廿五日

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」四四六号文書ト同一文書ナルベシ)

左近將監(北条時頼)平朝臣在御判  
相模守(北条重時)平朝臣在御判

〇 七二 引付衆交名注文写

(前欠)

左京權大夫  
安藝守(二階堂成藤)

宇都宮三川權守入道(道眼)

波多野因幡入道(野忠氏)

町野加賀前司

嶋津下総前司(兼)

疋田能登權守(倫篤)

飯尾左衛門大夫入道(貞兼)

三須雅樂大夫(榮成)

和田四郎入道(行快)

大野越前房

布施彈正忠(實連)

飯尾木工左衛門尉(合奉行)

飯尾大藏左衛門尉

豊前四郎左衛門尉(合奉行)

嶋田兵部丞

四番

右橋和義(石橋和義)左衛門佐  
近江入道(佐々木善親)

参川入道(二階堂行徳) 宍岐入道

撰津隼人入道(宗華)

撰津左近大夫將監(能直)

山城大夫判官(二階堂)

参川判官大夫入道

諏方大進房(内忠)

齋藤五郎左衛門尉(道兼)

雅樂左近將監

齋藤七郎入道

安富三郎左衛門尉(合奉行)

松田八郎

因幡右近藏人

松田掃部允

五番

佐渡判官入道(佐々木道善)

宇都宮遠江入道(連智)

佐々木備前守(時秀力)

中条備前司(秀忠)

下総前司(栗飯原清胤)

町野遠江權守

梶原河内守(景広)

土左宮内少輔

雜賀隼人入道(西義)

冨部周防前司(親信)

大野彦次郎入道

飯尾新左衛門尉(頼國)

雜賀掃部允(貞倫)

齋藤左衛門四郎入道

和泉三郎左衛門尉(合奉行)

矢野孫太郎



侍所

管領未定候

中条備前之司

栗原  
下総前司

正田能登權守

杉原左近將監

開闔

齋藤五郎左衛門尉

飯尾新左衛門尉

(後欠)

(本文書ハ貞和五年編成替ノ室町幕府引付衆交名ト推定サル(佐藤進一「室町幕府開創期の官制体系」『中世の法と國家』所収、四五八頁以下)、人名比定モ同論考ニヨル)

○ 七三 異國降伏祈禱劍馬等進獻文書案

(七三の1)

為異國降伏御祈、御劍一腰、神馬一疋可獻一宮由事、今年二月十一日關東御教書今月廿日到来、案文如此、於當國一宮者、新田宮与開門社御相論之間、先度令申子細於談議所之處、就近例、先可致沙汰之由、被仰出之間、新田宮依被帶近例、令進宮畢、而開門社司雖及訴訟、御成敗未断之間、任先日沙汰篇、所令進獻當宮也、依之不可有一宮治定之儀、且存其旨、且可被進請取候、仍執達如件、

正應六年四月廿日

(島津忠宗)  
左衛門尉在判

薩摩國新田宮執印殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」九七五号文書ト同一文書ナルベシ、尚七号ト同文ナリ)

(七三の2)

異國降伏御祈事、薩摩國新田宮大般若經轉讀、并御神樂用途錢十二貫一社別早速沙汰送之、可令執進社家請取之状、依仰執達如件、

正應六年三月廿日

(北条宣時)  
陸奥守御判  
(北条貞時)  
相模守御判

(島津忠宗)  
下野三郎左衛門尉殿

(紙綴目)

(七三の3)

異國降伏御祈事、薩摩國新田宮大般若經轉讀、并御神樂用<sup>(途)</sup>錢可沙汰進之由事、今年三月廿日御教書案如此、任被仰下之旨、錢拾貳貫進宮候也、可給請取候、仍執達如件、

正應六年五月十一日

新田宮執印殿

(島津忠宗)  
左衛門尉在判

(七三の4)  
進宮

銀劔一腰 文柄

御征矢一腰 津保美  
津須部尾

御弓一張 長籐

右御寶物等、自 関東被進宮之候、早速給請取、可進上  
候、仍執達如件、

正應六年五月十一日

(島津忠宗)  
左衛門尉在判

新田宮執印殿

○ 七四 国分友兼友賢重申状案

(前文)

間、忠兼得讓條、子孫相承之儀、不可有相違欵、又云、  
相互不可違乱之由乃文者、如今友兼之非據お誠置所見也  
云々、此條度々如令言上、如迎阿弥陀佛大間状者、友成  
一期之後者、於執印職者、可讓康秀今道教、其時者、康  
秀所帶五大(院)中嶋者、可讓友成子息、至此儀、子々孫々  
不可有相違云々、取、此條、兩流不令混乱之天、執印職

者、康秀道教子々孫々令相承、於五大院大中嶋者、友成  
子々孫々可令相傳知行次第明鏡也、爰今忠兼者、乍為執  
印職相承之道教子息、令押領友成相承大中嶋之条、專令  
違背曾祖母迎阿大間状早、然則非畜令混乱兩流、既是孝  
令違犯之

(紙雜目)

企也、其科惟重、況構出偽書、稱讓状之条、罪科令重疊  
者哉、而今不顧己之重科、相互不可違乱之由乃文者、如  
今友賢(友兼)之非據お誠置之由、忠兼令申之条、奸曲之至、且  
所仰正直之御善政也、凡友賢者專迎阿守大間帳、友成・  
康秀兩流不可混乱之由訴申之處、忠兼以之稱非據、如友  
賢之非據お誠置之由、令掠申之条謀計也、迎阿所誠置者、  
子々孫々不可混乱兩流之由、為最詮欵、而忠兼令混乱兩  
流之上者、如忠兼乃非據お誠置之由、所見分明哉、以  
自科讓友賢之条、理豈可然哉、次同状云、道法(友成)為嫡子之  
由、被載領家御下知事、就一方申状、被成下知欵、嫡庶  
之字無相論所見云々、

(紙雜目)

此條、道法立友成嫡子之次第、領家御下知明白之間、忠兼承伏分明也、但道法舍兄友氏者、先于親父友成、令早世早、此上者、道法立于嫡子之條、誰人可論申哉、今忠兼無相論之所見之由、稱申之條、道法立嫡子之條顯然也、同狀云、如友兼去年六月訴狀者、友教去々年十月之比死去早、年來令扶持友教、令相承 關東御舉狀以下證文等云々、仍云友教死去次第、云舉狀以下證文等相承事、可明申之旨、載陳狀之處、如今年正月友兼重解者、弘安十年十一月十一日友教令死去之由載之、友教兩度死去之由掠申之條、憚殺害造意結構欵、令相承證文之由乍載訴狀、令扶持同宿友教間、令帶持之由申之上者、殺害之後令抑留條、無異儀云々、此條、如載先解、友教者

(紙雜目)

去弘安十年十月十一日、播摩國御家人北野左衛門入道之證之宿所酒宴之時、友教与太郎兵衛尉頼兼、依當座之諍論、兩人共令死去次第、云年記、云宿所諍論、及兩人死去之段、載先陳狀了、今為十一月之由事、不存知者也、若然者、執筆之失錯欵、強依之不及所難者哉、而今忠兼

殺害造意結構之由、稱申之條、希代未聞謀言也、依之殺害造意之由、載濫陳之條、尤可被糺證人證據者哉、不出申其證者、奏事不實之科、爭可相遁、令相承證文之由、載訴狀之間、成疑殆之由、忠兼令申之條、無理至極之間、構出不實、擬令避遁御沙汰之條、不足御信用者哉、尤友教殺害之段、可立申證人證據也、同狀云、

(紙雜目、裏書「在判」)

抑留他人證文之輩、被處罪科事、為傍例欵云々、此條證文相承次第載先段早、不能重言、同狀云、友兼乍募申御家人由、本所一圓之地、望給筑後國下妻庄預所職、令殺害預所五郎兵衛尉并舍弟云々、此條前守護之時、兩方及訴陳、友賢就令申、不誤子細被注進了、是非為上裁欵、何闕訴人忠兼、可及追口哉、同狀云、友教無實子由、先載先陳了、無子息上者、嫡判證判事、為枝葉之間、不及委陳云々、此條、忠兼偽書之段、今訴訟之肝心也、仍條々謀計之企令言上内、取嫡判及證判事、有傍例之上、且迎阿讓狀仁為後證加子息等署判早、尤任其例、為向後證驗、若於為實書者、可取一門之證判之處、無其儀之條、

為謀計之企之由、先度言上之處、嫡判證判事為枝葉間、不及委陳之旨、令申之條、既卷舌于陳答早、且承伏之條分明也、次同狀云、友賢蜜懷繼母由事、無跡形不實也、責而依無陳方、掠申非據子細者也、更非御信用之限、同狀云、任諸司助由云々、此條、去弘安年中捧遊狀早、仍今度申狀位署仁毛不載之、限于忠兼、令書彼位署之條、

謀案之企也、同狀云、忠兼非指奉行入、何可取置友兼訴狀哉云□、此條、友賢望申本所由事、無其儀由、載先訴狀之處、不帶狀文旨、令承伏上者、胸臆謀言令露顯欵、同狀云、所領相傳事、宜任領主意之間、友教依無實子、讓与舍弟忠兼之條、何可為不審哉、為偽書否事者、手繼相傳仁等、相並致

(紙縫目)

淨論之時事欵云々、此條、友教自元依無實子、不与讓狀之處、今忠兼構出偽書、為讓狀之由、令申之條、希代陳詞也、且謀略之企、令露顯了、且為偽書之由、載先段上者、可為上裁、同狀云、道法立嫡子事、載狀右 upper 者、不能重言、同狀云、相向戰場之時、不論親疎、相並天馳向

事、為承前例旨、載先陳早、就之半承伏之由載申之條、用捨可為上裁云々、先度半承伏之由載申之條、今又不論申之上者、不及子細、同狀云、一門他門之地頭御家人、不差申名字之間、不能委陳云々、此條、友教者、道法・友賢二代令扶持之間、且合戰之時、付友

(紙縫目)

賢手之次第、當國中一門他門以□無其隱欵之由令申之處、不差申名字之間、不能委陳之由令申上者、隨所望所注申也、其時守護代式部三郎忠光、守護祇候人中務三郎入道、又同岩屋次郎入道、當國御家人在國司四郎道時所令見知也、可有御尋欵、其上於致各別合戰者、可捧申狀之處、無其儀上者、付友賢手致合戰之條、勿論也、同狀云、如友兼所進領掌關東御教書御返事者、大略執印職事也、又云、執印職相承仁可帶持之由事、取此條、友成・道法・友賢三代相承文書事、載先段了、同狀云、抑留件御教書等、加力如自分證文、忠兼者本所進止之仁、友兼者

(紙縫目、裏書「在判」)

御家人之由、令稱申之條、畜非破迎阿狀、奉違背 闕東御教書哉云々、此條、前後不覺申狀也、文書相承事、并忠兼本所進止次第、載先段了、且友賢所帶等事、守迎阿狀、不可混亂之由、始中終訴申之、忠兼令違背彼大間狀

早、又友賢立申 闕東御口入之先例、忠兼稱申本所一圓之由、而今以忠兼兩條謀案、讓友賢之條、存外也、且陳詞明白之間、不及巨細、同狀云、友賢古曾一紙御教書中仁立申用捨儀之間、云 闕東、云本所、共以奉違背條顯然也云々、意、取、此條、彼地 闕東御口入之條、御教書等明白之間、任先規言上 闕東、可申入本所之由令申之條、何可為奉違背 闕東本所之儀哉、將又一紙御教書中仁用捨之條、忠兼僻案也之了見也、同狀云、友賢令抑留社家重書、執印職證文等云々、詮、取、此條、載先段了、同狀云、雖為本所進止、地頭御家人相傳知行之時、無指誤之處、本所被改替之日、有武家御口入條、先例也、相傳知行證文炳焉也、令帶本所任補、令領知事者、云 闕東御式目、云先規例、無相違之處、當給人無指科、令望申之、友兼爭遁重科哉云々、此條、如忠兼所存者、無科御家人本所

被改替之時、只限此一事、在 闕東御口入之由、邪推之趣、心狹濫陳也、有理運之子細之時者、爭無御口入哉、且傍例非

(紙雜目)

一欵、況彼所帶等者、自元有 闕東御口入之先規、忠兼又構偽書、致無道押領、爭無御口入哉、而今忠兼偽書之次第、達上聞者、罪科難遁之間、無道押領、爭無御口入哉、而今忠兼偽書之次第、達上聞者、罪科難遁之間、頻痛申之條、忠兼奸謀令露顯者哉、同次云、雖為本所進止、地頭御家人相傳知行之時、以非據被改補非御家人并凡下仁等之條、有御誠欵云々、此條、闕東御口入之段者承伏了、但以非御家人凡下仁被改補之時、有御口入之由、忠兼令申欵、沉重科令露顯之時、任先例有御口入事、為勿論欵、同狀云、忠兼者本所進止之由難之、友兼者乍帶本所進止證文、御家人之由名稱之趣、招罪科欵云々、意、取、此條、忠兼本所進止之段、并友賢任先例、言上 闕東、可申入本所之由、令訴申之次第、載先段早、可有何科哉、同狀云、如天福・寬元御教書者、鎮西御家人令知行本所

進止地之處、被鎮本所非法、被誠御家人張行之旨、所見也、御家人不可知行本所進止領之由、不被誠云々、此条、御家人不可知行本所進止地之由、不申之上者、天福・寛元御教書非忠兼謀陳之潤色欵、隨而友賢理訴、何語与意相違之由、可令申哉、同状云、所被載御式目者、被誠守護非法欵云々、此条、忠兼了見之次第、

(紙雜目)

非御式目之趣存外也、同状云、諸人相論之法、讓状自他筆跡事、相當于相論競望仁之時事欵、友兼者、以為友教甥之許、不帶手繼狀、令相承證文之由、構出虛誕及濫訴、忠兼者、為友教舍弟上、帶讓状之處、以無指所難證文、暗為偽書之由稱申云々、此条、忠兼所稱申讓状之状、紕繆非一、先度一々仁令注申畢、友教者、有筆之仁也、尤可用自筆之處、何為他筆哉之由、令申之處、不及分明陳答、相當競望仁之時、可有自他筆跡沙汰之由、令申之条、希代謀言也、友賢為友成嫡

(紙雜目)

孫、帶迎阿大間帳以下證文并最明寺殿御教書等、所擬糺

(北条時頼)

明忠兼偽書也、競望尤當其仁哉、將又不帶一紙状、以一腹兄弟之儀、難備偽書實書證據之處、忠兼者、為友教舍弟之由許ヲ稱申之条、所存如何、同状云、友教加冠俗名事、弘安三年雖定實名お友近、令改名友教了、實名お依無御存知欵、被載董名お本所下知之條、何可為所難哉、不知食實名之時、或載姓許、或載董名許、或被載姓与董名之条、公家武家政道無相違云々、此條、忠兼偽書事、今沙汰肝心也、弥令露頭者哉、惟(宗)竊熊丸書載名字、

(紙雜目)

奉行所令申竊熊丸之間、請彼状文、領家所被成下知也、實名お不知食之由、載今陳状之条、先後不覺申状也、令改名友教申事、疑殆非一者也、弘安四年以前、遂加冠定名字者、争同年九月領家御下文仁可被載惟宗竊熊丸哉、謀計企令露頭之處、如忠兼濫陳者、弘安三年雖定實名お友近、令改名友教了、而實名お依無御存知欵、被載董名お本所御下知之條、何可為所難之由令申之条、謀計之企、偽書之構、忽令露頭了、其故者、忠兼所構出之偽書以後、竊熊丸令進上領家状乃位(イ)署云、惟宗竊熊丸進上伯耆左衛

門入道殿云々、就此羈熊狀、領家御下文云、大中嶋事、羈熊丸如元可令知之由、先度加下知早云々、而今領家無御存知志天被載童名之由、忠兼令申之條、眼前之奇謀也、將又弘安三年遂加冠、雖定實名お友近、令改名友教者、争令進上領家之狀、惟宗羈熊丸ト可令書哉、凡前後相違、紕繆非一、是則友教死去之後仁、忠兼為所構出之偽書之間、首尾令相違早、且所仰高察也、凡忠兼不帶一紙文書、奉掠本所、押妨非分所領之條、争可遁重科哉、仍擬申破 関東御口入之條、忠兼所存者、憚偽書露頭之故也、同狀云、於重代相傳御家人

(後欠)

○ 七五 左衛門尉朝員奉書案

(端裏書)

「本所狀」

(本文書ハ一〇・六九の4号ト同文ニツキ省略ス)

○ 七六 某請文案

薩摩國 八幡新田宮執印友雄掠訴申候神領下地押領神役對捍由事、今年二月廿九日、同三月四日御教書案、六月五日御催促狀、七月一日到来、謹拜見仕候早、抑如友雄謀訴狀者、神領下地押領神役對捍云々、此條、不知案内申狀也、号下地押領者、當宮所司座主智性房、職田益丸名内佛性八段、并友雄庶子道惠<sup>今者</sup>死去子息宗馬入道宗印分領内目公介<sup>(平)</sup>五段事欵、此田地者、自宗印并智性之手、令買得以來、於社役者、任本主智性契狀、每年無闕怠、令勤仕之間、恒例神事、無相違被遵行早、於下地者、買得知行無相違之處、閣本主等、員外友雄以

(後欠)

○ 七七 武光忍性請文案

(端裏書)

「武光大学入道請文

康永元九廿四

薩摩國 八幡新田宮執印友雄訴申候當社致<sup>(兼カ)</sup>最中致蒞田由事、今年三月四日御教書案、同六月五日御催促狀、七

(第七卷 卷子表紙)

月二日謹拜見仕候畢、抑如友雄謀訴狀者、當社御放生會  
致<sup>(兼方)</sup>取中、嶋廻田三段致<sup>(兼方)</sup>刈田云々、此條不足言申狀也、

當國南方凶徒等、以去曆應貳年六月廿日、押寄薩摩郡碓

山<sup>(守護代并忍性子息)</sup>兼材以下御方等 城、及度々合戰畢、爰号<sup>(大)</sup>神人十郎太宮

司者、随友雄催促、屬于式部藤三郎手、楯籠宮里檢見城、

差遣彼十郎太宮司以下友雄從人等、令<sup>(大)</sup>刈取兼材已下御方

人々分領早田等之間、依為<sup>(大)</sup>罪科之仁、凶徒引退之後、自

守護代酒匂次郎左衛門久景方、於彼太宮司作田等者、依

凶徒与同之科、為御方兵糧米可<sup>(大)</sup>刈取、於下作職之地者、

任實正可注給之由依被申、嶋廻田三段令皆免之旨就申之、

自守護方被<sup>(兼方)</sup>刈取畢、全以忍性令<sup>(兼方)</sup>刈田不破致<sup>(兼方)</sup>者也、仍為

披御不審、守護代久景書狀備進之、若猶有御不審、

有御<sup>(後欠)</sup>不可有其隱、國中粮藉有



〇 七八 酒匂久景注進狀

去六月廿二日、薩摩國南方御敵并蒞谷人々押寄碓山城、

及散々合戰、御敵既取破城壁桓立、攻入之時、自 八幡

新田宮御山、鎗音二三度響入于寄手凶徒等中、其時神慮

令然哉、御方軍勢乘勝致合戰之間、彼凶徒等討負引退畢、

神明貴仰而猶可奉仰者哉、仍為御不審、注進言上如件、

曆應二季八月十五日 左衛門尉久景 (裏花押)

進上 御奉行所

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二〇五八号文書ト同一文書ナルベシ)

〇 七九 島津忠恒家寄進狀

薩州郡之内知行目錄

限城

西手村之内屋敷一ヶ所

高五拾石但七拾石卷斗六升八合五勺之内



右、知行之事、先年以京儀雖勘落候、為當家繁榮武運

長久、奉寄進候、於神前可有祈禱者也、

慶長四年拾月廿八日 忠恒 (花押)

執印(友則)吉左衛門尉殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編三」九四八号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 八〇 島津家久書狀

(墨引)

昨日者此方迄預御尋候之処ニ、殊外致沈酔、即不遂参会候之事、不及是非候、委者為可申述、如此候、恐々謹言、

正月十二日

家久



執印(良友)河内守殿

御宿所

(本文書ハ「旧記雜錄附錄二」四〇二・四一九号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 八一 平田兼宗・村田經安連署寄進狀

新田宮

薩摩郡干畑名之水田萩原之内

五反

為御神事領、奉寄進之狀如件、

文明十年三月六日

村田肥前守

經安 (花押)

平田右馬助

兼宗 (花押)

執印殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一五二〇号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 八二 村田經安・平田兼宗連署書狀

(墨引)

今度相論之事、以有怒之儀、先々被差置候、神妙之至候、仍惣官職之事、任前之筋目、可有執務候、社司神官等、如先規可随御下知之旨被仰出候、以此趣、可有御成敗条可申由候、恐々謹言、

五月十日

(平田) 兼宗 (花押)

(村田) 經安 (花押)

執印殿

(本文書ハ「旧記雜錄附錄一」一一八・四三二号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 八三 伊集院忠棟外二名連署書状

(裏ニ墨引)

猶々各八城へ被登せ候へ共、貴所之事者、御造営ニ  
別而御入魂肝心たるへく候、

就御造営千部会之侘、各御申ニ而候之致、乍去御感無余  
儀子細候之間、不用有間敷様仰達肝要候、題目御祈禱之  
儀候之条、難澁無之、入魂可目出候、恐々謹言、

二月八日

(町田) 久倍

(平田) 光宗

(伊集院) 忠棟

御拜進

執印河内守殿  
(良友) 御宿所

(本文書ハ「旧記雜錄附録一」一三〇号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 八四 鎌田政近・比志島国貞連署書状

覚

伏見御屋形御普請ニ付被召上候夫盛之事、三千石ニ付老  
人ツ、盛にて、依其拾石ニ付四十四文ツ、出錢相懸候、

其元社家中之高六百斛分出錢、近日中ニ此方へ可被納候、

殊之外御急用之儀ニ候条、聊御由断有ましく候、以上、

(慶長九年) 後八月廿八日

(國貞) 比志嶋紀伊守  
(政近) 鎌田出雲守  
(藍印)

川内にて

執印吉左衛門尉殿  
(友則)

まいる

○ 八五 島津忠長外三名連署寄進状

御拜進領

薩州

市来 鹿兒 知覽

之内

市来之内大里村

上野門

高四拾石五斗

茄兒之内

本寺屋敷

高拾六石九斗三升四勺

同所

宮原やしき

高拾四石七斗九升七合八勺

同處

鹿兒原屋敷

(紙雜目)

高拾七石四斗八升二合五勺

知覽滴水別府之内

浮免

高拾石三斗三升

合百石四升七勺

右知行之事、此度御念願為御成就被相付候、勿論公役之儀者、可為諸寺社御同前候、本目錄之事者、從京都御下國之砌、可被仰付候、先以為御祈念、證文如斯、

慶長七年

拾二月廿四日

鎌田出雲守

政近(花押)

比志嶋紀伊守

國貞

樺山權左衛門尉

久高(花押)

圖書頭

忠長

○ 八六 伊勢貞成署判証狀

目錄

薩劔高城郡麓村之内

一 浮免

はす町

中田 四反貳畝 五石八斗八升

馬場、源太

同所

中田 三畝六步 四斗四升七合九勺六才 金藤

合分米六石三斗二升七合九勺六才

右知行六石者、六月御祭田不足之由候間、被相付旨候、仍如件、

慶長十年

正月廿九日

(兼印)

伊勢平左衛門尉

執印吉左衛門尉殿

(友則)

○ 八七 御遷宮覺書

覺

- 一 御遷宮來廿八日ニ相定候事、
- 一 惟新様御越之儀者、來廿五日ニ相定候事、
- 一 御光儀ニ付前を以目出度存候通、使にて可被申上候事、
- 一 御振舞可被申通、平左衛門尉殿迄被申上、尤ニ存候事、

(伊勢貞成)

一就夫包丁仁、御前之御道具等被申請候而可然候事、

已上

(慶長十一年カ)  
九月廿日

○ 八八 權執印外二名連署請文

書物

今度執印休左衛門と我々相論之儀申出候、先休左衛門被  
申候者、新田社家主取、前々より老人ニ而仕之由被申候、  
我々申候者、休左衛門と同役ニ而、諸事相勤申候由申上  
候、左候而御與所へ被召出、双方之口柄并古来より格護  
申候諸證文御覽被届、休左衛門理運ニ被聞召究、向後休  
左衛門可随下知ニ之由、被仰聞候、此上者申分無之御座  
候、休左衛門下知ニ難澁申間敷候、此旨可然様ニ被仰上  
可被下候、以上、  
寛文三年卯六月十九日

新田社家

千儀 (花押)

大檢校 (花押)

權執印 (花押)

肝付伴兵衛殿  
(兼座)

川上(久運)野殿

嶋津安藝守殿  
(久雄)  
御筆者中

○ 八九 京泊船改条目

京泊口出入之船改置目之事

- 一他國之船着岸之時者、早々出合、先以一人もおろさず、
- 船頭、水手、中乗、積荷等迄細可被相糺事、
- 一旅人内場へ罷通候ハ、先之宿主へ墨付被相付、帰宅
- 之砌者、亭主之墨付持来候様ニと可被申付事、
- 一地下船、從他國帰帆之時、便船之人於有之者、為其船
- 頭、役人へ點合可申事、
- 一從所中他所へ出船之改、別而念を可被入事、付連々被
- 成御法度候商賣物、堅被出間敷事、
- 一自然急用之儀ニ付、他方より早打等、夜中なとニ来着
- 候ハ、案内者を付、可被指通事、
- 右之条々、若於違背者、到役人可有其沙汰者也、以上、

慶長二十年正月四日

(比志島國貞)  
紀伊守



權執印文書古寫七自元亨四年八月二十七通至元弘三年八月二十七通

○ 九〇 權執印良暹申狀并具書案  
(九〇のし)  
八幡新田宮權執印良暹重言上

欲早仰御使、被打渡、為阿多院田本名主子息新大宮(可)、  
所入流質券御館田北園一所并年々押領物事

副進

一通 領家御教書 元亨四年八月廿八日

右、件園事、亡父妙慶存日、令言上 領家之日、可尋成  
敗之(旨カ)、就于被仰下、先日御催促早、然任傍例、仰御使  
被打渡□園、於年々押領物者、任員教、為糺給之、言上  
如件、

元徳三年二月 日

(九〇のし)  
權執印妙慶申、阿多本名主子息泰忠所入置質券園一所事、  
申狀具書如此、早且令尋成敗、且可被注申之由、被仰下

候也、仍執達如件、

元亨四年八月廿八日

紀御在判

謹上 新田宮執印殿

○ 九一 領家下知狀案

在御判

新田宮權執印妙慶与阿多五大院田内弥平太入道跡名主久  
頭代重僧相論、書生得分并算失段米等事

(紙雜目)

右、如今年七月十八日執印道敵注進狀者、番三問三答問、  
續訴陳可令注進之由、雖相觸(重カ) 留案續進之云々、

如訴狀者、雖多子細、所詮、彼院田内弥平太入道跡書生  
得分、算失及段米、久頭知行以後、元應元・貳兩年抑留  
云々、如重僧陳者、彼(未カ)進分者、下人愛王女泚籠妙慶聲  
許之間、懸置可便補彼得分由、約束畢云々、抑留彼得分  
之条、不及異儀、可便補所懸置之女童由事、為胸臆之間、  
非沙汰之限欵、次應長二年未進事、重僧不相綺之由、雖  
申之、自元對久頭訴申欵、隨而難澁之篇、及注進之上者、

旁久顯罪科難遁欵、然則於元應元・二兩年書生得分并算  
失段米等者、遂<sup>(結解力)</sup>斛、任員數、可令糺返之狀、依仰下知  
如件、

元亨四年八月廿八日

紀清兼

○ 九二 權執印妙慶申狀案

(端裏書)

「妙慶訴狀案文 本名主并泰忠等書生得分未進事元亨五  
閏正月日」

權執印妙慶謹言上

阿多新大宮司泰忠親父蓮道未進拾伍石事、不日可弁濟  
由、雖及御下知度々、一向泰忠不致其弁上者、難遁違  
背罪科者欵、次延慶貳年書生得分、公文所御切符内、  
元名主拘分算失段米以下壹斗壹升六合云々、然お自延  
慶貳年至于元亨四年、拾陸ヶ年不致其弁条、不可說次  
第也、云以前未進、云自延慶二年以來未進、不日可勘  
渡由、欲蒙御成敗事、  
右、未進等事、云度々御下知、云公文所御切符、旁明白

也、然お令違背 領家御下知、背公文所御切符、一向泰  
忠懈怠之条、無所遁罪科者哉、所詮、彼未進等、任員數、  
不日可糺渡之由、為蒙御成敗、言上如件、

元亨五年閏正月 日

「就此狀御書下未見出不審也」

○ 九三 權執印妙慶讓狀案

讓与 當權執印所

□<sup>(一カ)</sup>新田宮權執印職、惣檢校職、惣殿上職

□<sup>(五大院カ)</sup>寺下司政所職、大檢校職、書生職

一薩摩國宮里鄉勢万名參分貳方、但此内參分壹民部房讓  
之、讓狀在別紙、 關東御公事以下諸公事等、且依先  
例、且任鄉例可勤仕、  
□<sup>(一カ)</sup>同國高城郡内字世戸口伍段坪令知行天、御公事以下任  
先例可勤仕、  
一滿熊丸仁自余  
略之、  
一此外自余略之、  
□<sup>(當カ)</sup>宮五大所職内田島等、弟土毛仁面々所讓与也、守彼

面之讓狀、不可致違乱、皆成子息思、可宛不便、將又所

從并所持物具足等、弟土毛仁讓与外、田島免田皆當權執

印可令進退、彼等仁所讓田島所從具足等、聊不可致違乱、

若<sup>(弟九)</sup>□□等中仁有令申異儀輩者、於江口殿御前、遂評定、

任正直、可止弟等異儀、聊不可違、仍讓狀如件、

正中參年卯月廿二日 權執印妙慶在判

○ 九四 權執印妙慶讓狀案

讓与 權執印良暹所

薩摩國宮里郷内勢万平田一町

同國高城郡内世戸口五段

同國莫祢院内恒本田三段并牧野蘭貳ヶ所<sup>但莫祢田蘭者女子</sup>等一期之後者可知<sup>行良</sup>暹、

右田蘭者、妙慶重代相傳所領也、然間、相副御下知以下

證文等、依為嫡子、所讓与良暹也、至于子之孫之、無他

妨領掌之、於關東御公事等者、任先例、可令勤仕、仍讓

狀如件、

正中參年卯月廿六日<sup>八</sup>

權執印妙慶在判

○ 九五 大隅新三郎久顯書狀案

(端裏書)

「大隅新三郎殿書札 嘉曆元十二四」

態と令申候、五大院田内知行四十六段分御年貢、此程不

被致其弁候、何様候乎、急之被弁候者、可為御意候歟、

適書生分も少く未進之由申候、互ニ御結解之<sup>(上カ)</sup>可有治

定候、每事期後信、恐之謹言、

十二月四日

(大隅新三郎) 久顯判

謹上 權執印殿

○ 九六 鎮西御教書案

(端裏書)

「筑後入道殿ニなさるゝ御教書の案文」

薩摩國新田八幡宮雜掌道海申、造宇佐宮用途事、訴狀

副具、如此、子細見狀、於當社領、無所課之次第、使者宗

覺令披見支證狀等、令正校云々、早實否可被注申、仍執

達如件、

嘉曆貳年七月五日

(北条英時)  
修理亮在判

筑後入道殿

○ 九七 鎮西御教書案

(端裏書)

「佐渡次郎殿ニなさるゝ御けうその案文」

薩摩國新田八幡宮雜掌道海申造字佐用途事、訴狀副具、如此、子細見狀、於當社領、無所課之次第、使者増成令披見支證等、令正校云々、早實否可被注申、仍執達如件、

嘉曆貳年七月五日

修理亮在判

佐渡次郎殿

○ 九八 新田宮雜掌道海申狀案并具書案

(九八の一)  
(端裏書)

「道海庭中狀案」

八幡新田宮雜掌道海護庭中言上

欲早被召下薩摩國分助次郎入道(友貞之)、然申狀、可被經急速

御沙汰旨、被仰下當御奉行人大保六郎入道契道方、道

然抑留 上宣以下六波羅御教書正文等事

副進

三通御教書案

二通先進早、  
雜掌道海申成之、

右、於當 宮御領者、先規被止 宇佐造營役之由、被成

上宣以下六波羅御教書於社家之間、云往古、云當先度、

聊不致其弁、随而彼 上宣以下正文兩使宗寬等被披見之

處、道然猶以抑留之間、為一番御手、山城三郎入道崇盛

御奉行就訴申、所被成御教書於道然也、其後

(紙雜目)

被渡成武六郎貞兼方、及使節御教書畢、而貞兼關東參上之間、道然就申渡彼沙汰於契道方、被成還召文於執印之由承及之間、被閣不退在津雜掌道海、被成還御教書於執印之段、御沙汰參差眼前也、適道海雜掌之条、備進御教書分明之上者、不及御不審、雖然事繁之間、御奉行人被思食涉欵之間、所詮、下給道然申狀、可明申旨、連日令



申之處、敢以不被召下之、剩可待使節請文到來之由、返答之間、空送數十ヶ日之条、無術之次第也、早可被召下道然申狀之旨、欲被仰下矣、次貞兼奉行之時、彼 上宣以下正文事、兩使宗寬、令正校否、被成度之御教書於兩御奉行筑州方之處、不被申明分左右之間、重可被成御教書之旨、捧訴狀之處、如契道返答者、道然令申成還召文於執印之上者、

(紙雜目)

彼請文到來之時、相並可被成御教書於兩奉行人之旨、引付一同之由返答之条、是又難堪之次第也、貞兼奉行之時、被成三ヶ度御教書上者、有滯遲、今更可被押御教書乎、適為神訴之間、難被黙止者也、然早被成重御教書於御奉行人筑州方、被召出請文、為經急速御沙汰、庭中言上如件、

嘉曆三年七月 日

(九八の2)

八幡新田宮雜掌道海申宇佐造營用途事、重訴狀如此、薩摩國分掃部助次郎入道友真力、善背催促、不持参 院宣以下六波羅施行正文等云々、早相尋實否、載起請之詞、可被注

申也、仍執達如件、

嘉曆二年七月五日

隱岐三郎左衛門入道殿

(北条英時) 修理亮御判

〇 九九 新田宮沙汰証人交名注文案

(端裏書)

証人交 (名案力)

注進 於新田宮(審力) 上宣等國分助

二郎入道之然所持之間、自社(審力) 可買之由、令申之条、

聞及否可有御尋人(審力)

合

一 澁谷人々(入米院重基) 新平次入道(為重) 弥平三入道 車内又二郎入道(重幸)

副田北尾 寺尾 中村地頭 副田山口 楠本地頭代

一 當國守護代酒勾平内兵衛入道子息兵庫允

一 高城郡

地頭代大藏左衛門入道 温田地頭代衛門次郎入道 觀音丸地頭代青(恒力) 收納使大郎兵衛入道(道) 在國司兄弟等

武光弥三郎入道 (孫兼) 舍弟伴三郎入道 上村六郎入道 舍弟三郎入道

一 薩摩郡内

一分地頭代本田民部入道 一分地頭小田原弥二郎入道 郡司吉富又太郎入道 成枝領主上野四郎太郎

(紙雜目)

舍弟三郎四郎 成富太郎 同舍弟彦二郎 山田九郎入道 延時 富長 (赤佐水性仙) 光富又二郎入道 白濱三郎入道 同五郎入道 同孫六入道

一 宮里郷地頭式部孫七 三分二地頭高崎二郎入道 郡司

九郎入道 益富松本入道 弥五郎入道 又三郎入道

又太郎入道 又二郎入道 弥四郎入道 三郎二郎 弥

六入道 禅理房 安養寺院 (主鶴王丸性仙) 高江石塚三郎入道 同

又太郎入道 同平七入道 同小四郎入道 同三郎四郎

又四郎入道 大三郎入道 五郎太郎入道 紀平三入道

紀藤五入道 長崎寺淨觀房 源朝房 正末三郎五郎入

道 堀切六郎太郎入道 了性房 六郎二郎入道

一 市来 (時家) 孫太郎

一 東郷三郎左衛門入道 子息左衛門入道 鳥丸在國司四郎入道

右、為有御尋交名人注文、粗言上如件、

嘉曆三年

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一四九八号文書ト同、文書ナルベシ)

〇一〇〇 鎮西御教書案

(端裏書)

「延時四石御供米事、使節御教書案到来、嘉曆三八月廿三日」

薩摩國八幡新田宮雜掌申、御神拜内神馬并供米等事、重

訴状三通如此、(高純) 魔嶋郡司矢上左衛門五郎、薩摩郡司次郎

入道跡、延時又三郎入道等、背度々下知、不致沙汰云々、

尋問違背實否、載起請之詞、可被注申、仍執達如件、

嘉曆三年七月三日

(北条英時) 修理亮御判

(東郷重清) 澁谷又次郎入道殿

(奥書)

「此御教書者、社家訴狀ハ三通上タルヲ一通ニ被成、鶯嶋・薩戸郡司次郎入道跡分訴狀ハ在公文所之、四石御供米延時ヲ訴狀許書之、

嘉曆三年八月廿三日於公文所書之、

〇一〇一 權執印良暹請文案

就于平氏女并子息熊次郎丸、大夫律師琳慶相論尼妙心□  
實否事、去二月十三日御教□、(書)今月四日御催促狀、同五日  
日(應以カ)拜見仕候早、抑琳慶□(書)尼妙心由事、全以不存  
知□、(候)□(以此カ)旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元徳二年三月十二日

新田宮權執印□(良暹カ)

〇一〇二 新田宮雜掌道海申狀案

(端裏書)

「新田宮雜掌申 元徳二八五」

薩摩國 八幡新田宮雜掌道海謹言上

為當宮御領阿多五大院田内弥平太入道跡名主大隅新三郎(久願)、違背 領家御下知并執印催促狀、抑留四土陸

段(所備米)□、書生得分、算失段米等間、雖可訴申守護方、

依有差□、(合)□(所)令言上公方也、然且依先例、且任 領家

御下知并執印催促狀□(之カ)旨、欲蒙御成敗事、

副進

一通 鎮西御教書 守護差合所見備之、正和四年七月廿四日(裏花押カ)

二通 領家御下知 元亨四年八月廿八日 同年同月同日

一通 執印催促狀 延慶二年十月晦日

一通 書生得分支配狀

一通 可弁書生得分等由名主蓮道狀

右院田者、於每年檢注地、書生權執印 重代職引募算失段米等之

条□(先)例也、爰彼院田名主田所次郎入道蓮道止檢注使入部、

有限可弁□(書)生得分等之由、自請申之以来、迄于當名主等、

致其沙汰之處、限久願抑留彼得分物等之間、於社家公文

所相番訴陳、被注進彼狀等於 領家、雖蒙裁斷御下知、

久願募武威、不致其弁之上者、且任先規例、且依御下知

等之道理、云年々抑留分、云向後段、可究濟之由欲蒙御

成敗矣、次四土陸段所當米久願押取事、子細雖多之、所

詮、任相傳知行之旨、停止久願濫妨、任元應御下知、熊

丸可令知行、所押取之所當米者、遂結解、任員數、可究  
濟熊丸之由、雖預 領家御下知、為久顯非分知行名主繼  
不及其沙汰之條、罪科不輕者哉、然早任彼御下知等之旨、  
為蒙御成敗、粗言上如件、

元德貳年六月 日

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一五五〇号文書ト同一文書ナルベシ)

〇一〇三 新田宮雜掌道海申状案

(端裏書)

「新田宮雜掌申 元德二七廿八」

薩摩國 八幡新田宮雜掌道海謹言上

為同國宮里鄉内安養寺院主導門房正海、入置當宮濱殿  
修理祈浮免田伍段代引田下二郎丸内山本新開田三段於  
質券、乍請取彼修理祈米粃等、依不致其弁、雖可訴申  
守護方差合間、所令言上公方也、然早任請文旨、欲蒙  
御成敗事、

副進



(裏花押)

一通 御教書 守護差合所見

一通 正海請文

右、正海入置彼引田於質券、乍請取修理祈出舉米粃等、  
不致其弁之條、無謂之次第也、適質券地者、濱殿修理祈  
浮免田代引田也、有子細正海令知行之、入流彼出舉米等  
質券之上者、早任請文之旨、為被勘渡社家、粗言上如件、  
元德貳年六月 日

〇一〇四 鎮西御教書案

薩摩國新田宮雜掌道海申段米以下事、訴状副具如此、子  
細見狀、早可明申也、仍執達如件、

元德二年八月五日

(北条英時)  
修理亮御判

大隅新三郎殿

〇一〇五 寺家政所下文并富曆手繼状案

(一〇五の一)

□(寺)家政所下 新田宮所司神官等

仰下参箇条

□(二之)可早任先例、牒送國衙、企出聽、令勘合當宮例名常見

浮免田百五十町事

右、件御名田、如例文者、御建立以來三百余歳之間、

天長地久御願、為講經供田立用免無相違御名田也、而

今任用各為貪利潤、寄事於有國威、背先例、不勘合之

条、尤有神慮恐之事歟、早付任用廳官、任先例、可勘

合、若有遁避者、可忿言上為經奏聞也、

〔カ〕可早停止字別符五郎忠明地頭政所職事

右、忠明所行甚以不敵也、何号政所、恣陵磔(磔)神民、損

亡境內哉、旁以非常也、早停止忠明所職、以静秀可用

政所職之状、所仰如件、

一可早任先例、當國內万得所領田畠等為宮領、且宛神事

用途、且調進御年貢事

右、如訴申者、前沙汰之人兼俊之子孫、今構事於謀計、

被相語横人、令讓沙汰之由者、事實者、停止彼等沙汰、

為宮領可致沙汰之、

以前条事、任下知之旨、可致沙汰之、敢勿違失、以下、

永萬元年七月 日

檢校法印在御判

〔一〇五の二〕とミまろわたしませ候(政所)まんところのせうもん、まい(証文)すし(枚)ちまい(枚)か事

右、件せうもんハ、せんそさうてんなりといえとも、い

まにをいてハ、ほんすさすのおんほうにまいらせ候了、

もしこのせうもんのるいそを神人にたひ候といふとも、

たれのひとにてもあれ、もちさせたまふへからず、よて

こうたいのために、てつきくたの事し、

〔後代〕にんち(手鑑)にねん正月十九日

とミまろ在判

しやうこんほうのまと所(元券)のうりけん(券)のあん

ほんのうわかき(元券)にあり

元徳二十月廿日 書之、檢校御房所持案文以テ

書寫之早

〇一〇六 鎮西御教書写

〔一〇六の二〕薩摩國 八幡新田宮雜掌道海申免田老町御供米事、重訴

状如此、不應裁許云々、無謂、任先下知状、遂結解、可

被究濟也、仍執達如件、

元徳三年五月十日

〔北条英時〕  
修理亮御判

嶋津下野三郎兵衛尉殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一五七四号文書ト同一文書ナルベシ)

(紙雜目)

(1062)

薩摩「國八幡新田」宮雜掌「申」免田御供米事、重訴状

(如) 此、裁許之後雖催促、不叙用云々、無謂、任先下知状等、遂結解、可被究濟也、仍執達如件、

元徳三年七月九日

(北条英時) 修理亮 (花押)

嶋津下野三郎兵衛尉殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一五七九号文書ト同一文書ナルベシ)

(紙雜目)

(1063)

右文書式通、其方家所持之處、就御用御記録所江被召揚、本書無相違致臨写、可相渡旨、依被仰付如件、

御記録奉行

町田仲右衛門

延享元年子十月廿八日

俊雄 (花押)

川上平右衛門

親央 (花押)

新田宮

權執印

〇一〇七 新田宮雜掌道海申状案

(端裏書)

新田宮雜掌

薩摩國 八幡新田宮雜掌道海重言上

嶋津三郎兵衛尉實忠令對捍 當宮免田壹町 御供米間、

可被弁勤旨、就于訴申、以去年<sup>元徳</sup>十月廿五日預御下

知處、送而兩年不被遣其道上者、任定法、被經御沙汰、

欲糺賜年々抑留 御供米等子細事、

副進

一通 御下知要段

右、御裁許先訖、然早為糺賜年々對捍 御供米等、重言

上如件、

元徳三年五月 日

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一五七六号文書ト同一文書ナルベシ)

〇一〇八 新田宮雜掌道海申状案

(端裏書)

薩摩國 八幡新田宮雜掌海道重言上

嶋津下野三郎兵衛尉實忠背度々御下知、于今不被遣其  
道上者、任定法、被經御沙汰、欲糺賜年々抑留物、  
當宮免田壹町御供米等間事、

副進

一通 追御下知案

右、子細御裁許先訖、然早為糺賜年々抑留御供米等、重  
言上如件、

元德三年六月 日

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一五七七の2号文書ト同一文書ナルベシ)

〇一〇九 新田宮五大院文書案  
(二〇九の1)  
(端裏書)

到来正文者公文所在

御判

家公文(所下カ)

薩摩國新田宮五代(大)

書(文カ)

被仰下旨、随御使所勘、留守

参洛、有限御年貢已下神用 未進懈怠、可有其沙汰

間事、

右、當別宮者、鎮西五所別宮之專一、宮寺一圓進止(之カ)社

領也、爰一期領主(藤原為雄)二条宰相入道家去五月廿六日御他界之

間、依當門跡之家督、且任御契約、且就被成下綸旨、壇

前檢校法印御房朝清所有御管領也、仍帶彼綸旨之案并本

所御下知等、被差下御使者也、随御使之所勘、守被仰下

之旨、所司神官沙汰(人)已下輩、令隨身地下文書等、企参

洛、有限御年貢已下可被進濟也、更不可有不法懈怠、兼

又御使經廻厨雜事、上洛衣裳、草手、任先例、可有其沙

汰者、社家宜令承知、不可違失之旨、依領家之仰、下知

如件、

元德參年六月十一日

左衛門尉藤原在判

前肥後守平朝臣在判

前淡路守藤原朝臣在判

(一〇九の2) 八幡宮領山城國新免轉讀田地、并薩摩國新田宮五代院、  
土左國田野庄、同國八柵庄事、二条宰相入道契狀之趣、  
被聞食畢、相互向後不可有相違之由、天氣候也、仍執達  
如件、

元徳三

三月十一日

左中(吉田)弁冬長

壇前檢校(朝博)法印御房

(一〇九の3) 八幡宮寺領薩摩國新田宮五代院事、 綸旨并領家御下知  
如此、子細見于狀候欵、早任被仰下之旨、所司神官名主  
已下、帶地下文書等、念々可被企參洛也、次御年貢已下  
事、如員數、可被沙汰進 八幡之由、所被仰下候也、仍  
執達如件、

元徳三年七月一日

前肥後守平朝臣在判

新田宮五代院所司神官沙汰人名主等御中

此三通正文在公文所在之、

〇一一〇 新田宮雜掌道海重申狀并具書案  
(一〇六一)

薩摩國新田宮雜掌申、當宮修造新并段米事、重申狀二通  
如此、宮里導門房・大隅新三郎等、背度々催促  
實否可注進之由、先度仰之處、不事行云々、早速可申左  
右也、仍執達如件、

正慶元年八月十日

(北条実時)  
修理亮

御判

莫柵郡司入道殿

(一〇六二) 薩摩國 八幡新田宮雜掌道海重言上

同國宮里導門房、背度々召文、令難澁問、莫柵郡司入  
道被尋問違背實否、依新法、重可相觸由被仰出上  
者、任定法、欲被經御沙汰、  
造新米事、

(裏書アリ)

〔裏在ニ之〕

副進

一通 (御カ) 教書案教通先進早、



右、子細言上先訖、然早急速為被經御沙汰、重言上如件、

元德四年七月 日

(一一〇三) 薩摩國新田宮雜掌申當宮修造新米事、重申狀如此、宮里

導門房背度之催促之間、尋問實否、可注進之由先度被仰

了、早速可申左右也、仍執達如件、

元德三年七月二日

(北条英時) 修理亮御判

莫祢郡司入道殿

案 (御教書力) 宮里導門房事 阿多段米事

〇一一 新田宮本神人等名帳

(端裏書)

「元亨三八月十日守護代酒勾殿被請取早在□□狀」

薩摩國壹宮

八幡新田宮本神人等名帳事 權執印

一廳座分宮仕六人檢校一人

宮仕僧勝源子息源融 宮仕僧增敵 宮仕僧運心

權宮仕親宗 權宮仕淨宗 權宮仕慶

一檢校道覺

三昧六人

新檢校慶意 順檢校成重 權檢校弁

道檢校道蓮 重檢校安光 淨檢校忠

行事僧二人

宗圓檢校 行專檢(校)

檢校職六人内大宮司二人

三郎大宮司藤原季友 正檢校道

乘檢校乘慶 源平太宮司春

了檢校慶寶 定檢校慶明

別當僧五人

別當僧正法 別當僧正慶 別當僧

別當僧忠順 別當僧榮金

御殿守五人

殿守随心 殿守乘一 殿守

(紙雜目)

(本紙ヨリ雜紙四枚ニ裏書アリ)

殿守道智 殿守鏡明

一講衆座分三昧三人

喜道檢校 隨行檢校

良圓檢(校)

下部三人

十樂法師 勢樂法師

宗智(法師)

一神官座分御盜取二人

太郎大宮司廣山久宗 中江大宮司橘□

繪所大宮司一人

內藏清成

神人職司二人

下檢非違使火寸中原定宗 下檢非違使火寸中(原力)  
行烈(列)司三人內火寸一人大宮司二人

火寸高橋定廣 大宮司江本友永 大宮□

御部神御曾木王檢校五人

一天兒屋根神御曾木春日範繩(總)  
今者清子息  
□

二大玉命御曾木清原光末

三天鈿女命御曾木清原正次

四石凝姥命御曾木伯佐定信(佐伯)  
今者子息定有

五玉屋命御曾木藤原定清

御馬所神人十五人內神馬副五人  
神馬職十人

檢校遊計安弘 太郎檢校藤原國房

德王檢校高階朝宗 馬三郎檢校藤原季治

孫太郎檢校藤原兼光 大四郎檢校大藏種持

五郎檢校平吉房 藤檢校源兼末(今者)  
子息  
□

弥五郎檢校橘宗員 新五郎檢校平基平

平八檢校八木氏行 紀四郎檢校河內□

六郎檢校八木氏常 三郎檢校平兼□

八郎檢校河內恒行

御取物神人

御劔持神人三人

上村藤四郎大宮司藤原友弘 高江大宮司布井□

十郎大宮司藤原為永(今者)  
子息實弘

御天蓋持神人三人

大宮司平景成 大宮司源有□

大宮司佐伯持廣

(紙雜目)

御差波持神人三人

火寸楯國定

火寸安部武頼子息

大宮司小野惟員

大宮司三善光成

御前火寸二人

紀太郎火寸紀永季

大宮司田上景隆

平八火寸佐伯行親

白杖神人十五人

御阿久羅持神人三人

檢校清原守房

檢校藤原定光

大宮司藤原基治

大宮司中原定親

檢校源持成

檢校文子息定廣

大宮司大江景忠

檢校中原義親

檢校物子息澄平

御輿阿久羅持神人三人

檢校平久國

檢校紀正道子息  (正カ)

大宮司源信成

大宮司在原宗能

檢校平道平

檢校三善元家

大宮司平政資

檢校三宅景康

檢校藤原顯元

御前拂神人火寸二人

檢校田中久則

檢校伯親隆

(紙縫目)

二郎火寸安部家宗

藤火寸伴良清

檢校藤原季秋

一御幡并唐幡持神人十二人内唐幡持四人

御鉾神人十九人

火寸藤原恒員

火寸平保尚

橋次檢校橋正親子息  正安

太郎檢校財為光

火寸社清時

火寸安部高頼

馬太郎檢校財光重

清次檢校清原季國

火寸春道季親

火寸三善經有

二郎檢校平國家

源三郎檢校源

火寸平範房

火寸藤原資信

三郎檢校秦  (定カ)

平八檢校平行吉

火寸秦友平

火寸平包助

(紙縫目)

稻本檢校紀信國

馬三郎檢校伴安光

藤四郎別當藤原康國

權次郎別當酒井篤平

又六檢校源顯守

彦三郎檢校社重頼

六郎別當藤原俊秀

八郎別當山邊忠利

源次郎檢校財季宗

又五郎檢校縣長光

清次別當清原春季

中別當文正義連

石太郎檢校平末光

又次郎檢校錦國政

草六別當平成國

紀藤別當都兼親子今

彦次郎檢校紀家吉

彦六檢校橘永行

權別當中原定永

新次郎別當平助實息

百卅人  
藤九郎檢校藤原安秀

御鏡磨神人十人

一命婦座分

檢校平宗頼

檢校文部恒平

左市草部氏女

右市藤原氏女

檢校佐伯道康

檢校藤原教時

中座市平氏女

田所市中原氏女

檢校藤原教成

檢校秦重信

八立命婦八人

檢校季久顯久

檢校橘持村

(舞力) 市藤原氏女

二命婦上部氏女

檢校平朝恒

檢校三宅高宗

草道命婦藤原氏女

藤平命婦藤原氏女

修理神人八人

藤次檢校藤原家久

庄命婦田上氏女

千与石命婦財氏女

紀二郎檢校秦守正

平太檢校平頼景

龜松命婦秦氏女

元夜又命婦錦氏女

草次檢校草部定持

藤内檢校平常吉

懸司命婦八人

屋須命婦源氏女

平五檢校源國永

文四郎檢校大中臣胤員

湯田命婦内藏氏女

能樂命婦藤原氏女

別當職神人十人

財福命婦田中氏女

德石命婦大中臣平氏女

物童命婦大中臣平氏女

(紙雜目)



黒房命婦平氏女 虎一命婦藤原氏女

命婦職司一人

四郎大宮司平實光今者實末子息

樂所神人六人

祢宜弥藤大夫上部宗清 祝太郎大夫藤原幸□

弥太郎檢校藤原持光 三郎大夫上部師俊

藤四郎檢校平久國 新大夫上部清行

一小社二十四所大宮司二十四人

平重繩 臺清有 秦利平

丹治成定 中原弘範 藤原忠澄

藤原道季 廣田時敦 大藏種里

小野惟政 小野惟能 源成連

平忠顯今者忠末子息 大江明資 三善成藤

平田氏頼 源景仲 高階定春

坂上則房 藤原親信 草部道利

(紙雜目)

平氏弘 藤原為清 橘國仲

小社命婦二十四人

虎鬼命婦平氏女 田尻命婦藤原氏女

乙命婦清原氏女 石重命婦中原氏女

徳夜叉命婦中原氏女 但馬命婦田口氏女

勝命婦藤原氏女 宮童命婦物氏□女

若一命婦伴氏女 福增命婦氏女

土与石命婦丹治氏女 周防命婦源氏女

持命婦藤原氏女 田口命婦藤原氏女

有增命婦平氏女 師大命婦綾部氏□女

彦満命婦菅原氏女 朔命婦平氏女

倉満命婦宗像氏女 姫鬼命婦財氏女

鬼増命婦平氏女 福犬命婦藤原氏女

土佐命婦秦氏女 龜童命婦藤原氏女

御供所神人十二人

切手檢校藤原道行 棚所檢校平正秀

大宮司源景純今者景房子息 大宮司藤原直信

大宮司酒井弘顯 大宮司平道助

大宮司清原教隆 大宮司丹治正□

大宮司田上成里 大宮司清原親□(次カ)

大官司平親秀

大官司平頼忠

檢校田口重仲

檢校坂上是枝

曹司五人

御炊藤原氏女  
(曹司脱之)

高島曹司源氏女

檢校藤原清實

檢校坂上是親

土橋曹司藤(原)氏女

馬場曹司春日氏女

檢校源助重今者子息助俊

檢校三宅久平

田嶋曹司元氏女

檢校中原成元

檢校中原成秀

權曹司五人

檢校綾氏頼

檢校平忠成

(紙雜目)

松石曹司安部氏女

姫若曹司平氏女

檢校清原春秋

檢校清原春國

土与石曹司伴氏女

若童曹司源氏女

檢校小槻持清

檢校藤原為政

助 命婦平氏女

檢校秦頼助

檢校源基末

作手神人二人

一風車立神人一人

紀平檢校紀俊道

藤八檢校曾祢重元

五大政所役

一御放生會宮下荷輿丁十二人社役

一雌立神人一人

一御行同還御荷輿丁十二人國衙役

國分寺別當役

一猿田彦大神御車引神人二十五人

(紙雜目)

檢校藤原基方

檢校丹治友景

一雄立神人一人

檢校丹治俊政

檢校平資連

泰平寺別當役

檢校春道國有

檢校源親平今者子息親□

一社頭拂除神人五人

曾祢吉國 物部重永 平道□

草部道貞 安部為光

一御神領所々定使神人五人

高城郡定使大官司紀親平 五大定使大官司藤□

大中嶋定使大官司平家國 阿多定使大官司□

市比野定使大官司秦忠願

右、所司神官講衆内侍之外、神人等名帳、任神□注

進、言上如件、

元亨三年八月 日

元徳三年八月 日 重注進之死去跡者、任被仰下、

參百十九人在之、

〇一二二 何人百韻連歌懷紙

(元カ) 亨三三五夜

通夜之時

(賦) 何人連哥

□ やかすめる月 □ 和

□ きよならて □ 平

□ くるし小河の □ 如

□ るゝみつハこけ □ 舟

□ 行たもとも □ 名

□ たつ野邊の □ 如

□ いまいるへき □ 舟

□ くなきぬる秋 □ 如

檜原よ □ (以上表、以下裏)

□ ゆふ日のかけそかた □ 平

□ なミちかき浦のなか □ 和

□ しほくむあまの □ 平

□ 身をかくすとまのい □ 名

□ 庭をうちにて □ 一重きるきぬ

□ ほかハみな雪のうつ □ ほりもせハけれハ

□ つまきとるへきかた □ かこふまつかき

□ 又ミるもさきつゝき □ ミて道もなし

□ くもとさくらハたゝ □ ハしられす

平

名

舟

如

礼

平

名

和

平

舟

如

名

舟

如

平

[ ] なみ **に** うく かす **ミ** ハ  
 [ ] う **ゑ** に **な** かる **山**  
 [ ] 谷 **あ** ひの **ゆ** ふ **した** 風  
 [ ] す **ゑ** も **つ** **す**

[ ] よ **そ** に **あ** ら **は** れ **て**  
 [ ] 河 **の** **ミ** つ  
 [ ] の **五** 月 **雨** に  
 [ ] つ **る** **か** け **ハ** し

[ ] き  
 [ ] きり **く** **す**  
 [ ] あ **さ** 衣  
 [ ] あ **る** **か** け  
 [ ] や **な** ひ **く** **ら** ん  
 [ ] れ **て**  
 [ ] な **し**  
 [ ] よ **る** **ふ** ね  
 [ ] く **れ** に **け** り  
 [ ] ひ

[ ] 弁  
 [ ] 礼  
 [ ] 平  
 [ ] 礼

如 平 和 平 礼 名 礼 如 礼 名 平

礼 平 礼 弁

[ ] あ **こ** え  
 [ ] の **く** も **や** 嵐  
 [ ] ふ **る** **き**  
 [ ] し  
 [ ] く **つ** れ **た** **る** **き** **し** **の**  
 [ ] こ **ま** を **と** **よ** **め** **て**  
 [ ] う **ち** **い** **つ** **る** **ハ** **ぬ**  
 [ ] な **み** **た** **な** **か** **ら** **も** **閑**  
 [ ] と **り** **の** **も** **あ** **く** **る**  
 [ ] か **ね** **て** **わ** **か** **れ** **を**  
 [ ] あ **ふ** **こ** **と** **の** **ま** **れ** **な** **る**  
 [ ] 人 **め** **や** **は** **つ** **る** **か** **つ**  
 [ ] か **く** **れ** **か** **を** **た** **つ** **ね** **て**  
 [ ] か **ら** **た**  
 [ ] ま **つ**  
 [ ] た **の** **み** **を** **か** **く** **る**

[ ] つ **せ**  
 [ ] ら **ん**  
 [ ] も **よ** **ふ** **ら** **ん**  
 [ ] た **た** **む**  
 [ ] え **の** **松** **か** **け**  
 [ ] ま **さ** **ら** **ん**  
 [ ] け **り** **や** **ま** **さ** **る** **ら** **ん**  
 [ ] こ **ゆ** **る** **あ** **き**  
 [ ] を **い** **そ** **く** **月** **か** **け** **に**  
 [ ] し **む** **あ** **か** **つ** **き**  
 [ ] 中 **ハ** **な** **け** **か** **れ** **て**  
 [ ] ら **き** **の** **か** **ほ**  
 [ ] す **む** **も** **わ** **ひ** **し** **き** **に**  
 [ ] 世 **を** **は** **の** **か** **れ** **よ**  
 [ ] の **こ** **す** **ら** **ん**  
 [ ] ゑ **の** **あ** **し**

名 平 礼 名 礼 如 礼 平 和 名 名 名 平 弁

(以上表、以下裏)











(次ニ二句、裏折端ニ三句脱カ)  
心つくしにうき

をしるゆへ

(以上表、以下裏)

たのめつるゆふへの

かねの一聲に

井

こすやうらみやふかく

ならまし

道

あすまでハけにのこる

へき花ならす

家

雪をおひたる庭

の梅かえ

道

一日

寂十

井十九

平十五

家十九

寛廿

道十七

元應二六十一

(本連歌ノ傳紙四枚ハ横ニ半折サレ表裏トシテ用イラレ一句ハ二行書、現在一枚ニ展ゲテ複製サル)

〇一一四 権執印氏具書案

正校早

今度騒動之間、被進子息於代官候之由、承候早、仍執達  
如件、  
(俊正)

元亨四

十一月十日

(島津) 貞久在判

新田宮權執印殿  
(良通)

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一四二〇号文書ト同一文書ナルベシ)

(一一四の?)  
依京都御騒動之事、任御教書之旨、薩摩國御家人宮里郷  
一分領主權執印良暹子息三郎二郎俊正令馳参、就御着到、  
迄于今月十七日在津仕候、以此旨、可有御披露候、恐惶  
謹言、

元徳三年十月十七日

紀俊正在裏判

承了在御判

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一五九五号文書ト同一文書ナルベシ)

〇一一五 新田宮雜掌道海申状案

(端裏書)  
(みカ)  
「□つとみのめんでんの申状案 初度」

薩摩國 八幡新田宮雜掌道海謹言上

為同國薩摩郡光富又次郎入道頼圓、同子息孫三郎入道  
不知、自去嘉曆三年抑留當宮御立用内勢万勤免田伍段  
法名  
所當米每年壹貳石二斗伍升無謂子細事

右免田者、為 天長地久御祈禱祈、自往古于今無相違處、  
頼圓同子息孫三郎入道不知等、令對押押彼免田米間、御祈  
禱忽擬令退轉之条、難測神慮、然早被法名札返年々抑留所當  
米、於向後者、致未進懈怠者、可處其咎之由、為預御裁  
許、恐々言上如件、

元德四年七月 日

〇一一六 新田宮雜掌道海申状案

(端裏書)

〔新力〕  
〔田宮雜掌道海重状〕

(薩摩) 國 八幡新田宮雜掌道海謹言上

〔為〕 同國薩摩郡光富又次郎入道頼圓、同子息(孫三郎) 入道  
不知、自去嘉曆三年抑留當宮御立用内勢(万勤) 免田伍段  
法名

所當米每年壹石二斗伍升無謂子細事

(右免) 田者、為 天長地久御祈禱祈、自往古于  
(裏花押アリ) 頼圓同子息孫三郎入道不知等、令押(押)押彼免田米間、御祈  
禱忽擬令退轉之条、難測神慮、然早被札返年々 抑留所當  
米、於向後者、致未進懈怠者、可處其咎之由、為 預御裁許、  
恐々言上如件、

元德四年七月 日

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一六〇九号文書ト同一文書ナルベシ)

〇一一七 權執印良暹着到状案

薩摩國御家人新田宮權執印(良) 暹、依世上動乱事、馳参令  
在京候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元弘参季七月三日 僧良暹上

進上 御奉行所

承了 御判

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一六四四号文書ト同一文書ナルベシ)

〇一八 權執印妙慶申狀案

(端書)

于時元弘三年八月 日

(本文書裏花押コレニ同シ)

於正文者隨身上下、仍案文



(紙雜目)

留之早

(紙雜目)

八幡新田宮權執印兼五大院寺政所妙慶謹言上

欲早且任先規、且依證文道理、蒙御成敗、五大院寺御

立用職田以下所務条之事

副進

一 通 故執印中務丞康兼外題狀

貞永元年十二月廿日  
五大院寺立用職田任  
先例以得田可募由事

二 通 關東御下知内取要、自余略

建長五年四月十七日  
文永三年八月廿六日  
不依所務年記由事

右、五大院寺御領田者、為政所之沙汰、令下作于百姓、

請每年檢注、而以定得田之内、被宛行御立用職田、於余

殘所當米者、被徵納公文所之条、證文等分明也、然お故

康兼所務之時、以得田引募立用職田之後者、号無得分、

故永慶妙慶親父幼少之刻、任雅意留檢注、以下地耆町、被押

宛于得田耆町分之間、政所得分莫太令減少之上、号上折

令弁濟公文所於米耆斗之条、旁違先例之間、無謂之由、

永慶連之雖申之、不及叙用、仍欲令參訴京都之日、任先

例、可募得田由、去貞永元年十二月廿日午被出

(雜目裏花押)

康兼外題、猶以不合于得田、然間雖含愁訴、自當國在國

司方、被押妨彼政所職、連之成其煩之間、自然罷過者也、

不依所務年記之傍例分明之上、五大院寺御立用等也、難

被准人物者哉、令達上聞者、爭任先例募得田、可致嚴重

勤之由、可不預御裁許哉、爰去正安年中可遂檢注之由、

被加催促之間、雖立申先規之次第、被下御教書之上者、

令違背欵之由被申之間、奉成恐、先遂其節之刻、妙慶於

當知行田地者、為得田分之上者、雖不可有饜膳役、任近

年例、令勤仕二立一前許者也、此外自余所司職田、徵使

田以下藏町、及牟多等之分、饜上下拾余前之程、令支配

之間、面之勤其役早、今年又可遂其節之由令催促、正安

饜仁猶可加增之旨相觸之、頻苛責之条、為難治之處、自

執印方、遮而条之事書令進覽、被訴申之間、所令言上子

細也、先段如申、依先例可有檢注者、尤任先規、以定得田、可被合立用職田者也、依近年之例者、又米耄斗許可被請取者哉、遂檢注、以得田被合立用職田事、同時之例也、何可有捨之儀哉、所詮、任先規、可遂檢注之由、被進申之上者、如先例、以定得田、合立用職田等、被押置之田地等、如本返付妙慶、可致嚴重動之由、為蒙御下知、粗言上如上件、

正和二年十月 日（裏花押）

〇一一九 新田宮緣起（卷子）

（二一九のし）

日本國薩州高城千臺可愛陵新田宮八幡大菩薩緣起

夫我朝日本國者成劫初起之濫觴、日月方現之權輿也、昔國常立尊如葦牙而化為神已來、六代九神陰陽涇洞不知隱去之處焉、慘舒闐然誰辨顯來之時矣、暨伊弉諾・伊弉冊二尊降下馭馭盧嶋、先生大八秋津洲草木之祖、次生大日靈貴月弓之尊、三千國土肇建、爰彰人物寒暑之序、三才日月終成、已立君臣父子之道、然則十方世界以我國為祖宗、五行星辰以我國為生處、至于地神第五之祖彥波瀲尊第四御子神武天皇、始有人皇稱、於是主上繼天尊之苗萬々葉、攝臣承天兒之胤千々葉、因茲國名日本君號天皇、所以支那象尊之國新羅鷄貴之州、若聞我國名、若聞我君號、莫不引手當額至誠凝心者也、又瑜伽云、東有小國、純大乘機、要決云、日本一州悉期成佛、加之華嚴般若頗見我國之奇靈者也、大聖之金言、智人之玉句、仰信尤有憑據、誰敢生孤疑乎、抑此國有五畿七道六十六州、東西五月南北三月、四海蠻夷悉皈皇德、三韓王侯自稱臣奴、其中西極南界有一州、郡名曰薩摩、是則天尊瓊々杵尊最初降來



之時、見塩土翁而構城壁雉堞起高城千臺宮之處也、可愛陵山現在高城千臺之名未改、此尊治三十一萬八千五百四十二年、既云天降即可淨居梵種、因之遊止之處、梵號薩摩之名未改易、夫薩者妙義又大悲義也、摩者法義又大智義也、然則妙法蓮華最深秘密之身處、大日覺王瑜伽理智之心城可名薩摩、千臺者一心即八葉中臺一心即百界千如故也、當知是處古佛道場轉法輪砌耳、不知神世七代者、即過去七佛歟、又不知新田八幡者即秘密八葉歟、如彼拘留孫佛入滅之後、佛惠比丘苦行終九十五種外道、皆因佛法而起、今亦如此、瓊々杵尊隱寂之後、彥波瀲之尊葬斂之卒置酒亭祭之禮、(享)朱絃楚越之樂雖在神道之儀、皆是佛々作々古法也、夫天尊釋尊同日種姓東神西佛何有異途乎、又可愛陵八幡宮者即天尊圓寂塔也、所以記云、此尊立國之神聖創業之天祖也、是則天照大神與高皇產靈之孫也、故曰室孫命、二祖特鐘愛以崇養焉、遂欲為豐葦原中國之主、然彼地多有螢火光神及蠅聲邪神、故高皇產靈尊召集八十諸神、問可撥平彼邪鬼之者、僉曰天穗日命傑神也、仍降之、此神佞媚于大己貴神素戔嗚尊子、國作之神也、及三年不報聞、

仍降遣其子大背飯三熊之丈人、還順其父不報聞、次又降遣天稚彥、賜天鹿兒弓天羽々矢、此神又吾欲馭其國、娶下照姬(願國玉之女也)留住之、是時奇之、乃遣無名雉伺之、其雉飛降止於天稚彥門前湯津杜木之杪、時天探女見而謂彥曰、奇鳥來居桂杪、彥乃取鹿兒弓天羽々矢射斃之、其矢洞達雉胸而至高皇產靈之座前也、其矢染血、尊曰、昔我賜彥之矢也、蓋與國神戰而然歟、即取矢投下、其矢落下中彥之胸上立死、是後更命群神議之、僉曰、經津主神下總國香取神時武甕槌神今常陸國鹿嶋神也、二神降到出雲國五十田狹小汀、拔十握劍倒植於地踞其銜、問大己貴神曰、天神欲降皇孫、故遣我二神駢降平定、汝意如何、對曰、當問我子、將報命、是時事代主神好遊行釣三穗之碇、仍遣使者告神勅時、謂使者曰、今天神有勅、我父宜避、吾亦不可違、古語拾遺云、大己貴神・事代主神與小彥名神苦戮力、一心經營天下并皆奉避小彥名神高皇產靈之子遂逝常世、又事代主神女後世為國母也、二神乃復命奏此旨、即以平國時所杖之廣矛授二神曰、吾用此矛卒有治功、天孫若用之治者必當平安、今我將隱去、于時高皇產靈尊以真床追衾覆於皇孫使降之、注一書曰、天神遣二神經津

主武甕槌也、先行驅除降カ還復曰、皆已平竟、又說曰、大物主及事代主神八十萬神昇天陳其版順之由、于時高皇產靈尊勅大物主神、汝若以國神為妻、吾猶謂汝有疎心、故今以吾女三穗津姬配汝為妻、宜領八十萬神永奉護、乃使降云云、是後天神乃賜天忍穗耳尊八坂瓊玉及八咫鏡草薙劍三種寶物曰、永為天璽、所謂神璽鏡劍是也、又說云、是時天神手持寶鏡祝之曰、吾兒視寶鏡當猶視吾、可與同床共殿以為齋鏡云云、復以五部神、天兒屋根命・大玉命・天鈿女命・石凝姥命・玉屋命、因勅曰、豐葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可為王之地也、宜尔就而治焉行矣、寶祚之隆當與天壤無窮矣、又說、天忍穗耳尊居於虛天而生兒、號瓊々杵尊、因有奏曰、欲以此皇孫代親降、故以天兒屋根命等及諸部神悉皆相授、且服御之物一依前授云云、古語拾遺云、宜大玉主命率諸群神供奉職如天上儀、仍令諸神亦與陪從、復勅大物主神、宜領八十萬神永為皇孫奉護、仍使大伴遠祖、來目部遠祖前驅云云、先驅者還白、有一神居天八達仍衢、其鼻長七咫、背長七尺餘、口明耀眼如八咫鏡而絕然作赤酸醬、即遣從神往問、時有八十萬

神皆不得自勝問之、鈿女命乃露其胸乳、抑裳帶於臍下而咲曠向立、是時衢神問曰、汝何為然耶、反問曰、天孫所幸之路居之者誰也、衢神對曰、聞天孫應降、故奉迎相待、吾名猿田彥大神、鈿女復問、汝應到何處、天孫應到何處耶、對曰、天孫當到筑紫日向高千穗檮觸之峯、吾應到伊勢之狹長田五十鈴川上、因曰、發願我者汝也、故可以送我而到之矣、鈿女還詣報狀、皇孫乃離天盤座、排天八重雲、稜威之道別々々、而天降於日向襲之高千穗之峯矣、即到於吾田長屋笠狹碕之時、其地有一人、號事勝國勝長狹注一書云、伊弉諾、皇孫問曰、有國耶、對曰、在焉、請尊字亦名垣土翁任意遊之、故皇孫就而留住矣、又記曰、瓊々杵尊治天下後葬日向昔三州同名日向、今薩摩是、或記云、和銅元年立薩摩州、今云河合者誤也、可愛陵云云、夫二神特崇養、故以此尊可名可愛尊、因之其處名可愛陵也、御葬斂之後、至于神武天皇元年辛酉、百四十七萬三千九百三十四年也、自神武天皇即位至于當今建保甲戌千八百七十三年也、問、今者既云八幡宮、何謂天尊瓊々杵尊乎、答、此尊尤可申八幡也、昔天照太神與素盞尊誓約之時、八坂瓊之玉變作五人男子、其第一是此尊之父忍穗耳之尊

也、此尊降來之時、天神與八咫鏡而祝曰、汝見此鏡當猶見吾同床共殿云云、八之字自得其意、幡者此尊母命栲幡千千姬也、尔即幡字因母也、鏡與幡其義一也有深義、所可問、所以星霜運而百萬餘、雖不委天尊十號、神人傳而曰、八幡宮須仰信真理一法、故知天照太神之御孫苗可名八幡也、尔則我八幡新田宮者是自天照太神第三代、彼八幡宇佐宮自天照太神第二十一代、又八幡正宮或說、陳大女王夢見日光所照有娠孃而生云云、若尔自彼陳已後纔得六百余年也、但於陳有前後若十二侯之中陳歟、今陳大王者前後難知、若前陳是及千五百年、因茲雖同一孫、前後高下自可知者也、抑此處為體四神相應靈龜以象其山、五氣具圓仙人則棲此嶺墳土揉、色色廟樹現光々萬乘天子崇敬田累代刺史欽仰地、但有陵岳巖瑞殿頽壞而舊如何、聞仙洞再得復故宮、斗藪瑛昌宿緣被引宮止當宮、感悟嘖々軒帝華胥夢、靈應數々穆王虐變宮、仍以註記之、願神尊佛天廻慈眼、垂悲愍、瑛昌謹記、

建保甲戌三月 日

〔一九の二〕  
奉寄進新田宮御縁起一卷、藏御寶殿、深秘以不可為亂失、神人等敢勿怠慢焉、

寛文五乙巳

大守光久公命（弟）

鎌田藏人

仲春十日

藤原正勝拜

〇一二〇 奉納事書（卷子）

這縁起一軸、先人鎌田藏人欲寶納

神龜山新田宮不果到予四世、於茲、故匱巾之奉 神前而

遂其素志矣、

鎌田隼人正芳

寶曆八年戊寅八月十五日

〇一二一 九鬼嘉隆外三名連署禁制（高サ三三・七櫃）

禁制 宮内

兵船軍勢、乱妨

狼藉放火堅令停

止候、此旨相背輩

九鬼大隅守（嘉隆）（花押）

脇坂中務少輔

（花押）

可加成敗者也、  
(天正十五年)  
卯月廿七日

加藤左馬助(嘉明)(花押)  
小西日向守(花押)

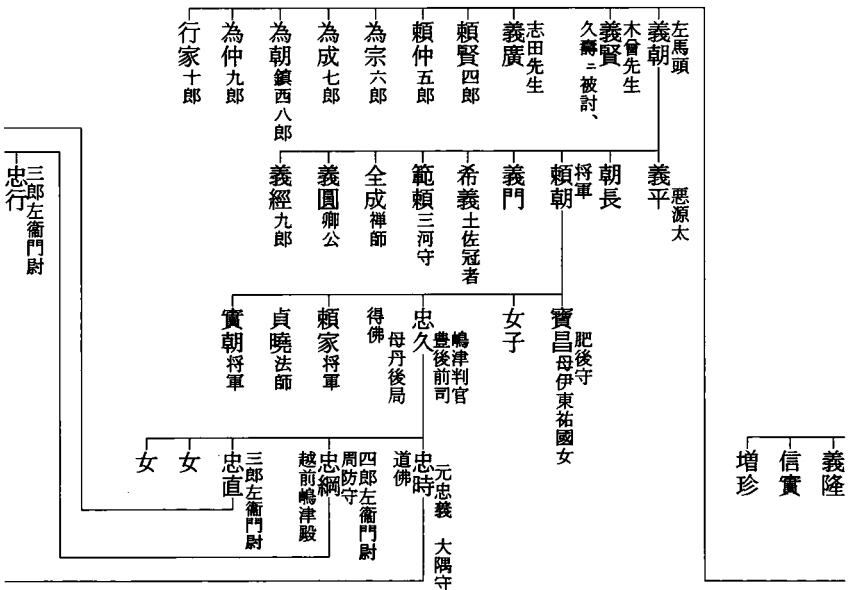
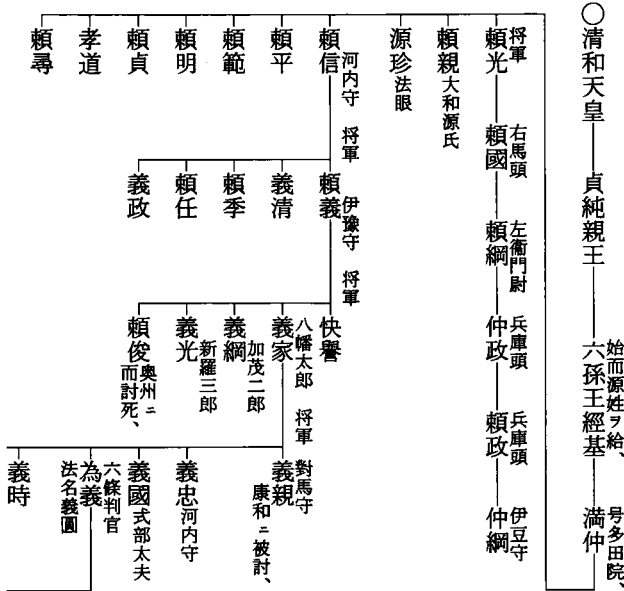
(本文書ハ「旧記雜錄後編」二二八六号文書ト同一文書ナルベシ)

野久尾家文書

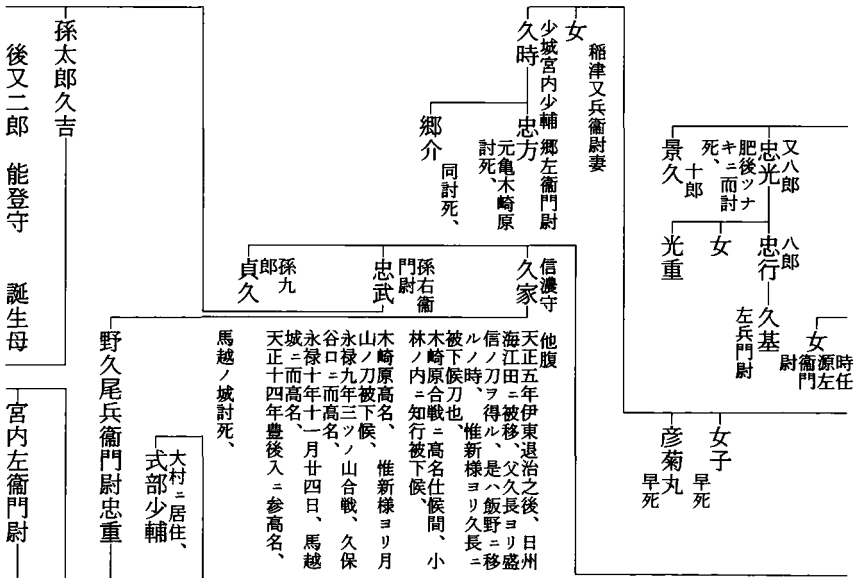
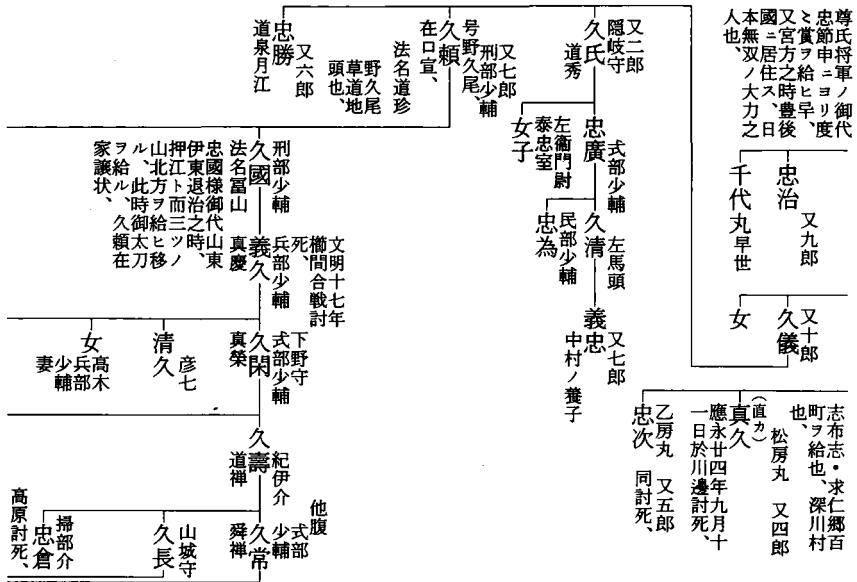
〔ハッ紙〕  
四拾三箱五

○ 一 和泉物領家之系図 (卷子)

△和泉物領家之系圖









日州真幸院飯野ノ住士田向喜助女

久吉蒙命去加久藤、而後真幸院于吉田移住、

○文祿元年壬辰三月、義弘・

久保俱ニ渡朝鮮國勞軍務、此時久吉陪從、多戰高名焉、

○慶長三年戊戌十二月、義弘

公父子自朝鮮國直到城州伏見之時、久吉陪隨焉、

同五年庚子九月、石田治部少

輔三成逆亂之時、義弘公從

濃州関ヶ原帰入隅州帖佐之城、久吉從高駕焉、

○家傳ニ曰、久吉住于真幸院吉

田之時、義弘公感久吉・同

所土境田伊豫守朝鮮且又石田

一亂之軍勞、以賜采地於久

忠重無世子、由是

為養子連續當家、

自清敷樋脇移住、

又宮内左衛門尉

無繼子故斷絶也、

女子

桑波田氏之妻

女子

平山兵衛門尉

武次之妻

吉・伊豫兩人也、伊豫守子孫

到于今在吉田、境田林右衛門

尉号滿末、余問此恩賜之亶於

滿末、答曰、賜采地兩人分明

也、伊豫守ハ拜載水流村之内

二十八斛云云、莊内入高名、

久吉依 公命移住柳水流之小

城、而後病死、法号了覺

○家傳ニ云、薩州郡於樋脇號野

久尾之有在名、且又日州三山

北方於號野久尾有在名、二所

何於欵為根本号野久尾也否亶

難定、雖然考ルニ、西目ノ方於

為本号野久尾欵、

○久吉從朝鮮國歸朝時、朝鮮人

之補來、而後ニ者真幸院吉田

之成住士、岩奇氏(略)之成後嗣、

于今有其子孫吉田、到末世ノ

子孫為名覺、今記之早、

久堅

孫左衛門尉

誕生母

忠武二男 号野久尾、加久藤住士

真幸院飯野住士田向喜助女

日州於加久藤死去、四月十九日乙酉年、法名翁

竿

女子

真幸院加久藤住士兒玉清兵衛尉妻 母上同胞、

久建

孫助 刑部大輔

誕生母

真幸院飯野住士田向李之介女

久建早世、依無世子使弟六兵衛尉久覺為後嗣、

女子

加久藤住士赤崙藏丞妻

母同上、

久覺

字彦三郎 六兵衛尉

母同上、

兄久建無世子故相續久建家、

景盛

母同上、

諸縣郡加久藤二之宮大明神座主二之宮寺住持也、

貞享五戊辰正月九日遷化、年五十歲

久覺

彦三郎 六兵衛尉

實ハ孫左衛門尉二男也、為久建猶子、

日州真幸院加久藤住士

貞享<sup>(四年)</sup>丁卯年十月廿日死、法名金露紅月居士

久矩

孫右衛門尉

誕生母

正保三季戊七月廿六日、加久藤住士竹之内江右

衛門尉女

久矩雖為加久藤之住士、移住隅州菱刈郡湯之尾、

從湯之尾元祿十六<sup>(一七二九)</sup>申甲極月帰住加久藤、

女子

薩州郡曾木住土折田孝右衛門尉妻 母同上、  
慶安四卯年誕生、

女子

隅州菱刈郡本城住土原口有右衛門尉妻 母同上、

女子

菱刈郡馬越住土時任長右衛門尉女 誕生母

延寶二卯年四月廿二日出生、同所住土原口新三郎  
妻

久該

長之尉

延寶六未曆二月十二日誕生、 母同上、

久現

六兵衛尉

元祿三午年五月廿八日誕生、 母同上、

久敦

六右衛門尉 式部少輔 誕生母

隅州桑原郡吉松住土蘭田肥前守女

寛文<sup>(十)</sup> 戊年七月十九日、享年七十三死、

法名覺應淨心居士

篤吉

民部右衛門尉

日州吉田住土連續田口家、

母上同胞、

女子

真幸院吉田住土宮田李之丞妻

母上同胞、

重義

勘左衛門尉

真幸院馬関田住土連續蘭田家、

母上同胞、

重賢

勘解由左衛門尉

母上同胞、

日州馬関田住土連續蘭田家、

義治

貫兵衛尉

母上同胞、

諸縣郡吉田住土連續龜澤家、

久敬

字孫八郎 孫兵衛尉 誕生母

諸縣郡真幸院吉田住士竹田千左衛門尉女

寛文十一亥曆六月十三日、年四十一死、

法名青山淨慶居士

母寛文十戌年九月廿六日死去、六十余歳、

法名月江妙心大姉

女子

真幸院加久藤住士蘭田藏之丞妻 母同上、

久救

字彦三郎 慶兵衛尉 母同上、

實久教之二男、號野久尾、真幸院吉田住士

女子

隅州桑原郡吉松住士兼重妻 母同上、

女子

真幸院吉田住士下嶋氏行次妻 母同上、

久兼

彦市郎 慶兵衛尉 堅物尉 誕生母

真幸院加久藤住士内田右馬尉女

久繼

長四郎

母同上、

久家

孫之進

母同上、

久決

字千太郎丸 狩野 紀伊介 誕生母

日州馬関田住士森六兵衛尉女

元禄二己巳年九月廿五日死去、三十六、

法号秋月道光居士

久決无世子、因是讓家督於弟六右衛門尉久根、以

連續當家、

初盛仁 中比盛禪

法印覺阿

母同上、

字式部卿 明曆二丙申天四月十四日誕生、

大隅郡田代寶壽院住持、且又菱刈郡馬越黒坂寺住

持職、次薩州市來院大日寺右同、

且亦奉為綱貴公并又三郎様御息災延命、御子孫繁昌、國家鎮護奉修行灌頂黒坂寺住持内也、

奉修練初法談 吉貴公并忠休(維忠)公御武運長保、國內安全故也、謹言是大日寺住持之内也、是和泉氏之中興也、

久根

字彦三郎 式部少輔 六右衛門尉 母同上、

兄久決依無世子、相續久根遺跡為家督、

母法名涼月妙性大姉 正徳二壬辰十月十七日遷化、

八十歳

久侶

長二郎 六右衛門尉 千左衛門尉 母同上、

初久緊 寛文三癸卯誕生正月、

女子

真幸院吉田住士米田八左衛門尉妻 母同上、

久次

長二郎

誕生母

日州真幸院吉田住士岩下城之介女

早世 七月廿九日死、

好久

孫左衛門尉

元禄十丁丑六月十七日誕生、

母同上、

早世 八月廿三日死、

孫三郎

元禄十三庚辰七月廿五日誕生、

母同上、

久根

彦三郎 六右衛門尉 式部少輔

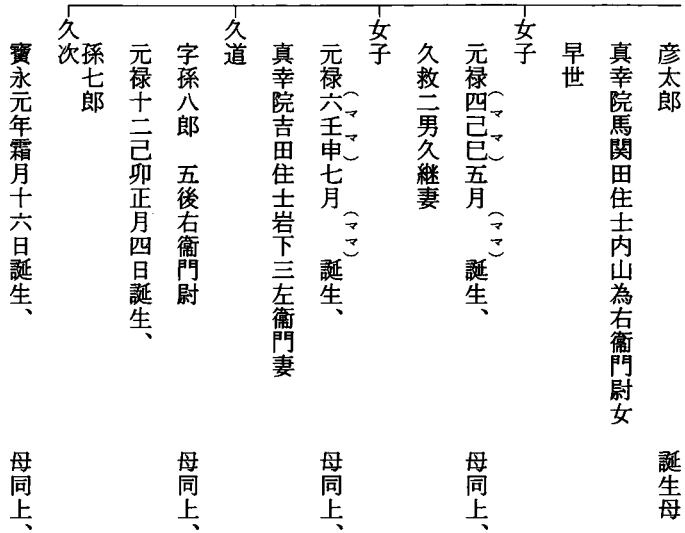
久根者雖為久敬三男、紀伊介久決無嗣子而死去矣、

由是久根為久決後嗣、連續和泉惣領家野久尾血脉

正統、萬治三庚子十月廿六日誕生、日州諸縣之郡

真幸院吉田住士、

久次



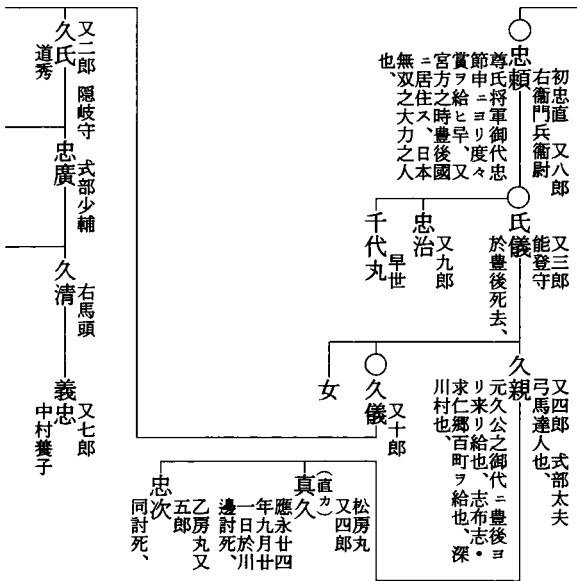
誕生母

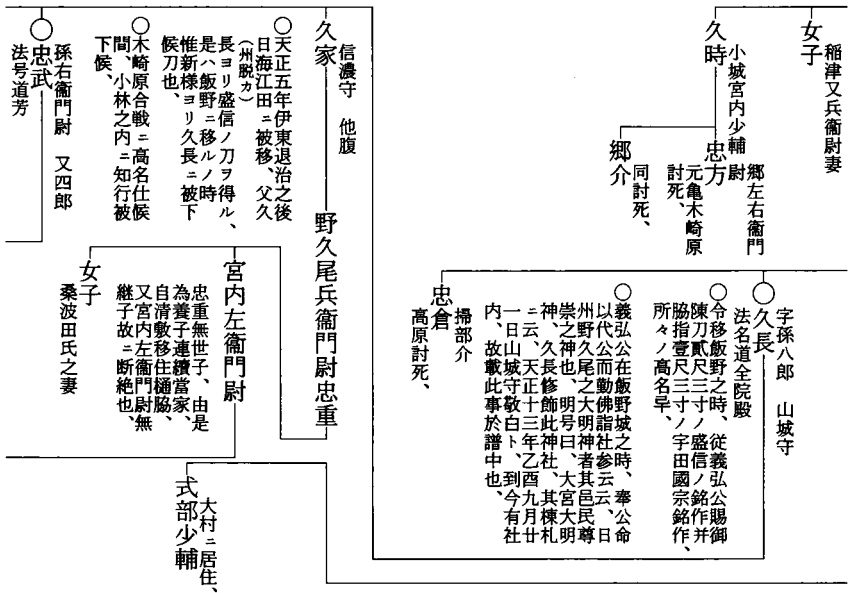
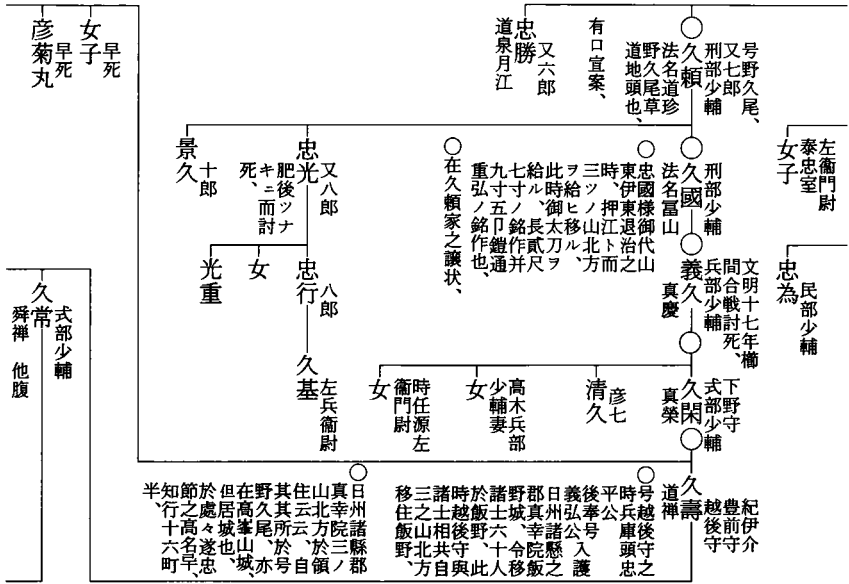
○ 二 和泉惣領家之系図 (卷子)

〔ハリ紙  
四拾三箱五〕

△和泉惣領家之系圖

(本系図ノ前半ハ一号トホボ同一ナリ、省略ス)





○木崎原高名、惟新様  
ヨリ月山ノ刀被下候、

○永祿九年三ツノ山合戦  
久保合ニ而高名、

○永祿十年十一月廿四日  
馬越城ニ而高名、

○天正十四年豊後入ニ參  
高名、

○伊東退散ノ後自肥州  
球麻有通于日州馬関田

之路、依公命令忠武及  
南郷氏警衛其通路、故

去飯野移住馬関田、而  
後塞其路、以有通自日

州加久藤之道、由是去  
馬関田移住加久藤、

孫八郎  
貞久  
馬越ノ城討死、

女子

平山兵衛門尉  
武次之妻

孫太郎

○久吉

後又二郎 能登守

誕生母

法号了覺普全

日州諸縣郡真幸院飯野住士田向

喜助女

久吉蒙命去加久藤、而後移住日

州真幸院于吉田、

○文祿元年壬辰三月、義弘公・

久保俱ニ渡朝鮮國勞軍務、此時

久吉陪從焉、多戰之高名於朝鮮

國也、

○慶長三年戊戌十二月、義弘公

父子自朝鮮國直ニ城州到伏見之

時久吉陪隨、

同五年庚子九月、石田治部少輔

三成逆乱之時、義弘公從濃州

関ヶ原帰入隅州帖佐之城、久吉

從高鷲、

○家傳ニ云、久吉住于真幸院吉田

之時、義弘公感久吉・同所ノ

士境田伊豫守朝鮮且又石田一乱

之軍勞、以賜采地於久吉・伊豫

兩人也、伊豫守子孫到今在吉田、

境田林右衛門尉号満末、余問此

○家傳ニ云、薩州  
郡於樋脇號野久

尾之有在名、且

又日州三ノ山北

方於號野久尾有



恩賜之亶於滿末、答云、賜采地 在名、二所何於

兩人分明也、伊豫守ハ拜戴水流ツル 欽為根本号野久

村之内二十八斛云云、莊内入高 尾也否ノ亶難定、

名、 雖然考、西目ノ

○久吉依公命移住柳水流之内小城、 方於本トシテ号

而後於小城病死、 野久尾欽、

○久吉從朝鮮國歸朝時、朝鮮人於 又曰、薩州樋脇

捕來、而後者真幸院吉田之成住 之内倉野邊ニ野

士、岩崎氏之成後嗣、于今有其 久尾ト云ル有在

子孫吉田、到末世ノ子孫為名覺、 名、依之號野久

今記之早、 尾云云、

孫左衛門尉 誕生母

久堅

忠武二男 号野久尾、加久藤住士、母上同胞、

真幸院飯野住士田向喜助女

日州於加久藤死去、四月十九日乙酉年、法名翁

竿、莊内入ニ立早、

真幸院加久藤住士兒玉清兵衛尉妻 母上同胞、

「女子

久建 久覺

孫助 刑部太輔 誕生母 彦三郎 六兵衛尉

真幸院飯野住士田向李之介女 實ハ孫左衛門尉久堅(門尉カ)

久建早世、依無世子使弟六兵 二男也、為久建猶

衛尉久覺為後嗣、 子、日州真幸院加

女子 同上、 久藤住士、貞亨丁

加久藤住士赤崎藏之丞妻 卯十月廿日死、法

久覺 名金露紅月居士、

字彦三郎 六兵衛尉 同上、 嶋原入ニ参ス、寛

兄久建無世子故相續久建家、 永十五戊寅歲

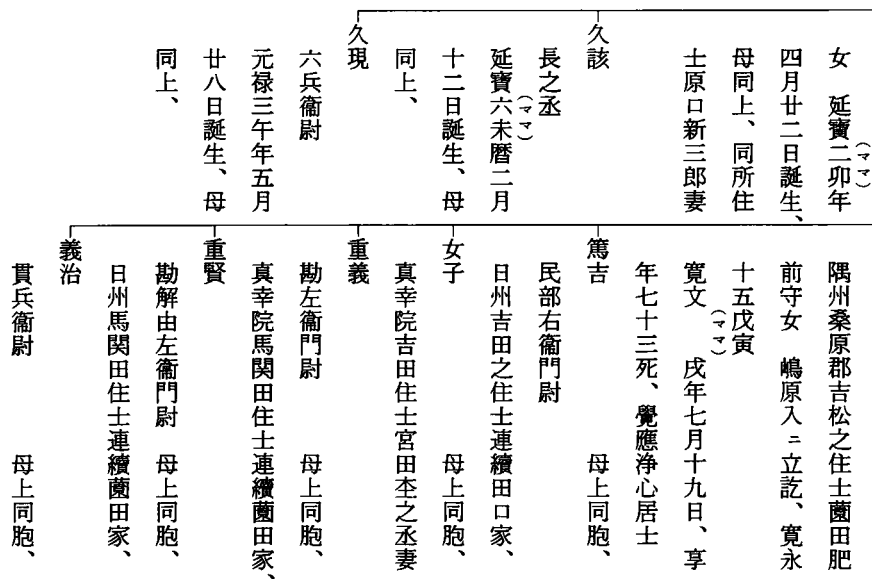
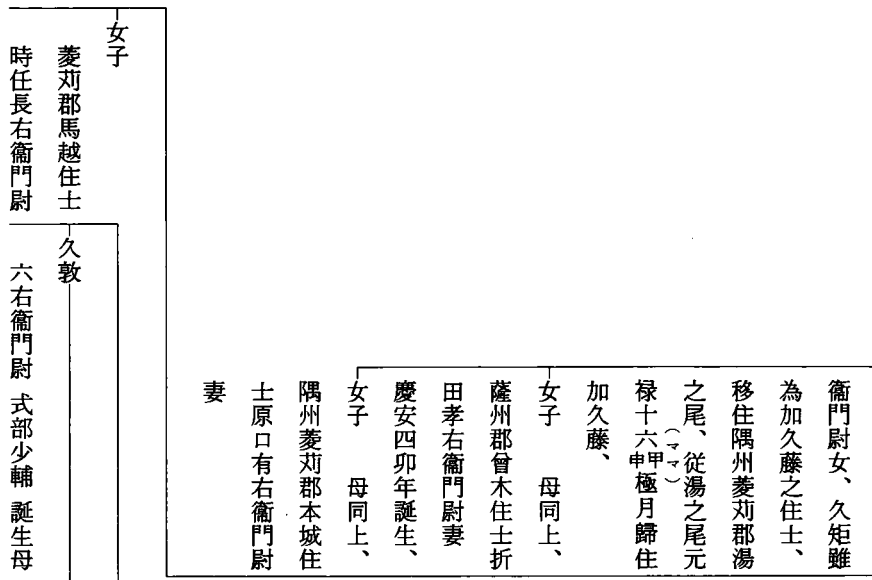
景盛 同上、

諸縣郡加久藤二之宮大明神座 久矩

主二之宮寺住持也、貞享五戊 孫右衛門尉

辰正月九日遷化、年五十歲 正保三季戊七月廿

六日誕生、母加久 藤住士竹之内江右



諸縣郡吉田住士連續龜澤家、

久敬

字孫八郎 孫兵衛尉 誕生母

諸縣郡真幸院吉田住士竹田左千衛門尉女

寛文十一亥曆六月十三日、四十一死去、

法名青山淨慶居士

光久公御代之人也、

母寛文十戌年九月廿六日死、六十余歳、法名月江

妙心大姉

女子

母同上、

真幸院加久藤住士藺田蔵之丞妻

久救

久兼

字彦三郎 慶兵衛尉 母同上、

彦市郎 慶兵衛尉

實久教二男、號野久尾、

尉 堅物尉 誕生母

真幸院吉田住士

生母 真幸院加

女子

母同上、

久藤住士内田右

隅州桑原郡吉松住士兼重妻

馬尉女

「女子

母同上、久継

真幸院吉田住士下嶋氏行次妻

長四郎 母同上、

久家

孫之進 母同上、

久決

久根

字千太郎丸 狩野 紀伊 字彦三郎 式部少輔

介 誕生母 日州馬関田 六右衛門尉 久根者雖

住士森六兵衛尉女 元禄 為久敬三男、紀伊介久

二己巳年九月廿五日死去、決无嗣子而死去矣、由

三十六 法号秋月道光居 是久根為後嗣連續和泉

士 日州吉田住士 惣領家之野久尾血脉正

久決無世子、因是讓家督 統、萬治三庚子十月廿

於第六右衛門尉久根、以 六日誕生、日州諸縣郡

連續當家、 真幸院吉田住士

法印覺阿

字式部卿

久次

明曆二丙申天四月十四

彦太郎

誕生母

日誕生、母同上、大隅郡田代祈願所寶壽院住持、且又菱刈郡馬越里坂寺住持、其後薩劔郡市来大日寺住持、且又奉為綱貴公并又三郎様御子孫繁昌・國家鎮護奉修練灌頂訖、黑坂寺住職内也、奉講初法談吉貴公并忠休公御武運長保、分國靜秘、兼而者弓箭之勝利、幾久如意御満足故矣、大阿闍利覺阿敬曰、是大日寺住持内也、和泉野久尾氏中興、右件者薩州郡於大乘院大堂場也、正德三年五月八日任御

日州真幸院馬関田住士内山為右衛門尉女 早死  
 元禄四己巳五月 誕生、久救之二男久繼妻  
 元禄六壬申七月 誕生、真幸院吉田住士岩下三左衛門尉妻  
 久道 字孫八郎 五後右衛門尉 元禄十二己卯正月四日誕生、母同上、  
 久次 孫七郎 寶永元年霜月十六日誕生、

朱香色一色成賜從 貴公訖、  
 久根 字彦三郎 式部少輔 六右衛門尉 母同上、兄久決依無世子相續遺跡為家督、  
 母法名涼月妙性大姉 正德二壬辰十月十七日遷化、八十歲  
 久侶 長二郎 六右衛門尉 千左衛門尉 母同上、初久緊 寛文三癸卯 誕生、

久次 長二郎 誕生母 日州真幸院吉田住士岩下城之介女 早世 七月廿九日 死、  
 好久 孫左衛門尉 母同上、元禄十丁丑六月十七日誕生、

生、早世 八月廿三日死、  
孫三郎 母同上、

元禄十三庚辰七月廿五日  
誕生、

〇三 口宣案写

(封紙)

「(ハリ紙) 四拾三箱五」

口宣老通

真幸院吉田

野久尾六右衛門

「(ハリ紙) 四拾三箱五」

口宣案

上卿花山院大納言

應永十七年二月三日 宣旨

又七郎藤原久頼

宜任形部少輔(刑)

藏人左少辨藤原清房奉

〇四 野久尾久頼契状写

案 「(ハリ紙) 四拾三箱五」

さつまの國高城郡草道名のうち、井尻八段久頼知行分、  
新田宮めんてん米、應永十年のとしよりしていせんのミ  
しんかたニ當公事とめてひき渡進候所也、此やくそく  
のとし三年すぎ候ハ、如本可返給候、仍如件、

應永十三年正月廿八日 藤原久頼判

〇五 野久尾久頼讓状写

「(ハリ紙) 四拾三箱五」

讓渡田島山野事

一 さつまのこほりのうち野久尾名老町九段

一 高城の郡のうち草ミち名貳町三段

合四町貳段 坪付本證文ニ有リ、

右、件てんはく山野は、藤原久頼さうてんのしやりや  
う也、しかるを今度嫡子又七郎久國にゆつり渡ところ  
也、子と孫とにいたり、さらにたのさまたけあるへか

らす、又くしくわやく・たひ軍陳等においてハ、ほん  
しやうもんにもかせてつとむへし、仍後日ため讓状如  
件、

應永十二年二月五日 藤原久頼 (花押)  
のくひの嫡子又七郎との

(四・五号ハ雜紙ナリ)

○ 六 島津存忠久書下写

〔ハリ紙〕  
〔四拾三箱五〕

薩摩郡内野久尾本領當知行之事、不可有領掌相違之状如

件、

應永廿六年八月二日

※〔ハリ紙剝落跡アリ〕  
存忠 (花押)

野久尾彦三郎殿

○ 七 修理亮軍勢催促状写

〔ハリ紙〕  
〔四拾三箱五〕

薩摩國野心輩事、為誅伐所打立候也、急速馳參、可被抽

軍忠之状、仍執達如件、

貞和六年卯月十六日 修理亮 (花押)  
※〔ハリ紙剝落跡アリ〕  
嶋津下野右衛門尉兵衛殿  
〔忠氏〕〔ハリ紙剝落ノ上付サレモノカ〕

(本文書ノ主文ハ「旧記雜錄前編」二二三二七号文書トホボ同文ナリ)

○ 八 島津久豊書下写

〔ハリ紙〕  
〔御家譜脱〕  
〔四拾三箱五〕

嶋津御庄薩摩方山門庄之内草道村當知行之事

右所宛行也、早任先例、不可有領掌相違之状如件、

應永十九年二月二日 久豊 (花押)

野久尾豊前守殿  
※〔ハリ紙剝落跡アリ〕

○ 九 島津久哲伊軍勢催促状写

〔ハリ紙〕  
〔四拾三箱五〕

祁答院霧田輩、日比及緩怠、同為令澁谷出羽守重茂合力、  
令彼城發向處也、急速ニ致用意馳參、可被抽戰功之状如  
件、恐々謹言、

應永八年八月廿一日

(島津伊久) 沙弥久哲 (花押)

和泉刑部久頼(ハリ紙)太夫殿

〇一二 島津久世書狀写

(ハリ紙) 四拾三箱五

〇一〇 島津立久軍勢催促狀写

(ハリ紙) 四拾三箱五

大隅國帖佐郷平山越後守武実凶族之者共、所企謀叛也、急速馳參、可有退治之狀如件、

長祿三年二月五日

立久 (花押)

野久尾兵部少輔殿

新春御慶賀、自他申籠候、抑去年十二月二日、探題御催促狀到来、御請申、為使者博多ニ被差越候、帰國已後不能面談、床敷覚候、其以後も通音信候處、何様之子細候哉覽、心元なく相存候、仍先度催促狀進候処ニ、一同可有之由候、一向憑存候上者、急速越山待入候、且子息同心可然候、恐々謹言、

九月十四日

久世 (花押)

野久尾又七郎殿

〇一一 陸奥守書下写

(ハリ紙) 四拾三箱五

薩戸郡野久尾名其外所々知行地等、不可有相違所也、仍任先例、領常之狀如件、

(掌カ) ※(ハリ紙) 紙割落跡アリ、朱書「忠圖」 陸奥守 (花押)

〇一三 野久尾六右衛門文書差出目錄

(ハリ紙) 四拾三箱五

一古系圖卷通

一写系圖卷通

一久頼案卷通

一讓狀 卷通

寶徳二年二月四日

野久尾彦三郎殿 ※(ハリ紙) 紙割落跡アリ、朱書「忠圖」

右二行者卷

一口宣 卷通

一久豊公御判物

一存忠様御判物

一久世公御判物

一沙弥久哲様御判物

一陸奥守様御判物

一修理亮様御判物

一立久公御判物

右之通、系圖二通并御文書拾通、合而拾貳通差出申候  
間、宜御披露奉頼候、已上、

(正徳三年)

已 七月六日

真幸吉田

御慶衆中

真幸吉田

野久尾(久世)六右衛門(黒印)○

○一四 野久尾文書系図差出一件  
(一四〇一)

口上覚

真幸

吉田

私事御用御座候間、各江相附鹿兒嶋江参上仕候様ニ与被  
仰渡、罷越候処ニ、御地頭所より被仰渡候ハ、御氏族野  
久尾名字之系圖并御文書等所持仕罷居候由御座候、右躰  
之儀ハ此程御改被仰付、諸所江茂被仰渡趣有之候處ニ、  
何様之訳ニテ御改之節も差出不申格護仕置候哉、右ニ付  
而ハ御記録所より御地頭所江被仰渡趣御座候間、有筋可  
申上由段々被仰渡奉承知、驚入奉存候、依之乍恐申上候  
ハ、私事兄野久尾(久世)野与申者存生ニテ罷居候内、私拾歳  
ニ罷成候砌親死去仕、別而逼迫者之故、母ハ相付方ニ流  
浪仕候内、兄狩野事も早世仕、今老人私兄御座候得共、  
出家弟子ニ罷成、私三男ニテ候得共無是非兄之名跡ニ罷  
成候、然ハ其節より右御系圖御文書等兄出家方江格護仕  
置候、私方ハ時節を以受取可申由内々ハ申事ニ候得共、  
右出家事方々寺持ニテ、當分ハ市来之大日寺住持ニテ罷  
在候、遠方之事ニ候、其上私事無筆ニ而何之弁も無之、  
誠ニ作職之持迄を以渡世仕、継身命罷在

(継目裏ニ野久尾六右衛門ノ黒印アリ)



事ニ候得ハ、とやかく押移延引仕候、然処ニ先比御改之節茂右通ニ御座候得ハ、少も氣を付ケ不申、此節被仰渡候而社承、迷惑仕合ニ御座候、就夫則市來ハ罷越、大日寺へ相尋、委細承候處ニ、不殘格護仕置候由ニテ相渡受取申候、左候而家筋之儀、且又私共名乗等迄草案仕置候由、段々咄承申候而、私事代々久之字名乗候儀、始而存申候、数十年彼方へ所持為仕置事ニ候得ハ、所中存之方も無之、段々無念千万之儀共御座候、依之南林寺内源舜庵へ自分寺入仕、御断申上候、此上ハ何様ニ茂御差圖次第御断可申上候条、先系圖御文書等之儀ハ別紙覚書相添差上申候条、此等之趣、宜御申可被下儀、偏ニ奉頼上候、以上、

(正徳三年)

巳

七月九日

御噺衆中

野久尾(久徳)六右衛門(黒印)○

(雜目裏ニ境田權右衛門ノ黒印アリ)

右(一四の二)、野久尾六右衛門申出趣承届申候、先比御改之節茂所

中へも屹申渡候得共、一向右之訳不申出、殊ニ数十年右

之御系圖御文書等脇方江頼置候得ハ、六右衛門所持仕候段會而存不申候、漸此節被仰渡候而社承、驚人申候、就夫六右衛門事源舜庵へ先自分寺入仕、御断申出候、此上ハ何分ニ茂御差圖次第御断可申上候、尤右御系圖御文書之儀、六右衛門より覚書相添差上申候条、相納り候様ニ宜御申奉頼候、以上、

噺

境田權右衛門(黒印)○

(雜目裏ニ境田權右衛門ノ黒印アリ)

巳(正徳三年)

七月九日

同 界田八郎左衛門(黒印)○

同 境田藤左衛門(黒印)○

御地頭所

御取次衆中

(紙雜目)

右(一四の三)、真幸吉田衆中野久尾六右衛門家之系圖御文書等之儀

ニ付承候趣有之、則噺衆人召列罷越候様ニ与申渡、参上

仕候故段々申渡、六右衛門江茂申聞候處、右系圖文書等

市來大日寺方江頼置候由ニ而、六右衛門差越持來候、左

候而六右衛門口上書ニ噺次書を以右之通申出候、然者最

前久之字忠之字御改之時分、右之二字名乗候者無之由申

出置、今更相違之儀、右之六右衛門嘜迄無調法之至ニ候、  
依之六右衛門事者先南林寺内源舜庵江自分寺入仕、御断  
申出候、此上ハ何分ニ茂御差圖次第可申付候、六右衛門  
より差出候系圖文書等、覺書相添差出申候、私地頭所之  
故如斯ニ候、以上、

(正徳三年)

七月九日

川上(久裏)  
久馬

御記録所

日置島津家文書

○ 一 島津家久書状

五月廿一日

家久(花押)

猶く「」こゝろさしのほとかんしいり候、

(島津久慶)  
又五郎殿

わさとはるく使をのほせ給候、よろこひいり候、先々

(本文書ハ「旧記雜錄後編四」一五九九号文書ト同一文書ナルベシ)

しあへせよきはやく下向申候間、こゝろやすかるへく

候、其元ふしに候由満足にて候、ふくろのかたへも此よ

し申度候、やかて出船の事候間、申まてなく筆をとゝめ、

○ 三 島津家久書状  
已上

あなかしこく、

此方為見廻至遠路使者、殊折樽、芳染之至候、将又 公

(元和二年)  
卯月廿六日

家久(花押)

方様御機嫌能御使ニ而、節々種々拜領共候、於仕合者可

(墨引)

京

心安候、来春者早々可令帰國候間、期其節候、恐々謹言、

より

(本文書ハ「旧記雜錄後編四」一三四三号文書ト同一文書ナルベシ)

(ハリ紙)  
「和六年閏十二月十日」  
閏十二月十日

家久(花押)

○ 二 島津家久書状

(本文書ハ「旧記雜錄後編四」一七二三号文書ト同一文書ナルベシ)

為見廻到遠路被差上使者、殊為音信帷子五到来、令祝着

候、今度又八郎幼少之事候間、船中氣遣候処、海路別而

○ 四 島津忠元書状

静候而、無異儀上着、満足此事候、猶使者へ申聞候間、

(封紙ウハ書)

令省略候、恐々謹言、

「又五郎殿 忠元

(ハリ紙)  
「元和五年」

又三郎

(墨引)

猶々銀子一枚宛、又十郎へも音信令満足候、

態爰元為見廻一人被差越、遠路懇之至令祝着候、我等氣

色弥本腹候間、可易心候、此中在京候而大儀ニ存候、

中納言様御仕合能御座候通、其聞得目出度存事候、猶使

者可為演舌候、恐々謹言、

又三郎

十月三日

忠元(花押)

又五郎殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編五」五八号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 五 島津家久書状

(封紙ウハ書)

「(ハリ紙) 寛永五年四月五日、鹿兒嶋中之堀へ福山川原毛馬ヨリ落馬之時、態飛脚被下候時之御書、五月十五日之日付」

又もし

ふくろ

まいる

いゑ久

猶々此使にくハしく申候まゝ、かさねてく、かしく、

わざと一筆とりむかい候、又五郎とのうまよりをち候、

うけ給候、いかゝおハし候らんと思ひ候、こゝろ元なく

思ひまいらせ候、さためてやうしやうゆたん有ましく候、

やかて御いとまのよし候まゝ、くたり候てこそ申まいら

せ候、あまり心元なきまゝ申いり候、又々、かしく、

「(ハリ紙) 寛永五年」

五月十五日

ゑとより

又五郎との

ふくろ

まいる

いゑ久

(本文書ハ「旧記雜錄後編五」一六〇号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 六 島津家久書状

(封紙ウハ書)

又五郎との

ふくろ

まいる

いゑ久

猶くちよけたるいゑにて候まゝ、こゝろ元なく思  
ひ、うらかた申候、いろく申事にて候まゝ、きね  
んたのミ申候、かしく、

又五郎とのらくはのよし、いよく心もとなく候、あま  
りなる事にて候間、うらかたを申候、さまく申事にて  
候、まつ屋しきあしく候よし申候間、ゆく末かハリ申候  
やうに尤候、それにつきたうねん又廿六のとしあしきよ  
し申候、よくくきねん(折念)いり候するとの事にて候間、わ  
か身たのミ申候、此よしこゝろへ候へく候、くハしき事  
やかて参候て申しまいらせ候、又々、かしく、

(墨引)  
(寛永五年)

六月十二日

ゑと

より

又五郎とのふくろ

いゑ久

まいる  
申し給へ

(本文書ハ「旧記雑録後編五」一六一号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 七 島津家久書状

(封紙ウハ書)

「 おふくろ 　　いゑ久  
まいる

返くこゝ元かハる事御入候ハす候、やかて下向可  
申候、く、かしく、

わざと見まいとしてはるくとまんそく申候、其元いつ  
れもくそくさいのよし、此方もとうせんの御事にて候、  
一しはあつきおりふし、ちよミをくり給候、上やしきよ  
りも御れい申まいらせ候、御いとまの事も、八月ハいつ  
れも出候よし申候間、やかてくたりの事申候へく候、此  
度ハなかくの事にて、心をつくし申事候、ひきやくく  
たりの時分、又々、かしく、

(ハリ紙)  
「寛永五年」

七月十六日

より

おふくろ

いゑ久

まいる

(本文書ハ「旧記雑録後編五」一六六号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 八 島津家久書状

(封紙ウハ書)

又五郎殿

家久

(墨引)

落馬候而以之外痛候由、其聞候つる、頃如何候哉、養生  
肝要候、様子後便ニ細々可被申越候、謹言、

(寛永五年)

七月十九日

家久(花押)

又五郎殿

(本文書へ(旧記雑録後編五二一六九号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 九 島津家久書状

(封紙ウハ書)

又もしふくろ

まいる

いゑ久

なをくきねんの事ハつねのにてハあらず候間、い  
かほと的事もいるましく候、一みちのならい御入候

よし申候、よろつ又々、くく、かしく、

そのうち又五郎殿いかおはし候らんと思ひ候事候、や  
うしやうゆたん有ましく候、せんとあらまし申候つるう  
らかた、然かくとも御入候ハぬよし候間、きねんの事  
たのミ申候、大かたにてはなるまじきよし申候間、しつ  
かにきねん申候て、しんし候するよし申候、たいせつに  
おもひ候人にて御入候ハ、きねん申候するよし申候ま、  
せひにとたのミ申候ま、心やすくおもひまいらせ候、  
いよくたのミ可申候、又屋しきの卦あしく御入候よし  
申候、いろく申候うちに、大なる木やしきのうちに御  
入候、あしきよし申候、すこしもちかい不申候、らくは  
のおりふしも、かたなをさし候らん、あしきかたなのよ  
し申候、そのうへ久しくいゑにつたハリたるかたなに、  
あしきかへ候よし申候、いつれもやかて参候て申候へく  
候、又々、かしく、

(寛永五年)

七月十九日

ゑと

より

ふくろ

又五郎殿

まいる

いゑ久

申給へ

〔本文書ハ「旧記雜錄後編五」一六八号文書ト同一文書ナルベシ〕

〇一〇 島津家久書状

〔封紙ウハ書〕

「 又もし

ふくろ

まいる

いゑ久

〔墨引〕

猶くやうくたのミ申候て、とよのへ御しあはせ候へく候、かしく、

此文ともしたよめ申候うちに、きねんの符参候、一たんのしあはせて候間、をくりしんし候、すなはちかの文とりそへ申、書付のやうに符をのミまいらせ候、かやうにはしをなをし申候てよりハ、心やすく御入候事候、きとくなる時分、此方へゐあはせ候て、ひとりのまんそくたるへく候、くハしき事この人へ申候、めて度く、かしく、

〔墨引〕

七月□九日

ゑとより

又もし

ふくろ

まいる申給へ

いゑ久

〔本文書ハ「旧記雜錄附録二」七七五号文書ト同一文書ナルベシ〕

〇一一 島津家久書状

〔封紙ウハ書〕

「 おふくろ

まいる

いゑ久

返くこゝ元かハる事御入候ハす候、又と申候へく候、かしく、

御せうそ詠めいり候、はるくとねんを入候て見まいまんそく申候、ことにちよミをくり給候、上やしきよりも申され候する事候、たうねんハ一しはあつく御入候事候、御いとまもいつとなき事候、その方いつれもそくさいのよし、めて度候、此方もとうせんの事にて候、やかていかさま御いとまのちうしん申候へく候、いもしへも御こゝろへ候へく候、なかくの事にて心をつくし申候事候、又と、かしく、



〔ハリ紙〕  
「寛永五年」  
七月廿日

より

おふくろ  
まいる

いゑ久

〔本文書ハ「旧記雑録後編五」一七〇号文書ト同一文書ナルベシ〕

〇一二 島津家久書状

〔封紙ウハ書〕

「 又五郎殿

家久

〔墨引〕

七月廿五日之書面相届、令祝着候、先以落馬之痛本腹之由、其聞候、珍重之至候、弥養生肝要候、爰許御暇之儀未相知、いづとも無之候、謹言、

〔ハリ紙〕  
「寛永五年」  
八月廿一日

家久（花押）

又五郎殿

〔本文書ハ「旧記雑録後編五」一七五号文書ト同一文書ナルベシ〕

〇一三 島津家久書状

〔封紙端書〕

「 又五郎殿

より

申いり候、かしく、

せんに

〔封紙ウハ書〕

〔墨引〕

いまきれ  
より

ふくろ

又五郎殿

いゑ久

まいる

猶く又五郎殿こゝろよく候てめて度候、いもとへも此よし申度候、三日中くわなへまいり候へく候、よろつく、又ぞ、かしく、

わざとねんをいり、きねんの御れいまんそく申候、されは江戸を此十九日(今切)にうつたち、今日廿五日いまきれまでまいり候、うちつゝきてんきよく、こゝろやすく御入候事候、まことにく此たひは久くの事にて、心つかい

の事にて候つる、さりなから此たひ御いとまくたされ候  
おりふし、きんぎん・御小袖・御馬・御たか、色々はい  
りやう申候、一しほのしあハせ、残るところなく候、心  
安かるへく候、おりふし此使まいり候まゝ、此よし申候、  
ふしミ・大坂へ四五日もゐ候する事にて、やかてくたり  
候て申候へく候、此よしいそぎのまゝ、しろへ申候へく  
候、五日中ふしミにこし候て、くハしく申候へく候、又  
と、かしく、

(寛永五年)  
戊九月廿五日  
(A.A.)

いまきれ  
より

(墨引)

ふくろ

又五郎殿

まいる返事

いゑ久

(本文書ハ「旧記雜録後編五」一八〇号文書ト同一文書ナルベシ)

〇一四 島津家久起請文

起請文

一今度誓紙之趣条々、令満足訖、弥對當家無別心、可被

抽忠敷事、

(菊野)  
一息女其方江進置候上者、貴所事直子同前ニ相存候之事、  
一向後不依何篇、於貴所身上不審之様子承付儀於在之者、  
細々可遂糺明事、

右條々於偽者、

日本國中大小神祇、殊者當國鎮守新田八幡大菩薩、

各可有照覽者也、仍如件、

寛永六年十二月廿八日

家久(花押)

(島津久慶)  
彈正少弼殿

〇一五 島津家久書状

猶くやかてくたり候てこそ申候へく候、く、か  
しく、

しあハせよくたんしやうとのくたりにて、まんそくたる

へく候、ことさら御め見えとも候つる、一たんとてもて度

候、此方のやうす、中くふてに申つくしかたく候、く

ハしくはたんしやうとのものかたり候へく候、心やすく

おほし候へく候、よろつ又々、かしく、

〔ハリ紙〕  
「寛永七年」  
五月二日

ゑと  
より

ふくろ  
まいる

いゑ久

〔本文書ハ「旧記雑録後編五」三〇五号文書ト同一文書ナルベシ〕

〇一六 島津忠元光書状

〔封紙ウハ書〕

又三郎

〔墨引〕

彈正少弼殿

忠元

今度者爰許へ逗留候而無事帰國、可為満足候、仍打立之時分者、秘藏之馬被残置、令祝着候、猶重而参府之節、以面可申候、恐々謹言、

〔ハリ紙〕  
「寛永七年」

五月廿日

忠元〔花押〕

彈正少弼殿

〔本文書ハ「旧記雑録後編五」三二二号文書ト同一文書ナルベシ〕

〇一七 島津家久書状

〔封紙ウハ書〕

ふくろ  
まいる

猶く御いとまの事のミ待る候事候、く、かしく、

一ふてとりむかい候、たんしやうとの、この比はくたりにて候、まんそくたるへく候、わか身もやかて御いとまのやうに申候まゝ、やかて下向可申候、ことさら、むもしかたより、一はこ御心さしにて候、ことの外この比はあつく御入候事候、此方いよくしあへせよく、御心やすくおほし候へく候、よろつ又々、かしく、

七月十四日

より

いわ

ふくろ

まいる

いゑ久

〔本文書ハ「旧記雑録附録二」七九五号文書ト同一文書ナルベシ〕

〇一八 島津家久書状

〔封紙ウハ書〕

「 (墨引)

彈正少弼殿

家久

(封紙ウハ書)

〇二〇 島津光久書状

(墨引)

彈正少弼殿

光久

為改年之祝儀、至遠路被差越使者、令祝着候、然者其元無事之由珍重候、此方無相易儀候間、可心安候、恐々謹

言、

〔ハリ紙〕  
〔寛永八年〕

三月十日

家久(花押)

彈正少弼殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編五」三六一号文書ト同一文書ナルベシ)

〇一九 島津家久書状

猶くこの方へまいり候へく候、

けふは参候て、いろくのなくさミ申候、此書物ことの

外(秘事)ひしのひにて候、たんもし見候するよし候間、しんし

候、くハしく書付に御入候事候、又々、かしく、

五日

より

(墨引) むもし

まいる

いゑ久

「 (墨引)

彈正少弼殿

光久

為元服之祝詞、此方迄使被差越、太刀一腰・馬一疋珍重

候、尚從伊勢兵部少輔可申達候、恐々謹言、

〔ハリ紙〕  
〔寛永八年〕

十一月廿三日

光久(花押)

彈正少弼殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編五」四七七号文書ト同一文書ナルベシ)

〇二一 島津光久書状

(封紙ウハ書)

(墨引)

〔ハリ紙〕  
〔寛永九年六月五日之御日付〕  
御誕生ニ付從江戸被下候 御返書  
(綱久) 虎壽様

彈正少弼殿

光久

為此方誕生之祝儀、到遠路早々預使、殊太刀一腰・馬一

正祝着之至候、猶重而祝詞可申加候、恐々謹言、

(ハリ紙)  
〔寛永九年〕

六月五日

光久(花押)

彈正少弼殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編五」五二二号文書ト同一文書ナルベシ)

〇二二 島津家久和歌

昨日之返歌

けに手折袖に春待詠めこそ

なをさりならぬ梅の一ゑた

かくはしき梅の立枝のあらはれて

春のとなりの宿もさかふる

家久

彈正少弼殿

比志島文書（指宿市考古博物館）

〇一 島津義弘書状

已上

六月廿日之 御書、去月十一日令頂戴、拜見忝次第候、

一此表之儀、最前已来百性<sup>(姓)</sup>等少々雖令還住、為武士者一

切不罷出、山中曳入、此方彼方於路次企鉾候之条、

使者一人申付候ても、送之人数百式百にて可罷通様無

之候、就夫、爰元之様子、于今申後候、なこや・宍岐

などへのこしをき候人衆も、やうく去月初八日參陣

候、然間無人共中々可申様無之候、當國之立柄右之始

末に候へ共、大閣様御威光不始儀共ニ候之間、已来

之儀可御心安事、

一梅北<sup>(國兼)</sup>官内徒黨逆心之儀、不及是非候、然共 竜伯様無

御疎意段、

公儀被聞食分、幽齋様以御同心御歸國之由、萬々目出

存候事、

一晴<sup>(島津政久)</sup>養之事、先年已来依不相届、今度生<sup>(世)</sup>界之由、無是非

次第候事、

一幽齋様于今御在國之由候、諸事可為御無會尺と存たて

まつり候、不及申候へ共、國家之始末、今度可被相究  
儀尤候事、

一今度我等薩州衆ニ先立而令渡海候之儀、且者 竜伯様

御身躰之御為、且者 國家之為を存候て、不調仕合な

から令出國候キ、此旨諸神八幡非偽候、然處我等乗船

を始、供衆已下之船迄一圓不来候て、借船にて小<sup>(姓)</sup>性を

さへめしつれ候へて、親子のミ令渡海、迷惑仕候、又

手船等參候人衆も、中途爰かしこに令延引、肝煎にて

も不參候、皆是某を不用之始末ニ候、我等一身之儀者

不及申、併於 天下 御家之御面目を被失果たる迄に

候事、

一某事者、去年九月京都より罷下、無程なこやへ罷出、

御普請如形令周備、追付當國へ罷渡候、於 御家之御

奉公者、聊不存疎略候、猶以不可有私曲事、

一如右申候、今度迄者 國家之為を存致渡海、于今在之

事ニ候、然共在陣之調も不罷成、人衆も不罷立、無人

究にて御軍役無首尾候へ、還而 國家之為不可然候、

竜伯様於御渡海者、御供衆其外船被下可致首尾候欵、

(文政元年)  
九月廿九日

義弘(花押)

比志嶋紀伊守殿  
(國貞)

(端裏ウハ書)

「(墨引)

比志嶋紀伊守□<sub>(殿カ)</sub>

兵庫頭

(本文書ハ「旧記雜錄後編二」九七〇号文書ト同一文書ナルベシ)

〇二 比志嶋国隆書状

今晚山寺之<sub>(玉福寺)</sub>ことく可参覚悟ニ候、然者今度被仰聞□<sub>(候)</sub>三ヶ

条之事、

一御評定所ニて御談合之わつらひに罷成儀を申たる由、

一圓ニ其覚無御座候事、

一被 仰出候儀ニ御返事を不申上由、是又少茂覚不申候、

(島津久元) (喜入忠政)  
野州老・撰津老御同前承たる儀共ニ御返事延引之事共

ハ候つらん哉、努々覚不申候事、

一御上洛前ニ被 仰聞たる儀不致首尾之由、是又少も覚

不申、被成 御意儀共ニ候間、拙者失念も可有之候哉、

我等も令御供陣中御奉公不可有疎意候、如此思召立ニ  
て者、今一廉國家も相續候様ニ被成御才覚尤令存候、  
此間之様ニ在陣之用意も不罷成、人衆も不罷渡、御軍  
役不相應にて可為御名代事、一圓罷成間敷候間、近比  
無望儀ニ候へ共、我等事者大隅・諸縣之公役にて在陣  
可仕哉と存計候事、

一懸米之儀被仰付、可被成首尾儀專一候事、

一てつほう并玉藥被成御用意、可被食越候、鎗ハ一切不

用立候、何としても鉄炮數被仰付肝要ニ候、追々可罷

立人衆心得可入儀に候之条、よくく被仰付、てつほ

う奔走候之様ニ可有御才覚候事、

一(硫黄)いわりの事、卅桶も四十桶も被仰付、可被差越候、え

んせう<sub>(桶)</sub>ハ、けにと事關候者、此方にてにさせ候ても見

可申候哉、高麗人ニ對してはてつほうニ可相究と見へ

申候事、

一石火矢之事御たつね候て、有次第可被差渡候事、餘者

此使立相合候間、被聞食届、御入魂所仰候段、可然之

様ニ可預御披露候、恐々謹言、



其時之御使之口を承度存候事、

一（家久）黃門様於御在國者、縦深と數御暖候とも被逐御糺明可

被下通御侘言申上度心底候へ共、從江戸被 仰下候間

不及是非、拙者申儀毛頭偽御座候者、野州老・撰津老

可為御存知候条、有様ニ可被仰聞事頼入候事、

一上様御帰國之時分、定拙子違目之儀も 御尋可有之候

間、愚意可申上候、其上にてハ如何躰被 仰付候共、

露塵程もなけかしく存申ましく候事、

一勿論ながら少茂御無理と不存候、寔三ヶ条共ニ申たつ

儀可有之候、紀伊事別而□守召仕候一筋ニて候間、

御糺明御座候様ニ御取合頼入候、此由撰津老へ直ニ申

度候へ共、とても御あい被成間數候条、□（如斯カ）申入候様

被仰候而可被下候、以上、

（寛永五年）

正月廿八日

比志嶋宮内□（少）輔（花押）

吉利（忠通）下総守殿

参

〇三 島津忠恒久家書状

先ニ申候つるうたの儀、いかゞ相とゞのへ候哉、承度こ

そ候へ、又用之儀候間、只今被来候へ、待入候、かしく、

廿三日

（墨引）

比志紀伊

（より）  
又八（島津忠恒・家久）

〇四 伊勢貞昌書状

穆々ノ字如何、深遠之兒与有之間、如此□（難ニ）而有之

候哉、乍去文王ノ事ヲ毛詩ニ穆々□（ト）有之間、天ノ事

ニハ如何、承度候、以上、

新年之祝詞重々、日之昨所示之試毫句々言々希有々々、

非所予之輩之及、而論善悪者還多罪々々、又愚乱書以備

高覽、辞之改削所庶幾候、無遠慮者快然々々、恐懼不宜、

初春二日

貞昌拜

昨日欣暖氣伸懷云、

穆々東皇施徳辰 乾坤遍賦物皆新

好其□花庭□暖氣今朝春□

(端裏ウハ書)

「(墨引) 大龍寺

玉机下

貞昌

伊(勢カ)兵(部カ)□

〇七 細川玄旨幽齋書狀

硫磺百斤被懸御意候、畏入候、猶懸御目可申入候、先刻者預御狀候、御能可致見物之由被仰出罷出、唯今罷帰候、將亦御煩能者、十一日朝御茶可被参之由、徳川殿自拙者相心得可申入之由、如何御返事可承申候、其通可申遣候、尚使者可申候、恐惶謹言、

八月九日

(細川)玄旨(花押)

(端裏ウハ書)

「(墨引) 龍伯人々

御中

玄旨

七月十七日

(近衛信尹)(花押)

比志嶋紀伊守

とのへ

〇五 近衛信尹書狀

□如申者宗岩かた迄御状令祝着候、不例之由如何候哉、無心許候、少将へ以使札申候之間、乍次染筆候、かしく、

〇六 島津忠恒久家書狀

先日者 龍伯様より被仰聞儀、御返事可申上候すれ共、急便之間此度無其儀候、為御存知候、かしく、

廿二日

(墨引)

より

比志紀伊

又八

〇八 犬追物手組

宥番

犬追物手與豆

延寶六年午五月十四日

嶋津内匠(殿)□

嶋津大學

嶋津權兵衛

嶋津三郎兵衛

渋谷隼人

伊勢又兵衛

肝付三郎

嶋津主税助

平田孫三郎

嶋津權七

種子島藏人

嶋津孫三郎

嶋津主計

檢見

嶋津十郎左衛門

喚次

平山兵部左衛門

二番

犬追物手與夏

延寶六歲五月十四日

嶋津美作守

嶋津求馬

嶋津宗二郎

根占八郎右衛門

嶋津伴平

鎌田源左衛門

山田弥九郎

比志嶋彦四郎

嶋津左右衛門

嶋津左京

嶋津又五郎

嶋津助太夫

檢見

嶋津十郎左衛門

喚次

土持大右衛門

右二通犬追物被仰付候、已上、

享保廿年卯五月廿六日改之、

『此書付籤惣次郎殿持參候故  
相写置也』

國芳

(花押)

比志島文書（尚古集成館）

○一 島津惟新義弘書狀

然（著）□八時從高岡比志嶋宮内少輔注進被申候、薩摩守殿御  
舟（牛窓）ニウしまとにて参合たるに、去月廿八日美々津へ下着  
仕候由候、然間定而早々可為御上着与彼者共申、申聞候  
条、一段目出度存事候、

（紙雜目）

此等之通、其元各為心得、不移時申越候、東之丸、中之  
丸、西之丸一々同前相心得可被申上候、恐々謹言、

（元和五年カ）  
卯月二日

惟新（黒印）

比志嶋紀伊守殿（國貞）

○二 島津惟新義弘書狀

難去用所御座候条、貴所事、明朝爰元へ早々可被相越候、  
必待申候、為其一書如此候、恐々謹言、

十二月七日

惟新（花押）

比志嶋紀伊守殿

○三 島津家久書狀

其地無為之由、今度飛脚ニ相聞得令祝着候、爰元逗留之  
儀、未相知候、猶新子細共候ハ、追々可申遣候、謹言、

六月廿三日

家久

比志嶋紀伊守殿（國貞）

町田勝兵衛尉殿（久幸）



○四 松平信綱書狀

為改曆之御祝儀預貴札、忝奉存候、如仰御慶不可有盡期  
候、先以 公方様弥御機嫌能被成御座、年始之御式法首  
尾能相濟、其上去月十一日 御前髪被為執、旁目出度御  
様躰、万民之恐悅御座候、次其表御無事、御手前御息災  
ニ御座候由、珍重之御事候、猶期後喜之時候、恐惶謹言、

（万治二年）

二月十四日

信綱（花押）

松平大隅守様（島津光久）

貴報

松平伊豆守

○五 久世廣之書狀

猶々今朝種々嶋三郎右衛門 御前へ被 召出、一段  
之首尾ニ御座候間、御心安可被思召候、以上、

五月廿九日之貴札致拜見候、先以 公方様益御機嫌能被  
成御座候間、目出度可被思召候、然者御手前様、今度首  
尾能御暇被遣之、海陸御堅固至御國元御参着、忝被思召、  
依之以使者被仰上之旨、尤奉存候、猶期後音之時候、恐  
惶謹言、

久世大和守

七月朔日

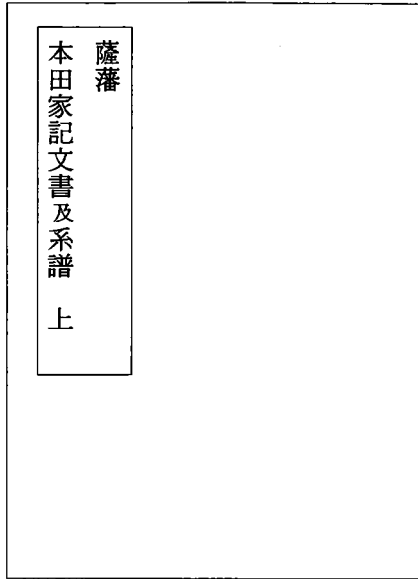
廣之(花押)

松平大隅守様

貴報

本田家記文書及系譜

冊子表紙



薩藩  
本田家記文書及系譜  
上

(封紙ウハ書)

本田九郎殿

(封紙裏書)

(朱印)

修史局

内閣修史局

(朱印)

太政官用

○ 一 内閣修史局依頼書

『第八十一號』

貴家御持傳之系圖一卷、修史參考ノ為致一覽度ニ付、暫時御貸上相成度、此段申進候也、

明治二十年四月廿五日

内閣修史局

(朱印、印文「修史局印」)

本田九郎殿

△桓武天皇 — ○葛原親王

柏原 諱山部 一品式部卿 聽轡車

仁壽三季六月四日薨、歳六十八 (A.V.)

○高見王 — ○高望

三男 賜平姓、

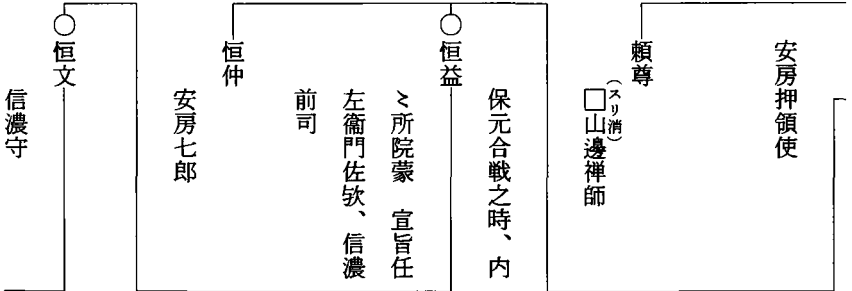
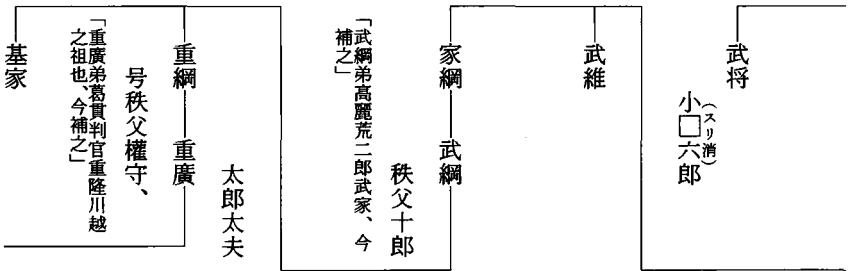
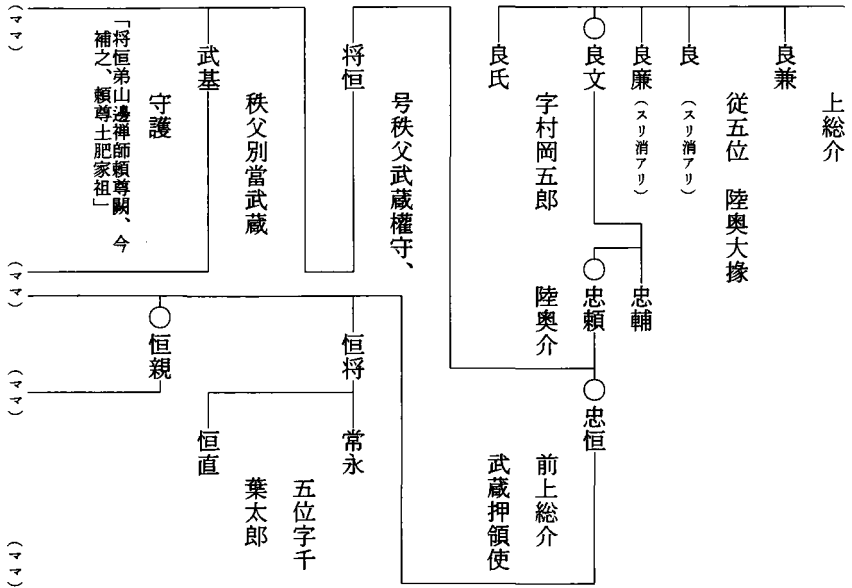
○国香 — ○貞盛

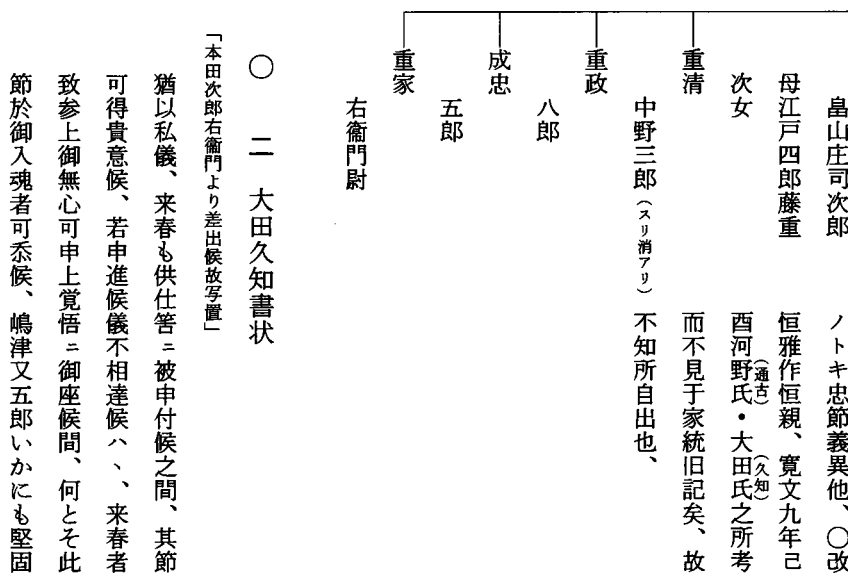
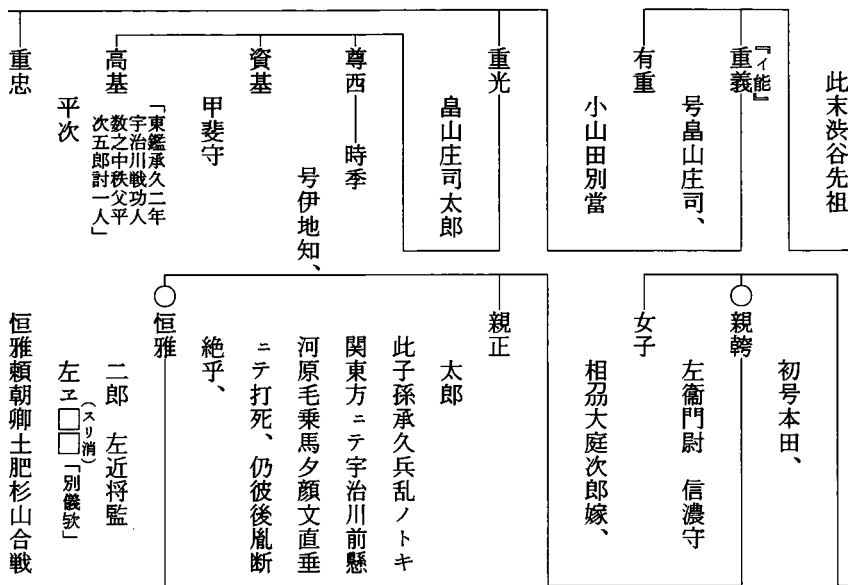
本良望 從四位下 陸奥守字

良持 常陸平太 歳六十八

良正







ニ被罷居候、貴様御噂サ而已被申事ニ候、乍輕  
少琉<sup>(マヤ)</sup>戾子一端致進獻候、誠書信之印迄ニ御座候、  
以上、

一書啓上仕候、貴様御安寐ニ被成御座候半、玆重奉  
存候、私儀三日已前ニ無恙在着仕候、於其御地者御  
懇志ニ被仰下、別而忝存候、然者御物語仕候本田親  
恒之一筋、大隅守先祖以来由緒有之候而爰元ニ罷在  
候、親恒以来ハ細々系圖記置候、親恒以前不相知候  
処ニ、いつそや御咄ニ始祖并氏姓迄承達、疑散満足  
不過之奉存候、乍此上難申上候へとも、始祖より親  
恒迄之代数少御書記被下度儀、念望ニ奉存候、御繁  
多其上頃者何方ニも御辞退之段、委細存之前ニ御座  
候へ共、於此儀者御断ニ存候条、御入魂奉仰候、就  
其少書付とも有之候を書寫進入仕候、此外毛頭不相  
知候、御一覽被遊、元祖より親恒迄一筋御書記させ  
可被下儀、偏ニ奉頼候、御斟酌乍存申上儀如何存候  
へ共、於此儀者幾度も御断可申上心底ニ御座候、何  
とそ奉頼候、若親恒以来於御用者、書付可致進上候、

恐惶謹言、

六月十日

治部左衛門尉名を改申候、  
大田小平次  
久知

浅羽三右衛門様  
(成儀カ)

参人々御中

○親恒

号鬼石丸、二郎 左近将監 左衛門(スリ消)

信濃守

△○親恒専頼朝卿ニ奉公也、尔間諸國給地アリ、重忠

ニハ元来一門タル間、每夏加意見後見ノコトシ、  
親恒重忠へ入魂之間、重忠威光君モ御感アリ、古

譜、

○建立感應寺於薩州山門院野田而為 忠久公之御寺、

明曆元年乙未依 太守命改三刃之古跡、其儀 忠久公御下向之  
時、親恒建立記之、當建長七年丙辰、○又家傳所云、忠久公  
入国三年以前、親恒下建感應寺、以之考、則當  
建久五年甲寅、兩說未詳、後來博雅土正焉、

○文治五年己酉七月十九日、 頼朝公卿自将欲伐泰

衡、重忠有先陣之命、于時長野三郎重清也。重忠之弟景時

依宿願於鶴岡供養大般若經、二品御參詣、此時号秩父三郎重大

串小次郎号重親、重忠之烏帽子也、又東鑑九卷、本田次郎

号親恒、見前章、稱門客、重忠之非家人矣、重忠之非家人、實名、榛澤六郎、成清、柏原太郎、此二家不詳所、相共

五騎從軍重忠之手而戰于奥州矣、見東鑑、第九卷、

○元久二年乙丑六月二十二日、實朝卿依右衛門權

佐朝政之讒訴使北條相模守義時及強兵討重忠、此

時親恒與于重忠矣、故不得止共戰于武藏國二俣川

矣、見東鑑十八卷、雖然誤親恒作近常、誇筆力為郎從、故世俗呼親恒云重忠之家人、唯非世俗而已、吾門葉亦間有疑

之者、偏依東鑑之誤也、世俗夫有何咎哉、編於東鑑者亦夫無所

咎也、大學誤新作親、程子按書康誥以改新民、論語誤老彭為老聃、朱子按大戴禮改高賢大夫先儒尚然、況於宋世記誦乎、我親恒如說前章事、賴朝卿賜宋地、諫重忠盡其信、不按言旧譜、夫誰能知之、故別作或問以解支流之惑、以欲及永久、冒我姓者六

人、東鑑亦郎從郎等隨兵家子家人皆分所呼、又將軍家譜賴朝卿傳曰、土御門院正治元年正月、轉任左近衛中將宣下曰、續前

征夷將軍源臣遺跡宜令家人郎從等如舊奉行諸國守護、即有古書據此義則東鑑以親恒重忠之郎從所書非誤、我唯妄妄而不知文義耳、

△○親恒者事 賴朝卿而賜恩賞地於諸國矣、不知為何、國何鄉也、

又畠山重忠者元來依一門二家皆山陸奧介忠頼而分派相去及十世矣、是豈云一門哉、不知如何云、尔妻与妻又姉妹、又重 數加諫言偏如後見、而

手者親恒云養子蓋斯之謂乎、

其交同水魚、故重忠日震威也、卿亦於親恒有感受、

愚按古語、日用良將之陣則事之常理而士民服之威震四海、是古今

之通例而唯重忠而已哉、又重忠之事賴朝卿也、其功不可勝計、

卿人之於重忠亦然、故凶徒起則每以重忠為先陣矣、使其主親者據

其入而親之陣之以倍為忠臣、則為其主仁不可無憾、古語雖疎而

其理實相當矣、

○貞親 左衛門（スリ清）法名靜觀

○貞親賴朝ヨリ隅州守護職被下、其故 忠久江奉公

可申之由堅賴朝御賴之故、別給等所々多之、尔間

隅州守護職又ハ在々所々領分在之、右太將家ヨリ

頂戴ト云々、就中惣小川村勲功ニ依テ給之、

○貞親畠山重忠二男也、尔外加紀屋履ニテ母袋早世

之間、二歳ヨリ親恒被養育、其故ハ親恒妻モ加紀

屋履女也、尔間氏石タメニ伯母也、依之事也、為

重忠次男ノトキ号重季九歳元服也、其以后本田男

子ナキ故ニ重忠ニ申請、十三歳ノトキ加冠改名シテ号本田貞親ト、其后九州下向ノトキ近衛殿室町殿御代參上申契約申間、藤家ノ一門北家筋相承如

此一本如何、○近衛殿エ言上申濫觴ヲタツヌルニ、日隅薩ノ三州昔國司分御家門ニテ御座アル故也、藤原タル稟意趣如此、如何、一本作、尔者親父親恒モ藤氏契約キ等トシテ藤原号、為后代委記之、○於此流河原毛夕顔文直垂キラウ稟一門不寛ナレハ嫌之、右大将家御時嶋津判官忠久御分國七ヶ國賜守護伐職、忠久ヲ奉掣取稟、(抑カ)柳忠久ト申ハ右大将頼朝ノ御子三男ニテ御渡候、御母ハ丹後ノ御局、比企ノ藤四郎カアネニテ御渡候、クワイニンノ御時將軍家御臺二位殿(朱書)「ト申ハ北条ノ四郎時政ガムスメナレハ、天下ノコトハ二位殿(朱書)一オホシメスマ、ナル間、丹後御局ノ御腹ニ御子マシノ侍ラント聞召ソネミ、彼女房ヲ急海ニシツムヘキヨシシキリニ被仰下候間、日向ノ國ニ流シ申ヘキ由ヲ定、鎌倉ヲ出賜時、頼朝モシ男子ニテ在○朱書鎌倉ヘ申ヘキヨシアリ、男子ニテマシマス由申ス、頼朝聞召テイソキメシ皈サレ、八文字民部太夫惟宗廣言ニアツカリテヤウユク申候、同丹後御局ヲハ賜ハラレ候テ最愛候、

又忠季ト申ハ民部太夫カ子ニ而候、忠久一腹ノ御兄弟ニテ御入候、随テ初ハ惟宗氏、承久三年ニ忠義改姓アツテ藤原氏ト号、比企判官モ民部太夫モ承久兵乱ノ謀叛ノ人數ニシテ失候、忠季ト申ハ今ノ若狹(ミカ)シカタニテ候、忠季ノ子ハ忠經ト申ハ、承久ノ比天下(外カ)以下ノ物イ、ニテ候間、京都ノ用心ノタメニ武藝ノ達者ヲ関東ヨリ撰ヒ出シ、三人メサレ候随一ニ忠經ノ御登リ候間、父忠季ハ関東方ニテ宇治川ヲ渡討死、其時忠季ハ青黒馬ニ乗、カチンノ直垂櫻花ノ維物シ候間、他家ノコトナカラ當家モイマシメ給フ、忠經ハ京方ニテ討死ス、西城戸ノ太郎追討ノ時、畠山ノ重忠太將トシテ奥州ヘ指向レ候時、重忠被申ケルハ、昔貞任・宗任追討ノ時、源平両家ノ大将ニテ候、重忠カ先祖義家ノ御供申候時、イツレモ白幡ニテ候間、我等カ先祖黒革ヲ一匁共一タケニ切、幡ニ付テ候先例ヲ被追ヘクモヤ候覽ト被申ケル間、忠久十三歳ニテ越前ヲ給、奥ノ大将ニ御向候、重忠親恒ノ息女ヲ猶

子トシテ取聿ニ取、餘ノ賞翫ニ大勢打籠ニテ候間、自然忠久ノ御手ノ人ニ無礼ヲイタス人モヤアラムトテ、ヒタ、レノミノイヲトキ、烏帽子ノ右フサナト被定候、

○ 三 本田宗親書状

「正文在宮之城本田与市右エ門家」

本田治部少輔宗親文

其後雖參上申候、御隙之時分候之間、令斟酌候、仍一段申散候、雜談之事載言語候へハ、舌頭も穢候事も、抑御當家曩祖忠久ハ右大將家御意として重忠之烏帽子父御定、剩我々先祖親恒之息女を猶子として聿ニ取被申候、秀康追討之時者忠久ハ大將軍、重忠ハ副將軍ニテ御渡候けると見へ候、無程退治ノ後三ヶ國御下向之時者、大將依御意御臺様之兄左衛門尉貞親御當家被副申候し、然者御下三年以前先へ罷下、山門院ヲ打明罷上、御供申候て下着候、忠久惟宗姓ニテ御座事ハ、丹後御局之姓を御借候、御子忠義ハ

又忠久之御臺様之御姓を御續候て藤原之改姓候、以後者于今至及如此候、然間此親類於在々所々御楯と成御鉾と成、骨を粉にし命を輕シ候事、禿筆難尽候、雖然近來ハ一家者共衰微して有奇忌<sup>(マヤ)</sup>にて候、され共未對公方曳入仕、又御大綱を見捨たる仁ハなく候處、拙者無比類觸虎口候、一身之不運、又親類之耻辱、何事如之哉、朝之宮内邊聖道を雇候て呪咀申たるよし申候なる、彼聖道等縦人にすかされ我々ニかこつけ申候共、拷訊之時者見へへく候、此人々ハ大隅に候つる時も知音不仕候、上意を相背候て當年九年ニ罷成候へ共、古郷には錦を着よと申候程ニ、身式恥候て一向不罷越候、小篠四郎三郎為教訓上意として罷越候し、次越もて正宮にも參詣申候、其時者諸出家被來候申、彼人々も渡候かと覺候、其外者詞をかまし書状にても不申通候、我々鹿兒嶋堪忍申候事者、若哉なからへハ公方様やすらかに御詞をもかけられ候事もやと憑をかけ申て罷居候、公方様ニ怨讎之心中挿申候由、他國他所ニ候て社左様之次第をも可存

立候へ、且御賢察之前ニ候哉、先祖由来まで此状書  
載申候事へ、我々沈没之後者存知する親類有ましく  
候程に、乍憚自然者和尚様者入一行置候、其ために  
巨細認進候、若天道あり地祇地にあらへ、我々呪咀  
申候へぬ事晴行かすると憑敷存たる計候、雖勿論候、  
今生後生和尚様御一人之外憑方なく候程に、此旨以  
御機嫌預洩御披露候て、没後及も可畏入候、不具敬  
白、

二月一日

(本田)  
宗親

文公三應禪師

○ 四 某書状

御當家忠久者由大将御意重忠烏帽子父御定候、剩我  
等先祖親恒息女重忠号御猶子、忠久被聳仰定候、秀  
康(進カ)進爵之時、忠久大將軍重忠モ副將軍ニ而指向候、  
仍無程退治之後、忠久三ヶ國御下向候事大将被仰定  
候、然者因大将殿御意、親恒子左衛門(耐カ)貞親御下向  
三年以前罷下、薩州山門院打明罷上、御供申下着候、

忠久惟宗氏ニ而御座候事者、丹後御局之姓御續候、  
御子忠義者母儀姓江續氏改藤原候、以後至今藤氏而  
御座候、然者貞親子孫親類之者御分國兵革之時者、  
於在々処々御楯成御鉾、粉骨輕命候事不紛事、雖然  
近年者一家親類若晝衰微之衆、身式愧斟酌耳候、然  
共對御屋形申無疎之儀處、拙者不慮之逆心申候事、  
今度鉾楯之始、御屋形伊集院風圖御發足候、仍祖父  
因幡守御供申候、然者仰蒙上意、本田老躰是迄ニ動  
神妙候衆被仰聞、即曾於郡一ヶ所御判下給候、忝被  
頂戴申候処、曾於郡衆中本田被渡間敷候衆同心而番  
衆逐帰候、仍親向候者三河守頂戴申候御判被成願、  
董親申分ナルベシ、季安考、  
具ニ遺恨不及堪忍、曾於郡衆中江放箭候、即宮内一  
社之旁同衆徒中近所之御傍晝中被成御同心、本田可  
有追倒之衆、奔走不羸力、迷惑之至、則親納殿上手  
頼于今無退轉候、且者御當家之功勲、且者拙者家各  
此等旨旁御披露頼存候、以上、

(ナリ精)  
本田上野□所持

貞親者 忠久様御下向三年以前薩州山門院ニ致下着、自分为菩提所野田ニ感應寺を致建立、鎌倉ニ罷上候処、頼朝卿より御意被遊候者、定而 忠久様之御菩提所を立置候半与御尋有之候得共、御寺立置不申候ニ付、右感應寺ヲ御菩提所ニ建立仕置候通申上候、依之感應寺ハ御寺に相成候、其後罷下、別ニ金井軒を立、自分之寺ニ被仕候与申傳候、于今感應寺之内ニ金井軒之寺地有之候、感應寺佛殿上銘

本願主 本田静観草創云々

位牌銘 本願施主静観禅定門 尊靈

〔新譜〕  
貞親

童名氏石 初名重季 二郎 左衛門(スリ滑)  
母加紀屋腹女、

○親恒無實子以貞親為嗣子、實島山次郎重忠之二男也、所以其然者親恒之妻加紀屋腹之女也、不知加紀屋腹女嫁某姓、而所生女嫁親恒、故重忠亦嫁加紀屋腹之女而生不加自己妄意隨旧記耳、

氏石、按大系図、北条時政生四男一十二女、思夫非一腹平、其六女嫁重忠、外餘皆審所嫁而不記嫁親恒、以之考之、則重季之母、氏石二歳喪其母、親恒妻者氏石之者重忠之妻必矣、伯母也、故育之初為重忠之子、時号重季于時、至十有三歳加冠改名而稱本田貞親也、

頼朝卿用貞親封隅刃也、古譜不記年間、今按、文治元年乙巳三月下旬平氏之門族悉攻亡、而後 頼朝卿兼諸國庄園守護地頭矣、同二年丙午以 忠久公被補薩隅日之地頭并守護職矣、以之推之、則貞親受封於隅州文治元年、又在之所、賜采地 不知為何、而追 忠久公守于三刃、 卿復命乞亶于 忠久公為補佐、故辭

於守護職降于守護代職也、天文五年丙午紀伊守重親以万徳寺呈于日野中納言資將卿書略雖職受封之序、此亦失其年間矣、又按東鑑、守護 嘉与地頭分以為二、其守護云則諸侯、地頭云則守護代職也、嘉禄年中 按、後堀河御宇以元仁乙酉為嘉禄元、經丙戌終丁亥元年 中 則改安貞元、頼朝卿去薨御二十有七八九頼家・實朝公皆逝矣、 忠久公御年四十有七八九、則安貞 下向九刃時參候 近衛殿室町御代之人二、當基通卿之時○按大系図、此時号室町後二条關白師通公二男家政

候、近衛家信卿也、又普賢守撰政基通公二男權大納言兼基卿也、時代皆當也、雖然旧譜文約而無所考、或泥訓失意味、故直随旧譜而已、俟後 而承於北家之筋改姓於藤原、尋夫於濫觴、日隅薩三刃昔日國司分有御家門称近衛殿、言御家門、故冒近衛之姓以欲懷民平治國家之素意也、養父親恒亦歡喜以改姓矣、



自家旧譜曰、貞親賴朝ヨリ云々上ニアリ、

貞親自亶于 忠久公承命、公之入國三年以前久

公入國推文治二丙午、則當元曆元辰、自家不傳之、又推雖下  
建久七丙辰則當建久五甲寅、自家累世傳之以止之也

向吾本國隅乃惣小河、依滞未考、先住于薩州山北

山門、平治彼在所及千臺、而復上鎌倉、隨 忠久

主再下向斯國也、見貞親之古譜并久兼流本田治部少輔宗親  
呈文公三應禪師狀○又或記曰、親恒下

同時云、下向亦  
多幾于是矣

○貞親旧譜片書云々上ニアリ、

粟田口家則協指長壹尺壹寸五部、指表八幅大善  
藤文字アリ、樋刀平作三とね

右者從貞親重代之由ニ而于今家統ニ傳來候、

### ○ 五 四郎右衛門書狀

猶々御かけニて古作ヲ久々見申候、以上、

御協指為御持得与拜見いたし候、銘ハ家則と相見得

申候、彼銘ハ傳ニ有之候、尤忠成程見事ニ有之候と

不存なから見分仕候、粟田口家ニ者中比前ニても御

座候半欵、左候ハ、順德天皇御宇建保・承久之比

ニて可有御座かと存候、老父へも能見せ申候、中心

之形見事ニ御座候、時代も相應いたし候半かと申候、

左候へハ四百七拾余年程ニも可罷成と存候、其元ニ

ても能御覽可被成候、多分則ニて候半と存候、細々

貴面ニ而可申述候、以上、

十月十日

四郎右衛門

与(市カ) 右衛門様

「ハリシ」右ハ親恒所帶之寶刀也、

此刀、順德天皇御宇今年マテ四百七十年ニ當ル、

重代ト名ツケヘキコトハ入来ノ文書ニ引合、サハ

リニナラスンハ能々僉議上可入、誰カ重代ト名ヲ

ツクルニ口傳アルヘシ、

女子

親恒之實子 母加紀屋腹女

為畠山重忠之猶子嫁 忠久公、委見旧譜并治部  
少輔宗親之狀矣、

旧譜曰、親恒実子 大夫判官忠久嫁シ奉ル、

親

(ママ)

愚竊鑑於家譜以為、自氏石貞名至靜觀間經春秋百有餘年、不可闕其世者無一二主、依焉考、支流未家之旧譜更無當其節、而約之者見親久兼末流、生明、名刑部、元禄三年、元禄之、今居住阿多郷、親昌因權守兼親二男親貞之流、童名又熊、等之所持古譜、以道親者為貞親童名氏石之子、雖然不記俗名失傳記、家譜亦乱也、多雖幾氏石之子立之、以為世主、則不欲其必自慊而無自欺、又考感應寺文書目錄、在本田次郎左衛門又本田通禪疑是齋名乎者源近而分派未遠之時也、然亦立之而不足主矣、舍之則無所逃罪、故拳彼二三子之名以著此傳、而我姓之通稱書親之一字而補其闕略、以俟將來知者耳、

貞親

左衛門尉 入道名靜觀

按古譜以為以靜觀為氏石之齋名、(斎)今存之古譜之生定知、又有古譜、改寫其譜以為今存之古譜也、至其撰時有貞親者二、故泥繁而為行文不至理之、精

刈之而為氏石之齋名非也、故今削氏石之齋名別立靜觀、以為家督一矣、○又曰、氏石者昔日自為親恒之嗣子、依頼朝卿命賜於大隅國、而后事 忠久公治國家為其印綬也、經親治而惜哉泯於重親、雖然其證詳而于今昭々矣、前太老島津久通編太守之世祿記以為後代龜鑑、其言曰、元祖本田某者、敬君上撫下民、富而不驕滿而不溢、多近君子之道、贊美之事 忠久公治國家謂也、非氏石而復指誰乎、以之推之則非靜觀、然却而為氏石之齋名非也、○又曰、靜觀者事五世 貞久公再與感應寺也、其證詳、而後忠久百有餘年始買得針原村、而讓長男親兼其證于今存矣、○又曰、此靜觀當 貞久公時賜貞之字、氏親當氏久公時賜氏之字、親治末氏親當有世時、故無可号氏理別賜貫号之忠之字、而号忠親、其子元親當 元久公時賜元字、國親當 忠國公時賜字、兼親當忠兼公時賜兼之字、又親之字則吾姓世々之通稱而非可去、故連讀貞氏忠(統之)元國兼六字以為實名、以推之則去氏石不遠、以氏石實名貞

親於數千萬字内举貞之一字、靜觀亦号貞親者有君命而已、故如說前不至理精刈之誤至此可見也、又靜觀之實名号貞親衷、見感應寺并自家之旧記、故今分以為二人也、○又曰、親治賜忠之字略見旧譜也、貞氏元國兼五字旧譜不載、其故所前祖未傳而我生數百歲之後、而始達此言者雖似牽合符會、當其主之時世々相繼犯其主名非命不能、以之推之則理正正當、若將來之氏屬深古明時頭隱釣玄正、我非以飯舊則何幸過之而已、

正安二年庚子六月十五日自藤原家泰買取針原村證文左記之、蓋家泰者千葉介常胤之三男平三郎大夫胤國之孫、山門院之郡司、童名熊太郎、秀忠之曾孫也、不知依何号藤原矣、系圖記別紙、又曰、此年 貞久公御年三十有二、

## ○ 六 藤原家泰亮券

沽渡 薩摩國山門院内針原村田島荒野等事

四至 本證文見タリ、

右、當村者、家泰相傳所帶也、而先季之比、同國御

家人時吉太郎通泰合沽却早、爰自彼通泰之手本田左衛門尉殿買取之、被知行之處、就關東御德政明文、家泰依為本主取返之、雖令領知、買得地事、自今以後者不能禁遏之旨、重被下御事書之間、家泰依有要用、用途陸拾貫文限永代、相副曾祖父秀忠讓狀案文并關東安堵御下文案文等、奉沽渡本田左衛門尉殿早、然者無他妨可被領知也、且又以此狀<sup>㊤</sup>可被<sup>△</sup>申給關東安堵候、仍為後代證文之狀如件、

正安二季<sup>歲次</sup>庚子六月十五日 藤原家泰（花押）

（本文書ハ「旧記雜錄前編」二一〇四六号文書ト同一文書ナルベシ）

○所見家泰證狀案文在記之、<sup>㊤</sup>此讓狀并御下文合四通嫡家持之、本書裏有縫印、但書判、

## ○ 七 將軍家政所下文

將軍家政所下 薩摩國山門院住人

可早以故國秀息男平秀忠領掌當院所帶職事

右人、繼親父國秀之跡、可令領掌件所帶職、但於本所課役者、任先例、可致其勤之狀、所仰如件、以下、

建久四年九月四日

案主清原在

知家事中原

令大藏丞藤原在御判

別當前因幡守中原朝臣在御判

散位藤原朝臣

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一五九・一〇四七号文書ト同一文書ナルベシ)

〔朱カキ〕

建久四年癸丑、頼朝公四十有七、狩那須野并富士

野、又曰、此前年任征夷大將軍、當 忠久公御年

十五矣、

○ 八 北条時政下文

下 嶋津御庄内薩摩國山門院住人

可令秀忠領掌當院所帶職事

右人、繼親父國秀之跡、可領掌所帶職之由、去建久

四年九月四日成賜故大將家政所御下文早者、<sup>⑧任</sup>彼狀、

可令秀忠知行之狀如件、

建仁三年十二月廿八日

(北条時政)

遠江守平在御判

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」二〇八号文書ト同一文書ナルベシ)

建仁三年癸亥去頼朝公薨御五年、此年平政子麿頼

家立次子實朝、賜 勅實朝任征夷大將軍、北条遠

江守時政執權、 忠久公二十有五、

○ 九 將軍家政所下文

將軍家政所下 平氏字姬夜叉

可令早領知薩摩國山門院郡司職并名田畠山野河海

事

右、任親父平秀忠文應元年九月十七日讓狀、分与次

女子等之、子細載之、可令領掌之狀、所仰如件、

文永元年六月十三日 案主菅原

知家事

令左衛門尉藤原

別當相模守平朝臣<sup>(北条時政)</sup>在御判

武藏守平朝臣在御判(北条政村)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」六七五号文書ト同一文書ナルベシ)

文永元年甲子云々、去忠久公逝至此三十八年、二代忠時公御年六十四、

〇一〇 平氏女讓狀

ゆつりあたふ

さつまのくにやまとのゐんのくんししきならひにみ  
やうてんはくさんやかゝいの事

みぎ、くたんのしよくハ、たいらのうちかちうた  
いさうてんのしよたいなり、しかるあいた、まこく  
またらうまろに、「マロ」したいてうとのしようもんならひ  
にたいくの御くたしふみてつきをあいくして、え  
いたいかきてゆつりあたふるところなり、しかれ  
ハうち①のよかち②ひてたゝかゆつりしやうをまほて、  
むらくのしよたうまいのゐんす、ならひ③いろく  
のねんく④としてや、いけにをきてハ、さたをいたす

へきものなり、よてこにちのためゆつりわたすと  
ころくたんのことし、けんちくわんねん七月廿三日  
たいらのうち  
ありはん

(本文書ハ「旧記雜錄前編」七五八号文書ト同一文書ナルベシ)

正和三年甲寅三月十日、自藤原家泰方買取竹原町

二段證狀左ニ記之、来由則見證狀内、當四代忠宗公御年六十四、

五代貞久公四十八矣、此本書、

〇一一 藤原家泰・同家忠連署沽却狀

奉賣渡薩摩國山門院内竹原町貳段事

雖四至有、先日之竹原町わり残不可残之間、堺さ  
すに不及、

右、件田地者、家泰重代相傳私領也、而間依有要用、  
代途拾貫文仁、限永代、本田入道殿所奉賣也、仍國  
司領家地頭兩三方御米以下万雜公事、臨時課役、一  
向停止之、於此四至内者、一塵①方妨、可被知行狀  
如件、

正和三年三月十日

藤原家忠（花押）

藤原家泰（花押）

このためにしひつをくわへ候也、

いへたゝ（花押）

いへやす（花押）

（本文書ハ「旧記雜錄前編」一一一七号文書ト同一文書ナルベシ）

嘉曆四年己巳三月二日、薩劔山門院内以針原・野

角・横峯以下所々水田島等、自書加判而讓嫡子二

郎親兼入道道觀也、此年改元徳元年、所讓讓狀見親兼譜、當貞久公御年六十一矣。

曆應二年己卯、再興感應禪寺而使雲山和尚為開山、

略見太門之所記也、雲山和尚繼法於京都東福寺二代圓鑑和尚大宋無準派也、有得佛・道忍。

（道カ）  
通義・道鑑公石塔、靜觀之石塔亦在其傍也。

〇 一一 雲山和尚頂相讚

鎮國山感應禪寺迺本州最初法窟也、曆應第二之年、

本州刺史藤原朝臣嶋津公之京謁見 大將軍尊氏殿

下、殿下喜色之餘問公曰、公之國今有繼林之可興

礼樂者否、答言、有也、蓋遊窟之魚不大也、故殿

宇隨地而小矣、豈其豫 睿問乎、殿下便下使价、

問本寺来由并主盟家風、 主盟雲山和尚、不説其

由来由事、唯賦一偈答 睿問、其偈云、

休将名字問禪徒、利養紛華與道疎、只憶祖庭穉已

晚、山家村送居諸、

殿下展書、感歎相甚、輒聯三十一字詠歌答焉、其

歌云、

さそなけに都のとをき山のはに

くもらん月のひとりすむらむ

繇焉終登本寺、加初地之列刹焉、諒太守之豪華和

尚之徳力也、當主席徹堂禪師、求予斯記、忽奔筆

云、南太門拜首

辞世 歸元一曲 （ヤシク） 泥牛吼月 木馬嘶風

康永三年甲申九月廿日歳七十一入定

（本文書ハ「旧記雜錄前編」二〇七三号文書ト同一文書ナルベシ、尚感應寺所藏頂相画讚原文ニヨリ校訂ス）

〇 一三 感応寺文書目録

感應寺文書目録

- 一通 開山置文、檀那島津道鑒封裏(貞久)云々
- 一通 祈願所、本朝大將軍尊氏御判云々
- 一通 諸山御教書、同御代
- 一通 佛殿上棟儀式、本願主本田靜觀草創云々
- 一通 同上棟之時合力注文、同前
- 一通 島津道義御書札、自鎌倉到來云々
- 一通 河辺郡内兩名御寄進、道鑒御判云々
- 一通 將軍家卷敷請取狀、奉行飯之尾殿(マ)
- 一通 新開田目録、道鑒封裏云々、山野東西乾碭
- 一通 糊串頭無兩所塘田寄進狀、道鑒御判
- 一通 造管用木之狀、折紙、道鑒御判
- 一通 造營之時人夫狀、折紙、道鑒御判
- 一通 三町寄進之狀、一紙ニ道鑒御判
- 一通 開山塔置、開山御判
- 一通 開山塔所領坪付、同御判
- 一通 開山塔田地之狀、同御判

- 一通 多田内蘆之狀、付書札二通
- 一通 文書之數、開山御判
- 一通 文書之數、開山自筆、同御判
- 一通 檢斷之狀、伊久上総介法名久哲御判
- 一通 檢斷之狀、本田之兼阿之判
- 一通 糊串頭無之狀、本田靜觀御判
- 一通 河邊當所間寺領事或書札惣州并久世御判
- 一通 奥州玄仲之書札(元久)
- 一通 兼阿之避狀
- 一通 道鑒之書札
- 一通 栗林之寄進狀、本田兼阿判形
- 一通 島津新納殿御寄進狀并書札
- 一通 本田之御家祖圓狀、山之口
- 一通 本田之次郎左エ門殿書札
- 五通 總州狀一ツ、折紙、別符之内小松田一反
- 一通 本田通禪之狀、針原田地
- 一通 鶴田之通秀、薦土山之狀
- 一通 折紙、河邊之所務之狀

一通 別府島中園之状、付書札

一通 寺家文書注文、大圓御判

上桑原田へ家泰判形、山ノ門郡司(マ)

森町家雄判形、

下桑原田并落水江木田等へ道惠判形

○ 一四 感応寺脇寺等書上

寺内脇寺

光明院・隣竹庵・金井軒・道交軒・山家村

不二軒・領春寮

外末寺四十六ヶ寺、合五十三ヶ寺、皆共非常靜觀之時、雖然推其年間不能考、故唯記其數耳

一門前屋敷六ヶ所

一大工屋敷一ヶ所

一鍛冶屋敷一ヶ所(池)

一内匠屋敷一ヶ所

一土器屋敷一ヶ所

一行者屋敷二ヶ所

合十二ヶ所

一知行廿五町内五町へ川邊ノ内多邊田兩名感應寺領、

外山門院内塩屋分感應寺領、

四月七日逝位牌在感應寺、年間不知

○位牌銘本願施主静觀禪定門尊靈

親兼

宮内左衛門 二郎 入道号道觀、

嘉曆四年己巳三月二日、得父静觀之讓、薩州山門

院内領針原・野角・横峯以下所々水田島也、

○ 一五 本田静觀讓状

薩摩國針原二郎入道被讓渡ところ針原・野角・横峯

以下所々水田島等事

合

右、本文書等、御下文等あいそへて、限永代、針原

入道ニ所讓渡也、但於後日、右之一所をのこさず子

息孫二郎ニ可被讓渡也、仍讓之状如件、



嘉曆四年三月二日

沙弥静観

(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一五〇八号文書ト同一文書ナルベシ)

○一六 島津道鑑貞所領安堵状

下

山門院西方内名田等事

本田宮内左衛門入道道觀分

一手作分

六段十峯本 五段平田 一段十舍迫

一名々分

久富六町 光成貳町 桃木田六段

右、守坪注之旨、為給恩、可合知行之状如件、  
(附令)

正慶二年潤二月十九日 道鑑(島津貞久) (花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一六二七号文書ト同一文書ナルベシ)

○嘉曆四年己卯月廿五日、薩州山門院以針原村田

皇曠野等并野角内野屋敷方四町、横峯四至境、自

書加判而讓(腹)他服長男久兼也、所讓證状有、久兼譜又  
委記、或問也、

久兼

孫二郎 彌太郎 左近将監 二郎左衛門尉

齋名兼阿 ○母市後崎氏女

○雖為親保・資兼之兄不得家督、生他腹且為逆意於

舅姑故也、

○嘉曆四年己卯月廿五日、得父道觀之讓、薩州山

門院内領針原村田皇曠野等并野角内野屋敷方四町、

横峯四至境矣、

○一七 本田道觀親讓状

ゆつりわたすさつまの國山門院内はりはらの村田皇

くわうや等、并のすみのうちの屋敷(の脱カ)ほう四町内(同カ)よこ

ミネの四至さかい、手継本證文等ニ見へたり、

右、件のところハ道觀相傳所領也、仍ちやくし孫二

郎かところニ永代をかきてゆつりわたすところなり、

このゆつり状ニまかせて、たのさまたけなくりやう  
ちすへき状如件、

嘉曆四年卯月廿五日 沙弥道観(花押)

(本文書へ「旧記雑録前編」二一五三号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 一八 後醍醐天皇綸旨

針原孫次郎久兼當知行之地事、<sup>①</sup>同宣旨、管領不可  
有相違者、

天氣如此、悉之、以状、

元弘三年八月廿九日 <sup>(高倉光守)</sup> 權左少弁(花押)

(本文書へ「旧記雑録前編」二一五四号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 一九 針原本田久兼私領注文

わたくしりやうのうちうもん

合

一所 <sup>(横峯)</sup> よこミネの村

一所 <sup>(針原)</sup> はりわらの村

一所 うちのゝ

一所 <sup>①</sup> やなきのくふ

一所 <sup>①</sup> いくひた

一所 はかたのこたへ

此内やなきのくふ<sup>①</sup>・いくいた<sup>①</sup>・はかたのこたへ三ヶ  
所のもんしよハ、をさへとゝめられ候了、

(本文書へ「旧記雑録前編」二一五五号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 二〇 島津道鑑<sup>貞</sup>大番役請取状

薩摩國役所<sup>①</sup>布二方里小路 大番事、自今年三月一日至同

七月一日、山門院内針原・横峯・内野分所被勤仕也、

仍状如件、

建武二年七月六日 <sup>(島津貞久・道鑑)</sup> 沙弥(花押)

本田孫二郎殿

(本文書へ「旧記雑録前編」二一七三八・二一七三九号文書ト同一文書ナルベシ)

建武二年乙亥、尊氏兄弟<sup>弟</sup>為朝敵、同十一月二十五

日、蒙討手 宣旨、

○ 一一一 後醍醐天皇綸旨

足利尊氏・同直義以下輩有叛逆企之間、所被追討也、  
針原孫二郎久兼發向鎌倉、可被致軍忠者、

天氣如此、悉之、以狀、

(建武二年)

十一月廿五日

(中御門經季)

大膳太夫 (花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一七四二号文書ト同一文書ナルベシ)

久兼屢抽忠戰、太守 貞久公賜感狀、加以預將軍  
尊氏卿及直義之御感也、都十一通、左記之矣、

○ 一一二 本田久兼軍忠狀

本田左衛門尉久兼軍忠事

右、属于嶋津上総前司入道之鑑之手、去正月廿七日、  
賀茂河原合戰之時致先懸、被切殺乘馬、同廿八日、  
於神樂岡之下、及散之之合戰、打取御敵三人畢、同  
卅日、二条大宮并西七条合戰之時、致軍忠之次第、  
下野六郎・同七郎被見知之間、有御尋之時、不可有  
其隱、然早浴恩賞、弥向後欲抽軍忠、仍恐之言上如

件、

建武三年三月十一日

承了 (島津貞久花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一七九〇号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 一一三 足利直義御判御教書

度之合戰之間、郎從等被疵之条、尤神妙也、於恩賞  
者追可有其沙汰、将又敦賀津凶徒事、(川上頼久)嶋津孫三郎相  
共馳向彼城、可抽軍忠之狀如件、

建武三年十二月廿三日

(足利直義花押)

本田次郎左衛門尉殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一八八九号文書ト同一文書ナルベシ)

同四年四月頼久一見狀、同年十月 日頼久同狀、  
同年同月 道鑑公一見狀、同五年三月 日同公同  
狀、同年六月 日二通、七月 日二通、外ニ最早  
寫置略之、

○文和三年甲午八月十六日、立金太郎以為嫡子、欲

讓於重器并所領、而通隱書於東成川殿、狀見葉、成川譜、

○同年十一月十五日、立孫子金太郎后号、兼久、為嫡子、

分兼阿所相傳以鎧・太刀并薩州山門院内針原名田・

横峯之村・内野々村・竹原村・比佐木田、築前國(筑)

博多古多惠之郷之内田地、私考、古多惠之郷、道觀之所、未讓也、依何領之、后復讓

兼久自書加判證狀見、兼久譜、坪付帳記別紙今浪、以讓焉、

○親保

鬼袈裟 二郎 左衛門尉 信濃守

○母入来院氏女

資兼

雖闕旧譜於此人、建武四年四月依見久兼之目安、今新載之、

○重親

童名千代袈裟 小太郎 二郎 信濃守

○氏久公執事、賜隅州守護代職、

○文和四年乙未八月二十二日、自 太守氏久公下大

隅郡河北方益弘名内、以水田四町七反并園三ヶ所、

加御判記坪付於別紙、賜之、

○二四 島津氏久宛行狀

下大隅郡河北方益弘名内水田肆町柒反并園參ヶ所事

坪付別紙在之

右、為給恩所宛行也、於御公事已下者、任先例、致

其沙汰、可④令領知之狀如件、

文和四年八月廿二日 氏久

(花押)

本田小太郎殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二五九五号文書ト同一文書ナルベシ)

○二五 島津氏久書下

本田家之事、為當家之父母、依其分國之諸侍不可本

田上、(故カ)置文如此、非新儀之狀如件、

文和四年霜月十一日 氏久

(花押)

本田殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二二六〇五号文書ト同一文書ナルベシ〕

加治木一本作帖佐秋之嶺城主有礼部之老臣野本藤内者、

氏久主圍之、當此時隅州之社家合心於守護方、故

重親社領ノ據溝辺城拒凶徒、礼部之殘黨却攻重親

於溝邊城、如斯則進退失度兩城相共迫難儀、故互

解圍去、不經幾程而加治木亦陷、是則賞重親之忠

節、宮内神講之賜塚之門、得伊地知周坊（切）守重貞之

狀、

○ 二六 伊地知重貞書狀

今度加治木萩嶺之軍、已及御難儀候處、御手人数被

動敵退散、然者無幾程加治木之事被入御手裏候条、

偏ニ貴所御揚名之由被思召候、仍雖少分之儀候、為

彼御忠節之賞、宮内神講之内塚之門之事、被宛行之

由候、早々御知行可目出候、賀事、恐々謹言、

〔明應五年〕  
二月廿八日  
伊地知  
重貞（花押）

本田殿

御宿所

「上フ」  
本田殿御宿所  
伊地知周坊（切）  
重貞

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二二七五〇号文書ト同一文書ナルベシ〕

太守 氏久公有故沒收留主之所領、（新カ）留主之所領法

樂寺田并修理田有加治木郷、闕所者自古守護代雖

計之、重貞應乞、赦而之地於重貞、得謝礼之狀、

○ 二七 伊地知重貞書狀

就今度留主殿所領沒收之儀、加治木郷法樂寺田并修

理田之事、已為彼領地之上者、（目）守護代可有御闕所之

条勿論候、雖然當時加治木地頭職之事、依我等承候、

其間之事、可被聞之由申候處、預御領掌候、祝着此

事候、然者彼申合候辻、於以後不可有忘却候、仍心

中之趣為御存知、令啓一筆候、心緒尚期来信候、恐

々謹言、

十一月十五日  
「忠貞公之代也」  
重貞（花押）

本殿

御宿所

「上フ」  
本殿御宿所  
伊地知周坊守  
重貞

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二一七五二号文書ト同一文書ナルベシ)

康安始、氏久公陷大始良為居城、同二年壬寅七月十八日、攻取西侯城、以七十五町賜重親、

○ 二八 島津氏久宛行狀

西侯村地頭分半分代官職事、注文別紙有之任先例、可

致沙汰之狀如件、

康安二年七月十八日 (島津) 氏久(花押)

本田小太郎殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二一〇六号文書ト同一文書ナルベシ)

氏久公陣咲隈、與稅所某戰湯之嶺、而後應安六年癸丑二月、又凶徒等寄來姬木城石原口、襲我太守、味方者碓山金吾、伊集院長門守、本田重親、(河)其息男阿北太郎于時十、六歲、玉利・小田・蒲生・北村・

上井・篠原・小島、彼是僅四十騎許、誠雖當危急之時、各輕命防戰、故退大敵討取許多強兵、

應安六年癸丑二月中旬、氏久主欲為都之城後攻、

陣天嶺曰、使又三郎君後身陸奥守元久公、皈入志布志、君不

應之、氏久主數諫、(河)君漸諾、重親補佐此君自

幼令臨別落淚不忍焉、向氏親曰、我已定意於戰死、

汝全命、而奉仕于(コノ間ニ記事ノ重複アリ、抹消サル、省略ス)又三郎君可

抽忠勲、君可名将矣、其外諸將等察主君父子離

愁、皆共啼泣也、○同二十八日、去天ヶ嶺赴末吉、

屯平長谷、三月一日合財部人數、其勢八百有餘、

月一揆太將新納近江守時久、杉一揆太將本田信濃

守重親、相共卒手勢、又小一揆之二百計備于氏

久公前後、兩將若無利議橫合操合、于時旌奉行梶

原(或記)北原、向重親問、今日卯如何、重親曰、不如拔

敵後矣、梶原則鞭駿馬、而向諸將、今日軍可守此

旌、則眞先掛而進平長谷渡、丁此時、肥後兄弟・

石井・大始良・完目藤藏・北郷弥次郎・同七郎共

戰死、其外諸將等、重義輕命、雖相挑勝負未決、

兩陣互避去矣、重親至小鷹原<sup>庄丙</sup>也、戰死矣、實應安六年癸丑三月三日也、氏久記并見自家之旧記、

○氏親

二郎 信濃守

為兄重親之養子得家督矣、

○氏親

二郎 信濃守

○隅<sup>+</sup>刃清水・姬木・曾於郡者稅所某之領也、然稅所

合意於求麻背 太守、動相良來曾於郡襲 太守、

故 氏久主屯咲隈<sup>正宮之上也、社家從守護方故如此</sup>、經三年、陷姬木

城、為守護代賜氏親及息親治、不幾陷清水城、是

亦賜焉、後又戰湯之嶺、討取稅所之息男、河野氏之所考、

自家新譜、永和二年攻取姬木・清水兩城、使親治守焉記矣、今按、永和二年無所考、當應安年中、知者札之、此

時雖負氏親深手、其命全矣、

○應安六年癸丑自三月一日至同三日、 氏久公卒八

百餘兵、與國中凶徒并求麻・肥後・八代・穗北勢

戰<sup>美野原庄</sup>、氏親從其軍而蒙疵七ヶ所、

○觀應<sup>「ハリス」</sup>二年辛卯、 氏久主應探題今川良俊<sup>「了」</sup>之命到筑

前博多、良俊則遣使於 氏久之旅館徵之、先是聞

良俊偽招小貳為組山内殺之、故我輩止其行、公

不諾之云々、

親則

袈裟千代 阿古<sup>「小」</sup>太郎 二郎太郎

雖為重親直子不得家督、不知何故、

女子二人

德親

袈裟千代 孫次郎

女子

○忠親

初親治 二郎 因幡守

○曆應元年戊寅造立二天像<sup>持国天、多聞天、</sup>而安置隅州正興

禪寺、左為 氏久主尊像、右為己身影像、以欲鎮

護於國家、而賦願文奉納二天之鬢也、后迨逝去<sup>慶嘉</sup>

元年丁卯閏五月四日卒、享年六十、法名齡岳、号玄久即心院殿、  
以 氏久主安于正統庵、以忠親葬于正悟院也、兩正皆正  
興禪寺塔頭也、

○自家旧記曰、親春<sup>(治)</sup>之代正興寺之二天御作らせ候、  
右之かたハ、氏久様之御形地也、右之かたハ親春  
之形地也、御くしの内ニ<sup>(願文)</sup>くわんもんニこもり候、  
今にのこりてアリ、又しやうこいんニ親春の石塔  
あり、御當家代々集にくわしく見ゆ、此代之事ハ  
しかくかきのセす、

○正興寺住持笑翁ヨリ到来候書付写、山門二天<sup>持</sup>  
天・多聞天、左者島津氏久公之御尊像、御廟所正統庵  
ニ有之、右者本田親治之影像、(廟)廟所正悟院有之、  
曆應元年、

○忠親故名親治也、忝賜忠之字、改名忠親、武威日  
振、拙忠功兮給於櫻島、住惣小川<sup>(會)</sup>姫木也、夫為隅  
州宰也、左衛門督貞親承 鎌倉右幕下之鈞命、嘗

守于斯國、而奉仕 忠久公、委見貞親之譜、而後酒匂姓亦隅州守護代、不識何故當家、丁五代 貞久公<sup>文永六年己巳誕生、貞治二年七月卒、御年九十五、</sup>之時、  
自坂<sup>後号玄久坂也、</sup>至日向國、應命獻鎌倉也、于時北條之裔、至尊  
氏卿之後拜隅州復如舊也、雖然畠山禮部逼于國中  
敢不從、故 氏久主攻之、當此間稅所某領於清水・  
姫木・曾於郡、背 太守屬禮部、應安年中丙辰氏  
久主將陣湯峯陷清水・姫木兩城、以賜氏親及忠親、  
雖然士民或服或背、亂動未止矣、今至忠親幸往古  
印<sup>自賴朝卿所賜之賜、守護代職之御判物也、</sup>綬 粲然不泯、故使邦内士與元  
親謀、而自郡田城・清水移于溝邊、至嘉例河・栗  
野・横川皆悉入手裏、而再為隅州守護代也、

自家古系圖傳ニ曰、此親治ハ御家ノ字ヲクダサレ  
忠親トナノル時イセイナラヒナシ、(向)ムカヘノ嶋ヲ  
領シ、惣小川<sup>(姫木)</sup>ヒメキ住シ、隨者ヲ近付、コウリ田  
ノ城・清水ヲシタカヘ、ソレヨリウツリミソ<sup>(溝邊)</sup>ヘ・  
カレイ河・クリノ<sup>(栗野)</sup>・ヨコ川ヲカクトイエトモ、重  
恒ノ代ニシリソク、又同ニ云ク、此親治<sup>頼朝卿之</sup>



御判形當國之守護代職國衆へ述ヒロメ、相違之人ハ退之、相隨者ハコレヲ近付、元親父子武略以テ當國職安堵在之、酒匂吳見狀ニ曰、御手比之人之事者、皆々人々の存之事ニて候、道鑑之御時、日向・大隅は先代より借りめされ候、先代とハ鎌倉九代北条殿之事也、同ク道鑑の御代ニ先代ハ滅亡候、大友殿者肥後・筑後、少貳殿ハ豊前・肥前、當方ハ日向・大隅おなしく御かりめされ候、先代(被)披官の人々も、道鑑之御時より奉公申されて候、坂より上の御内之人々ハ玄久坂よりうへ御上之時分奉公申されて候、其内少々薩摩・大隅より御供申されたる方も候、忠久・忠義の御時より御内之者ニて候は、本田・酒匂にて候、久時の守護代をめしあげられて後ハ、今日までハ酒生(句)か持て候、大隅之國之守護代ハ酒生持て候、貞阿の時までハもちて候に守護代をかゝて我等ハ御代官に在京申候、當御代ニ成候而も尊氏の中將軍の御時まで大隅・日向は御返シなく候之間、やうく(訴訟)せう被

申候而先大隅計御返シ候、雖然畠山禮部(レ)支てわたさす候間、氏久御向候て度々之合戦に打勝候而國をめされ候、その時分より本田守護代蒙仰候、近比までは御年比之中にも此兩人之事ハ一かどめしつかはれ候事はかくれあるましく候、今ハ本田も不思議に一城をかたく持候て御用に立候間、一人名字ハ残り候へ共、いにしへのこうせい程ハ見得ず候、本田が親類酒匂が部類のやう共を見候に、たましくめし仕れ候時も、山取の作事奉行・風呂たきなどを承候をいかめしきげに存候、我等か奉公申て候しまてハ宿邊ニ候をめされしには童(口)にて候し間ハ力者御中間にてもめされ候し、おとなしくなり候てよりは後ハ殿原を以こそ被召候しか、當家ニ若子御もりの時ハ、かならず酒生が部類御父御かひしやくに参て候し、玄久の御時ハ酒生貞阿参て候、元久之御時ハ酒生の部類ハ惣領御方に候、少々には京都に候間参す候、元久総州の御縁に御成候し時、御さむ有へきにて候し時ハ我等か

兄弟に承候しかどもふしぎに御さむさほひし、道(相違)貞の御子孫の一すちめハ、今までは他家の者御父御かいしやくに参す候、ケ様ニ申候へハなにとやらむ、御内之者召つかわれて候やう、委敷申候へとかさねく承候間、かくさす申入候、伊地知方の事ハ先代之後道鑑の御時被参候、公方御奉公にていたり候衆に、御内ニ御契約者中く御賞翫にて候、子を一人御養子にて候之間、随分と被存候もいわれにて候カ、山田部類御年比ニ而候へ共、これ又ありかいなく見得て候、

- 古跡集ニ曰、清水城税所某格護城也、永和二年氏久公取之、本田氏親・其子親治父子預給ト云々、
- 同集ニ又曰、姫木城同時攻取之、本田父子預玉フ、其後税所某・求麻・和泉・山北凶徒合戦攻之時、碓山金吾名誉太刀打場有、金吾石世俗唱之ト云々、
- 初姫木被攻取比湯峯ニテ合戦有之ト云々、
- 氏久記曰、氏久御代ニ畠山禮部ト云人下向ニヨリ、

三ヶ國地頭家久島津方守護ヲ背者、礼部方ニナルト云々、

〔浮帖云、應安八年非也、応永八年是也、親字記〕頭色

○應安八年乙卯則永和元年也依氏久公之命時御年四十八、使新納

越後守實久守松尾城日州志布志地、當此時、畠山禮部自

薩劔山北来、屯内城而圍之、實久自松尾出而戰石

見堂、而未利味方多死焉、雖然松尾亦尚堅、氏久

主聞之、引小勢發鹿兒島、經岩川而遮禮部之後、

使忠親及久照不知誰家為祖、為將戰寶満寺、實久亦戰犬

馬場、禮部財北福島而又退飮肥、暫雖支終不全、

馳山東據伊東姓、伊東更不諾、故經豊後路退散也、

氏久記曰、志布志松尾ニハ、先新納越後守實久未十五六ノ比氏久御養子トシテ、越後守修理亮御受領御官マテ御マイラセ、御名代トシテ求仁院其外所領共ソヘ松尾ニ居住候ケル哉、畠山薩州山北ヨリ馳越取巻、イマノ志布志内城ハ礼部之陣也、サレバ石ミタウニ松尾ヨリ出合合戦候而、新納殿手ニモ名字人打死ス、城ヲ堅持コタヘ候之處、氏久

鹿兒嶋ヨリ渡海有テ小勢ニテ岩川傳ヘニ後卷アリ、礼部叶マシキヨリ櫛間ノコトクニ陣ヲ開退、彼在所ニモタマリエス、飢肥ノ様ニ退、暫サ、ヘ候ヘトモ、譬ニ申コトク一陣破ヌレハサントウ不全ニ成テ、山東ニ越トイヘトモ伊東方モ同意セサル間、豊後傳ニ礼部ノホル、手ノ者共ハ飢肥・福島ニ残ルト承早、

或記曰、應安永八年、本田忠親・久照ヲ大将トシ

テ向川原ノ下寶満寺攻入、實久犬馬場ニ打テ山テ（出カ）

合戦ト云々、此日野辺薩摩九郎從兵熊田原兄弟拔（弟）

群働遂戦死、其後寶満寺ノ二王トス、愚潜ニ按ス「朱カキ」

ルニ、氏久公逝去ハ御年六十歳ナリ、應永八年

ハ氏久様御逝去ノ年ヨリ十五年以後也、然時ハ

應永八年ハ誤ナルヘシ、應安八年乙卯ナルヘシ、

經モ寫烏焉馬ト成ト云ノ類ナルヘシ、永ト安ト字

相似タリ、故親治カ傳直ニ應安トシルス也、知ル

モノヲマツテ而後正之、

應永四年丁丑四月下旬、與上總介伊久俱議、欲攻清色城、元久公自將而發鹿兒島、時本田信濃守忠親杉一揆之大將也、「親孚記」  
應永五年戊寅、谷山郡内以木下四町一段・瀆園一所寄附惣勝禪寺（隅州清水之地、今改標嚴寺）

○ 二九 本田忠親寄進状

寄附 惣勝禪寺

薩摩國谷山郡内木下肆町壹段事

付瀆園壹所

右、為天長地久、國土安穩、殊公私惣別祈禱、別而前亡後滅菩提、所寄進之状如件、

應永五年六月一日 信濃守忠親（花押）

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二六〇〇号文書ト同一文書ナルベシ〕

△ 「親孚浮帖云」

應永八年渋谷四ヶ所之鶴田某畔於久哲歸心於元久公、久哲發兵攻鶴田氏、公聞鶴田之急難、九

月五日帥軍救鶴田、丁此之時忠親以又三郎久照北殿三男、稱為大將催士卒、自櫛間至志布志攻入于向川原之下寶滿寺、時新納越後守實久發出于犬馬場、隔川流飛羽箭、渡川流及合戰、互戰死被傷者多矣、就中野邊薩摩九郎之從兵熊田原兄弟十九歲十六歲之若輩戰死、心性容儀越衆、是以人皆莫不惋惜、其後寶滿寺門前彫刻夫兄弟形像於二王安置之、左右所以為後世安樂也、

女子「古系図」

「元久公譜中亦親字浮帖」

△應永七年庚辰 元久公與久哲上総介伊為違隔、於

茲乎本田信濃守忠親歎曰、先君氏久公迄終之時戒

後來曰、元久陸山北殿敢勿間隔、今也變其遺言相

為氷炭、故送簾中未詳何氏女、於山北、久照亦退出於鹿

兒島焉、由是忠親致當職而出奔也、

一氏久之御代(稅)に叢所方求(ト)廣に取、相良曾郡に馳越、

不斷守護之敵たるにて、大隅國之煩是ニあり、

社家嶋津殿ニ依無他事に正宮上咲ニ陳をかまへ、

三年御座アリて姫木の城を仕落、守護代として本

田親春・氏親父子さしおかる、湯之嶺にて合戦アリテ稅所の息類打死候、御方之内瀬戸口方打死候、

○元親 後忠親イ 法名安了

(以下元親譜及ビ三一号文書アルモ抹消サル、省略ス)

(朱印、印文「湯淺富印」)



薩藩

本田家記文書及系譜 中

〔十代〕 後忠親イ 法名安了

元親 二郎 五郎 左衛門尉 信濃守

○自 元久公至 久豊公任執事職、屢抽忠功、

○三〇 島津元久施行狀

大隅國守護代職之事

右、為當家之志、本田相傳之所帶勿論也、然者於代々忠節之家、無其隱處、限忠親、卒凶徒依不忠現、雖被悔返之、元親改非如根元奉公之上者、當職相續之事、自今以後不可有相違、早守先例、可致國中成敗条、仰定元親云々、各可有此旨存知者也、仍執達如件、

應永十九年二月八日

陸奥守元久（花押）

大隅國

人々御中

〔本文書へ、旧記雜錄前編二八六七号文書ト同〕文書ナルベシ、尚元久ノ死没年月日ハ、應永十八年八月六日ナリ

○建立楞嚴寺於隅勿清水為開基（本名惣勝寺、今改更如此）招天真和

尚為開山、（諱自性、應永廿年癸巳正月十三日薨化）

○三一 本田安了（元寄進狀）

〔ウラ 道親 妙壽〕 〔ウラ 寄進安了〕

奉寄進

道親妙壽兩靈位牌田事

合三段者 在所オシム雉牟田

右、彼水田者、為道親妙壽之後菩提、相除萬雜公事

諸役等、奉寄附楞嚴寺者也、聊不可有他違乱妨、仍

寄進之状如件、

應永卅二年丁未六月一日 沙弥安了(本田元親) (花押)

楞嚴寺

(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一〇六五号文書ト同一文書ナルベシ)

○三三二 本田安了(姉) 親寄進状

「ウラ

玄久」

「ウラ

安了」

奉寄進

玄久禅尼靈供免事

合五段者 在所五反畠(姉)

右、彼畠者、妙榮大師(姉)限永代買得地也、然而為先妣

玄久禅尼之後菩提、被寄進楞嚴寺上者、聊不可有他

違乱妨、隨而相除万雜公亵、所奉寄附之状如件、

應永卅二年丁未六月一日 沙弥安了(本田元親) (花押)

楞嚴寺

(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一〇六六号文書ト同一文書ナルベシ)

○三三三 本田安了(姉) 親寄進状

「ウラ

妙榮」

「ウラ

安了寄進」

「大山五反」

奉寄進

妙榮大師位牌田事(姉)

合五段者 在所大山

右、件水田者、為妙榮大師之後菩提、相除諸役、奉

寄附楞嚴寺者也、若後日致違乱煩聒者、永可為不孝

之仁、仍寄進之状如件、

應永卅二年丁未六月一日 沙弥安了(本田元親) (花押)

楞嚴寺

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一〇六七号文書ト同一文書ナルベシ)

○三四 鹿兒島郡内宮地田畠并得分注文

「引返しミヤ地の帳」  
ウラニミヤ地の帳

鹿兒嶋郡内宮地田畠并御得分事

- 一所 七百分 いしきのたうけんかやしき
- 一所 八百分 同所たうせんかやしき
- 一所 七百分 たかミたうせんかやしき
- 一所 五百分 同所四郎ひやうへかやしき
- 一所 一貫文 ひらのかくけんかやしき
- 一所 二百文 おのにあり
- 一所 五百分 みなくちのやしき
- 一所 一貫文 たてのゝきたのその
- 一所 八百分 かうすきのせと口たん六かやしき
- 一所 六百分 同所せんかんかやしき
- 一所 三百分 さよミさか
- 一水田の分
- 一町御ようさく代四貫文
- 一町三反代四貫九百分此内五段ハ御百姓給候、八段代ハくはうへめされ候、五貫五百文御ひやくしやうかと五のゆるしもの、四貫文御ようさくの分、

若宮  
一神田の分

くはうの御とくふん六貫四百文

- 一所 八百分 にしのあまりふくしやうしよりの  
さうはくの所
- 一所 二百文 わかミやその
- 一所 八百分 たかミのわかミやのまつてん
- 一所 百分 はたまほり
- 水田七反 代二貫五百六文 まつてん
- 以上四貫四百六文 若宮まつてんにて候、
- 一ミヤ地の内 よそへ御つかへし候分
- 一所 七百分 かは山との御かりや
- 一所 七百分 いちゝとのゝめんの分
- 一所 七百分 ひらたとのゝかりやの内  
はらまきその(世)
- 一所 六百分 やかミとのゝ御をん
- 以上二貫七百分
- 惣都合廿二貫八百六文
- 應永廿一年七月廿五日

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」九二九号文書ト同一文書ナルベシ)

○元親無世子、故第五弟重恒雖為僧令還俗、以為後

嗣、古糸國(傍)後嚴寺建立清水ニ實子ナシ、尔間第五ヲト、カッソキ憲俗セシメ与世、在之、

○應永三十五年戊申五月二十一日逝去、法号大休安

了庵主、元親逝去年月日不載旧記、故見所安置楞嚴寺元親之

其裏記五月二十一日、至此始雖得月日不記年号、又元親在寄附

田島於楞嚴寺之状三通、皆記應永三十四年丁未六月一日、然則

於此年存命明矣、又應永三十五年十月三日、重恒為亡父安了之

親光

始親良 二郎五郎 稱小城、

○弟重恒得元親之議驕謾已甚、而肆募(驕カ)權威、平日謂

縱太守自將其他豪傑逼海陸、雖言亡我、至鳩之脇

於建城戸一重、胡為乎不能矣、丁此時 忠國主為

制邦内凶徒、依為本田者累代臣令 安房君後号陸奥守立

久公、法号 入御重恒館以護之、故二三日請内城在姫木城

内、自爾号慰遊、奉遠于寺院社傍經二十餘日、使

花棚六郎左衛門者供奉于魔島、而花棚屢欲叛國、

君未許焉在魔島五六旬、花棚設重恒之便訟如斯所

謂、重恒聞此亵謀曰、偽称病惱乘輿可皈、謂遣花

棚則如其言誣君皈隅州、重恒之無道不容罪、豈何

免天責矣、如斯事匪啻一、故 忠國主欲討於重恒、

其說雖聞于隅弔重恒更不騷、經五日後見旌旗於咲

隈、姑疑偽假野伏所ニ、復向姫木崎至黒馬奔走來

陣、太守此地皆猶豫瞬息而備兵於楞嚴寺、於内馬

場雖挑戰未克、宗徒將士八人戰死矣、重恒兵得利

雖唱凱歌、重恒不然自啼泣曰、太守之氏屬外餘英

雄多為我殺、然則我命亦不久乎、更無由悔先非、

親良素憎重恒暴曾不組彼徒、當著陣五日夜、率息

氏親後名國親及郎從竹下一屬・吉永等、拜謁太守於楞

嚴寺、重累代義抽忠勲、而經九ヶ日陷清水城、賜

新納四郎三郎、皈陣魔島、親良後名國親・氏親後名國親隨

其駕矣、

自家旧記曰、重恒ハあまりく才覺すぎて、五番

て家をつかせられ候、そのことく國中もおさめら



れ候、しかれとも 御屋形様又ハ方々より弓矢を  
とりかけ候とも、はとの脇に城戸ひとへたて候ハ、  
おもひもよらん事なりとれんく口ささミ被申候、  
忠國様國一きにてせばめ被申候時、(節) 雪山様之御  
さうしにてましますを、本田重恒ならでハ御たの  
もしき人ハおほしめしもよらんと御定候而、清水  
へこし御申候を、二三日内城ニ御座なされ候而、  
〔朱ニ内姫木ト云所アリ〕  
それよりハ爰かしこの寺家社家ニ御なくさミと被  
申候而、廿日計置被申候、それよりかこしまのこ  
とくかへし被申候時、花棚六郎左衛門と云人に御  
供申させ、かこしまへかへし被申候、六郎さへも  
んハ御いとまを被申候へ共、五六十日しはらくと  
被仰聞候而、かこしまへ召置候、重經ハひさく  
しう被申候事迷惑之由被申越候へハ、さくひやう  
〔本ノマ、病〕  
仕候而たこしにのりてかへり候へと云こし候、そ  
のこしにて清水へかへり候、雑説ハ細々きこゑ候  
へとも、うちあわれす候処ニ、五日目ニ多ひのく  
〔限〕  
まにやはたの少く見得候者、かりのふしかなと

立見共仕候ニ、姫木崎ニくろむまのかけ入候が、  
もしや御屋形様にてか御座候半と被申候内ニ、楞  
嚴寺ニかけこめ候、うちはくにて毎外合戦候、御  
内かた打打まけ候而、むねとのかたく八人打死  
〔本ノマ、〕  
候、中々のかちいくさは是には過ましきと人くよ  
ろこふ処に、重經ハいハれ候、御一家他家れき  
く御人数を打取候あいた、はらハのぶましきと  
てなミたをなかし候お、見る人も聞人も清水なか  
らへ事ハなるましきと云、五日ニなるよ、小城殿  
氏親ハ竹下方・吉永方兩人をめしつれ、楞嚴寺御  
陣ニ被参候、以上九日ニ清水ハ落居候、それより  
氏親ハかこしまへ召置候而、清水ハ新納四郎三郎  
殿御移候へ共、御佗言御申ニ而惣小川三十町にて  
清水を氏親に被下候、其時重經之御覚悟ハ七百町  
計の分けんなり、重恒ハ最所殿をしようとの事にて  
(秘)  
候間、曾於郡のことく被落付候か、又清水と弓矢  
〔朱姫木城ニ石原口ト云所アリ〕  
ニ而いし原口ニ而打死候、

親家

三郎 早世

親成

号花棚與二郎、

重恒〔十一代〕

子孫記別冊、

又二郎 信濃守

重恒始為僧、元親依無世子還俗為後嗣、守于清水城、古系圖云、重恒元親ノユツリヲエテ分限タルマ、内々公儀ヲ輕シテ、動ハ不忠ノ跡ニヨツテ、屋形兎角ヲホシメス処ニ國親申旨アリ、則御領掌、家子郎等國親隨付間、重恒離住城号佛詣、於此國親家ヲウクル袁先委如書、國親在魔島三年ノ後清水城ニ移ル、怪異アルヨツテ守護代所頼朝ヨリ筋目ヲモツテ屋形ヨリ返シ給リ、漸在城安堵スル也、此ニ重恒佛詣下向ノ後、〔稅所〕袁初甥タルニヨツテ曾於郡隱居、國違恨ヲムスヒヨセキタリ、打死ニ候、三人筋目心得ニクキマ、委記之、應永三十四年丁未六月一日、為實翁安貞庵主疑是因幡

守忠親、寄進長田四段於楞嚴寺、法名平、

○三五 本田重恒寄進狀

〔ウラ 安貞〕

〔長田四反ウラ〕

奉寄進

實翁貞公菴主位牌田事

合四段者 在所長田

右、彼水田者、為安貞庵主、別而依致志、奉寄進楞嚴寺、永欲令訪後菩提者也、隨而不可有萬雜公事、若重恒於子孫聊致違乱煩輩者、可為不孝之仁、仍寄進之狀如件、

應永卅二年丁未六月一日 藤原重恒〔本田〕（花押）

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」一〇六八号文書ト同一文書ナルベシ〕

同日、為了哲禪定門寄進濱崎四段於楞嚴寺、

○ 三六 本田重恒寄進状

「ウラ  
了哲」 「ウラ  
濱崎四段」

奉寄進

了哲禪定門位牌田事

合四段者 在所濱崎

右、件水田者、為了哲禪定門之後菩提、相除諸役奉寄附楞嚴寺者也、聊不可有他之違乱妨、仍奉寄進状如件、

應永卅二年丁未六月一日 藤原重恒

(花押)

楞嚴寺

(本文書へ「旧記雜錄前編二」一〇六九号文書ト同一文書ナルベシ)

應永三十五年戊申十月三日、為亡父安了菩提、寄進岩崎水田七段於楞嚴寺、

○ 三七 本田重恒寄進状

「重恒為安了寄進」 「岩崎七反ウラ」

奉寄進

大隅國會小河村内水田岩崎七段事

右、彼水田者、為亡父安了禪定門後生菩提、楞嚴寺所奉寄進也、至〔于〕子之孫之不可有彼地違乱之儀、仍寄進状如件、

仍寄進状如件、

應永卅五年十月三日 藤原重恒 (花押)

(本文書へ「旧記雜錄前編二」一〇八三号文書ト同一文書ナルベシ)

永享四年壬子二月三日、自 太守貴久公(後号陸奥守忠國公)、賜本田之姓、地頭檢断代々免許證状於重恒、

○ 三八 島津貴久(忠國書下)

本田名字、於領地在之所之諸口事出来之時、地頭檢断代之指免所也、自今已後相違之儀是有間敷候、状如件、

永享四年壬子二月三日 貴久 (花押)

本田殿

(本文書へ「旧記雜錄前編二」一〇六号文書ト同一文書ナルベシ)

嘉吉元年辛酉三月十三日、依命討大覚寺門跡大僧正義昭於福島永徳寺、自將軍義教卿賜寶刀号祐之太刀、

同二年壬戌三月十七日、自薩摩守持久得溝邊六町同域并向島之内有村不知何故、

○ 三九 島津持久宛行状

嶋津庄大隅方溝邊六町・同域并向嶋内有村事、為給分所宛行也、早任先例、領知不可有相違状如件、

嘉吉二年三月十七日 (島津) 持久 (花押)

本田殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一二八〇号文書ト同一文書ナルベシ)

重恒得兄元親之讓、後驕富農上、故文安元年甲子忠國主怒攻之、重恒初度軍雖有功終失利、走舅稅所之館、故賜城於新納四郎三郎、如魔島叛陣、然後賜家督於國親始名、氏親、

文安三年丙寅、重恒号佛詣上洛、後復來竄居曾於

郡、同五年戊辰十二月二十九日、倡稅所等與清水戰、終於石原口為國親被殺、法名義翁忠公寛文九己酉年、  
新撰重恒傳曰、文安三年為佛詣上洛、國親幸之攻取清水城云、非、今正誤如本文、

○ 四〇 島津忠国書状

祝言千秋萬歳重々、抑今日廿九日、姫木之城(◎)罷上候間、石原口ニ勢を殘候處、敵方二手ニ懸候て大儀之合戦候、思程切勝候、始者河侯か居て候東之さす尾より金語石まで被切籠候、其後篠嶺之横入をもミあへせ候て、今城かんぬきの瀬戸、穢所之兩城之合まで切籠候、又敵方田ま向より金語石まで切付候、度々合戦候へ共、御方者一人も無煩候、頸取候者ハ本田重經・河侯孫太郎、其外(◎)切捨仕候中間數十人、夜ニ懸候之間、其外者頸をハ不見知候、御方太刀打ニ合候者ハ弟にて候出羽守・源左衛門・たふせ又七少々手負候、其外廻方本田舍弟・長野備前、其外一人もはつれ候とハ不見得候、(◎)早「欠」之事數十人候、可推量候、慶事、恐々謹言、

『文安五年』

十二月廿九日

『大始良殿』

おあいらのと

忠（花押）

（本文書ハ「旧記雜錄前編二」三三三・三三三九号文書ト同一文書ナルベシ）

女子二人

○ 四一 さはにしし本物返証文

ようくあるにて、ほんもつかあしに入をくしろ  
のかわり六くわん文之事、こむらのひやうへ九郎か  
つくりなり、ほり二郎あもんかつくりくひのさんや  
を、本物かへしニ六くはん文の方へをく也、ねんき  
三年すぎ候ハ、ありようにもとの六くはん文にて  
うけ申〔候〕<sup>⑨ナシ</sup>へく〔候〕<sup>⑨ナシ</sup>、仍状如件、

永享二年八月廿四日

さハにししより（花押）

〔ウラニアリ〕  
彼在所新殿御請出候了、（花押）

永享六年十一月卅日

（本文書ハ「旧記雜錄前編二」一〇九七号文書ト同一文書ナルベシ）

『十二代』  
國親

初氏親 二郎太郎 因幡守

○永享四年壬子誕生、

○隅州守護職者雖為鎌倉武衛殿命之地中古退轉、當  
六代 氏久主時黜畠山・税所等自賜清水城、於曾  
祖父氏親以下武威漸振、出則護 朝家、入則祠宗  
廟、時在世主重恒者蔑君命乱仁義、故不得止文安  
元年甲子、 忠國主戎衣自將以攻之、重恒敗北走  
税所之宅、而雖使新納氏守清水城、城中數怪異起、  
不能居、訴 太守退去、國親者避重恒之乱、事  
太守於覺嶋春秋三年、於茲 太守忠國主準鎌倉古  
例、文安三年丙寅、又使國親守于清水、始為重恒  
之領迨七百町、今賜惣小川三十町、故家臣等多作  
昵近、  
重恒去清水雖居税所之宅、臆意尚未休、文安三年  
丙寅、号佛詣上京師、又皈來竄居税所之宅、如斯  
而可改先非者素同根姓豈何拒之、却使我稱讒人頻

含憤、文安五年戊辰十二月二十九日、催来税所之  
黨圍我清水、故不忍聞之終追伐於石原口、

○ 四二 本田國親書状

正八幡於四ッ足ニ 忠國ほろ御さうてん、御しやく  
に最勝寺俊道御參候、去年八月ひかん程なく、當年  
三月廿四日、伊東・北原の人数廻に引とをし、三ヶ  
所へ同日に衆をつかひ申、さつまの人数めぐり・敷  
根・上井打入被申、ひき申處ニきり付被申、山崎の  
あたりにかつせんはしまり候、社家の人数よこ入め  
され候て、数千人てきはろひ候、御屋形様御しつけ  
ん被召候くひ千三百四にて候、御しやくに被參候、  
きつきう依目出度ニ、俊道望をたつし候へと御老中  
へ被出仰候、國親<sup>⑩</sup>意見として内状を進候、万前・  
中津川・下久まぢり<sup>⑨</sup>の<sup>⑧</sup>はく<sup>⑦</sup>地水田坪付書付候て、  
鹿兒嶋江御參上候へ、御判を申受望をたつし可申候、  
巨細者御面語時可申達候、恐惶謹言、

三月廿九日

<sup>(本田)</sup>藤原國親 (花押)

最勝寺俊道

參御宿所

本田因幡守

<sup>(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一三四一号文書・「同附録一」六七五号文書ト  
同一文書ナルベシ)</sup>

○ 四三 本田國親吉書

守護代吉書

- 一可興行神社佛寺事、
  - 一可專勸農事、
  - 一可修<sup>□</sup>事、
  - 一可執行大犯三ヶ條事、
  - 一可入部所々所領事、
  - 右伍條、可被致沙汰状如件、
- 長祿二年正月四日

<sup>(本田)</sup>藤原國親

<sup>(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一三六六号文書ト同一文書ナルベシ)</sup>

○ 四四 本田國親書状

改年吉兆珍重幸甚、猶以不可有際限候、抑来十五日  
埃飯之事、任恒例、令勸仕候、肴少々預御助成候者  
目出候、恐々謹言、

正月四日

(本巴) 藤原國親

謹上

税所介殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二一三六七号文書ト同一文書ナルベシ)

○寛正五年甲申於帖佐駒阪或本作草水渡戰死、年三十三、

國親誕生・戰死年于旧譜不載、今有所考記之、委見兼親之譜、

○自家旧記曰、國親ハ三十三ニテ帖佐こまかへりに

て打死候、上井殿・若宮殿多々打死被申候、其時

兼親ハ三のとしなり、六年めのおい(乳母)ニてつる

きの御陣に被立候、五日召置候て兼親ハ千代なへ

にて御かへし候、人数ハ召置候、

○古系凶傳ニ者、チウサノクサ水ノワタリ打死ス、

○此國親、屋形重恒ヲ不義ニヲホシメストキ、内々

家督ヲタマハラハ奉公可申由申上間、屋形無相

違御合点アリ、尔間諸外城家之子郎等守順次コレ

ニ随參ル処、元親一跡ヲハ悉不給、大略被官者共

直參申、國親モ魔嶋ニ居住申シ奉公イタスナリ、

清水ノ夏モ御公領ニテ人体ヲヲキ玉フ、元親重恒

世与夏ハ、國親ノ父親光元親實子ナキ故、吾コソ

元親ノ家ヲ可續心得、元親ノ内ニアリナカラ内々

申入夏アル故ニ、元親機不合也、元親死去ノ砌、

親光モ早世也、尔レトトモ國親ニ世不給夏ハ、父

親光ノ所存ヲニクミタマウ故ニ、尤第五メノ重恒

へ元親世ヲ与玉フ云々、

「十三代」  
兼親

幼少ヨリヲヤニハナル、トイヘトモ、クンコウヲモツテ奉  
行ヲモツテ、日隅薩ワカマ、ニアツカウナリ、

童名千代鍋 又二郎 因幡守 法名了親 古采ニ

寛正三年壬午誕生、

應仁元年丁亥、千代鍋六歳被負乳母率手勢行謁

忠國主於劔陣、公憐之居于陣中五日留、其家臣

坂千代鍋於清水城、自應仁二年戊子至文明元年己

丑、忠國主賜御自筆狀於千代鍋之母、父親親戰死

為孤故 主憐之也、今傳考、御書趣千代鍋之母者疑 太  
守之枝葉乎、又曰、御書雖無年于

忠國主應仁元年戰岩劔而后、有臣御子与 立久公隔其間、故  
或行大始良。志布志、終文明二年庚寅逝薩州別府、考之則所賜

御状自應仁二年  
至文明元年必矣、

○四五 島津忠国書状

「立久公」今程「案」「入」「忠国公」  
 又三郎いまほと人のあんニいり候て、それかし  
 「萬」「六」「好久ナラン」「不孝」  
 によろつむつかしき事をのミ申かけ候、ふこん  
 の事にて候、てんまのしよいにて候、かこしま  
 「去」「渡」「程と」「推」  
 をさりわたし候て候ほと、すいしさせ給候へく  
 「今」「弥二郎」「權」「虎太郎」「進」  
 候、こん日や二郎・かバ山とら太郎まいらせ候、  
 「委」「聞」「召」「今程」「荒」  
 くわしくきこしめされへく候、いまほとくハう  
 「説」  
 せつのしふんにて候、大すミのはからいよく  
 「本田」  
 くめされ候て、ほんたを人たてであるへく候、  
 「言」「入」「親」「子」「清」  
 それさまわれく一しはおやとこと申候をきよ  
 「當家」「研」  
 め、たうけのいへをミかき候へく候、やかて  
 「談」  
 く御返事ニよつて申たんすへく候、

御ふミまめやかに見申候ぬ、さてくその事しや  
 うこし、上人なんとひしくとらんとおもひ候へは、  
 事たす候よしうけ給候て、おとろきいり候つるこ  
 ろ、また三郎したへんニもうつり候て、ちよなへか

ためにて候へは、おすミをしつめ候へと申候へハ、  
 そのふんなく候、よそよりはさためてくハうせつ申  
 候へく候、かまへてくこころへさせ給候へく候、  
 くにかちかうせつうしなハせ給候ハす候て、それ

かしもくにのあんにいり候ハぬやうにありたく候、  
 「格護」「殿原」「移」  
 なにさまとのハらをあまたうつし候て申あハせ候て、  
 「骨折」「菱刈」  
 かくこあるへく、又このたひかまたのくちねんころ  
 ニほねをり候けるよし、ひしかり申候、よろこひい  
 り候、返く御ふミ御うれしく候、かしこく、

きよミつの  
 「鹿兒島」  
 かこしまより

御返事 申給へ  
 「忠国」  
 たまくに

〔本文書へ「旧記雑録前編」二一四二号文書・「同附録」二六八二号文書ト  
 同一文書ナルベシ〕

○四六 島津忠国書状

なをくもちよなへか事を、人たて候するあて  
 かいかんによろ候、又よろつくにちかよるときに  
 ハ、かハるましく候、なに事も申あハせ、かく



こハわれく申候へく候、

御ふミくハしく見まいらせ候、さてもくそののやうとも、よろつかうにおもひ候て、へつなるはんしゆをまいらせへく候つれとも、その御きにもあわす候てへいたつら事にて候とおもひ候て、かわかミ三郎五郎をまいらせ候ふんハ、御身にへたてあるましく候とおもひ候てまいらせ候へハ、あらぬかたにかたふき候て、いわれなき事を御身に申かけ候よしうけ給候、もつたひなく候、そのさたいたすへく候、この御いしゆをハとつけへく候、そのうちの「者」ものをかたくおほせつけ候て、くにちか日外にか「隠無忠節」「千世綱」「立」くれぬちうせつ「事」候、ちよなへを人たて候やうに、しゆくの御はうへんも候て、たいくのちう「種」に、しゆくの御はうへんも候て、たいくのちう「代」に、しゆくの御はうへんも候て、たいくのちう「計」しやうにて候を、たにわたし候ハぬやうに御はから「我」い、われくかほう候てあるへく候、かわか「我」かまへてくしゆくの御はうへん候て、たいくのちうしやうかく候て、たいくのちうせつをむ

になし候ハぬやうに、御はからいしかるへく候、よろつ又く、かしく、

しふしより

たゞくに

きよミつの

御返事申させ給へ

(本文書ハ「旧記雑録前編二」一四三号文書・「同附録二」六八一号文書ト同一文書ナルベシ)

### ○ 四七 島津忠国書状

なをくほんた人たて御かうミやう候て、くちきく候へく候、

としのはしめの御よろこひ、いつよりもめてたく申候ぬ、さてく御つかひ給候、御うれしく、やかてかへしをこれのちんすいニより候ておそく候、心もとなくおほしめし候すとおもひ候、まつりニひまなく候てふさたに候、千代なへの事、いかにしも御かんにん候て、とりたてられへく候、はやく見たくこそ候へ、又く、かしく、

(墨引)

(大始良カ)  
おらより

たゞくに

きよこへ

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一四三三号文書・「同附録二」六八〇号文書ト  
同一文書ナルベシ)

太守 忠國主移居於別府、與 立久公不快故也、

十二月十三日、疑文明元年乎、賜尊書於兼親、若逢時不  
祥可補佐之也、  
(詳)

〇 四八 島津忠国書状

去月廿二日、河邊宮ニ立久其外之子共風渡来方入見  
參候、存知之前候哉、雖別府ニ移候、不思議之吳躰、  
言語道断之式にて候、自然之時者、被向續候者喜入  
候、恐々、

十二月十三日

忠國(花押)

(兼親)  
本田殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一四五四号文書ト同一文書ナルベシ)

太守 立久公欲防凶徒、賜懇書ニ通於兼親、  
于蓋立久公文明六年甲午四月一日逝去、考之則、  
文明四五年之比乎、已往兼親幼稚而非計享年也、  
未考

〇 四九 島津立久書状

上井・敷根・池袋其外其方之人ト同前ニ可被申  
候、

大友方豊前國進發候由、其聞候、於御忠節之儀者可  
為一味之由、兼日申定處候、然者先々國界及打出、  
彼方之時ニ候可聞合候、其支度共可然候、委細者重  
而可申候、恐々謹言、  
(宜)

五月廿三日

立久(花押)

本田殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一四六一・一四八五号文書ト同一文書ナルベシ)

〇 五〇 島津立久書状

依無指題目候、此間不申通候之處、懇之音信千万令  
悦喜候、仍此方向之事、須木より明日十五日仕事之  
由、申候之間、我々彼堺目へ可打出候之處、米良美  
(良)

濃・比田木次郎太郎一日之合戰<sup>(97)</sup>へ手負候間、明日之  
仕事者延候、彼方之依左右、其界へ可罷越候、又薩  
州様其ニ御座候、御家顔共定而無調法候覽、推量申  
候、將亦其ニ被居候方々へ、辛勞之通皆々申度候、  
恐々謹言、

三月十四日

立久(花押)

本田殿

御返事

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一四八六号文書・「同附録一」六七三号文書ト  
同一文書ナルベシ)

島津豊後守季久及其息修理亮忠廉為帖佐城主時、  
與我清水相戰已有年矣、雖然終致和睦、

文明十三年辛丑、修理亮忠廉号の興行招兼親<sup>居城</sup>

并稅所<sup>居城</sup>於郡、於帖佐、不得辭相共到、忠廉責之曰、

可去渡曾於郡・清水兩城、稅所者畏害應之、兼親

者不然、密通更於清水、群臣聞之鎖門構柵議曰、

兼親者於帖佐不如窮死、於清水建千世鍋<sup>後名三河守</sup>

親之永欲令為太守之臣、兼親諾群臣言、定必死於  
兼親安引父兼  
童名

帖佐、忠廉聞之以吉田氏為和義、兼親漸遁虎口阪  
清水、

文明十六年甲辰十一月十五日、兼親得忠廉之靈社  
之契狀、

〇五一 島津忠廉契狀

契狀

一 弓矢者如何様にも成行候へ、近所之間可申談候、

雖然可寄御志事、

一 如此申談候處、和議方<sup>(98)</sup>にて雜説之時者、直ニ申承

候て可致其沙汰事、

一 雜務之事、任運早々可送遣之事、

若此条々偽申候者、

正八幡大菩薩 霧嶋六所權現

諏訪上下大明神 御罰可蒙候、

仍意趣如件、

文明十六年十一月十五日

(島津) 藤原忠廉(花押)

本田殿

御宿所

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一五七一号文書ト同一文書ナルベシ)

十七年乙巳三月三日、依忠廉之催促、攻上井城有  
功、故同十九日得敷根六町、

○ 五二 島津忠廉宛行状

今度上井城就退治、一段御動(⑤ナシ)候、誠為悦不少候、  
仍敷称六町進所也、▽(⑤)恐々謹言△

三月十九日

忠廉 (花押)

本田殿  
進之候

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一五五一・一六〇〇号文書ト同一文書ナルベシ)

十八年丙午于時兼親、  
年二十五、修理亮忠廉移居日州飢肥、

前是自文明十三年辛丑至同十七年乙未(ママ)、以時不利

暫屬忠廉之黨、加之送坑飯於帖佐五年、漸至去年

未離彼黨、奉仕 太守武久公後号、  
忠昌公、又曰、忠廉移于  
飢肥見世錄記、

兼親年二十會射於帖佐饋坑飯者五年矣、六年則移飢肥見倭字旧  
記、以此推之知兼親生年以其三歲喪國親云、豊國親死年亦知其  
生年在、  
何年也、

文明十七年乙未十二月朔日、武久公(⑤鳥)使鳥取播磨

介齋往命之曰、固(⑤ナシ)凶徒境可事 太守、兼親

乃對曰、屬帖佐非臣志也、以小敵大無路保命、不

得止而應之耳、今也幸忠廉降于 公、且遷飢肥而

承恩命、何喜加之(⑤思)、就鳥取謝罪、五日 公賜書赦

之、且師于飢肥 命也、

○ 五三 島津武久忠書状

一日遣使者候之處、懇之返事喜悅候、殊鳥取播磨介

ニ物語候分、細々申候、得其心候、聊無等閑之儀候、

其境之事弥無為簡要候、就中伊東於飢肥出張候、庄

内寄郡邊、先以各々進發之由申付候、自此方も人衆

可差遣候、定而於彼境可取組候、縱此方大破成行候

共、伊東越山之上者、為當家非可闕候、別而奔走憑

入候、恐々謹言、

十二月五日

(島津忠昌)  
武久 (花押)

本田殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二一六四三・一六四四号文書ト同一文書ナルベシ)

文明十八丙午 忠昌公自將伐賊於限之城、兼親乃師于横川命也、十月一日自限之城賜書勞之、

○ 五四 島津忠昌書狀

其後時儀共如何候哉、無心元候、臆而可用一行候處、諸方之取乱、更々無寸隙<sup>④候</sup>之間、乍存候、城山之事無心元候、所々申調時分候、其間拘留候者方々申合、<sup>④之上</sup>一途可了簡候、各々乍辛勞、爰元万事憑入候、打寄軍勢中、皆々同申候之通申度候、時儀不断可被申越候、恐々謹言、

「丙午也」  
十月一日

忠昌(花押)

本田殿

本田との  
よこ河へ

くまの城より

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二一六四六・一六四九号文書ト同一文書ナルベシ)

兼親在横河、謀撃敵後、敵不能支悉敗走、十月五日、公復賜書勞軍務也、

○ 五五 島津忠昌書狀

横河之敵陣後卷共依奔走、輒退散候、可然候、已後も尚々彼境之事憑入候、今ハ勢々候て可然<sup>④候</sup>之間、其ニ番候之由其聞候、悦入候、先々村田此方へ越候ハ、方々の時儀共、薩州重豊などへ申合、我等如帖佐可打越候、左候ハ、其境之事共堅固ニ可申付候、今度後卷共辛勞候、人々へ何も悦申度候、城内ニ被籠候人々ハ不及申候、各々骨折無申計候、恐々謹言、

十月五日

(島津)  
忠昌(花押)

本田殿

本田殿

忠昌

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二一六四七・一六五一号文書ト同一文書ナルベシ)

十八年丙午十一月、公陣隈之城、二十六日、遣兵伐東郷、二十七日、及東郷兵戦、公師克之、斬東郷右馬允之弟刑部太輔及其族等數人、公將如帖佐、閏月朔日、公復賜書、

○ 五六 島津忠昌書狀

去廿六七東郷ニ勢遣候、廿七日、両方ニ合戦候て、何方も得勝利候、可然候、殊東郷右馬允舍弟刑部太輔其外親類以下數人討取候、本望候、東郷事者城ハかりに仕成候之間、其假差寄候ハ、可輒様ニ見ヘ候つれ共、方々被申子細共候間、先々取延候、何様聽而可了簡候、其方境目之事共いか候哉、今之時分一入用心、城詰等入ヘ候、雖不申共候、不聞被副心候ハ、可然候、合戦之次第其方之人々皆々申度候、爰元しかくと申談候而、聽而如帖佐可打越候、世上如今者、不可有差事候哉、弥所々無越度様ニ調法共憑入候、恐々謹言、

(長享元年カ)  
閏十一月一日

忠昌御判

本田殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一六五七号文書ト同一文書ナルベシ)

二十六日 公賜兼親書、復隅州守護代、呈誓表故也、

○ 五七 島津忠昌書狀

就弓矢之儀一筆到来、甚深之文言御神名等具拜見候訖、抑先年之一乱之事者、偏天魔之所為候之間、無申事候、然者改先非、皆々入見參候上者、更々以無遺恨之儀候、殊貴方之事、別而心底之通承分候之間、得其意候喜、今度尚々心中之分令存知候、喜悅之至候、於自今已後、正宮 霧嶋も御照覽候ヘ、聊不可有等閑候、弥被調大隅國中之儀、可被抽忠節之事專一候、巨細期見參之時候、恐々謹言、

「十八丙午」  
閏十一月廿六日  
(長享元年カ)  
本田因幡守殿

忠昌(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一六五九・一六六六号文書ト同一文書ナルベシ)

永正三年丙寅、忠昌主欲建鐘樓於霧島山華林寺

有有司之命、八月廿六日賜兼親書、二十七日獻書

拜命、霜月十五日功成、勒銘置華鯨、蓋霧島人皇六十二代村上天

皇天曆三年、橘善根之子性空上人奉勅命、於當山來祈誓、于時現六觀音、自尔日月昌及三千餘坊、歷二百八十六年、文曆元年十二月廿八日、炎燒於神火、又歷二百五十九年、文明十六年甲辰、靈宗兼慶法師依國家命再興之、永正三年丙寅、太守忠

昌公別尊崇之、霜月十五日、寄進華鯨一口矣、考之國家二字不知所訓、或曰人之實名、或曰指太守有義、何尚文明十六、則當忠昌主二十二歲、考之於兼親、自文明十三年至同十七年間陷于忠廉之變、故無有公命之理、其間二十三年、忠昌主知兼親勞

於造營、賜書勞之、不詳果在何年、後人正之幸甚、

於造營、賜書勞之、不詳果在何年、後人正之幸甚、

### ○ 五八 島津忠昌書狀

就造營等辛勞共候之由、村田申遣候、悦入候、此方

之依時儀、肥前守可召寄候、造營等之事、能々被申

合候而可被置候、委細平田可申候、恐々謹言、

八月廿六日 (島津) 忠昌(花押)

本田殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一八〇〇号文書ト同一文書ナルベシ)

### ○ 五九 本田兼親書狀

「御書御報之案」

畏言上、

抑就御造榮<sup>⑧</sup>、忝御書謹以頂戴、誠目出奉存候、隨而

修造之事村田方申合、弥以可致奔走候、御次之時者、

以此旨、可預御披露候、慶事、恐惶謹言、

八月廿七日

兼親

進上 平田殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一八〇一号文書ト同一文書ナルベシ)

大永二年兼親年 壬午八月五日、忠兼主賜兼親誓

書、其所以然者、永正十六年己卯十一月廿七日、

伊集院尾張守背 忠兼主、楯籠曾於郡城、同十二

月八日、新納近江守忠武合意於尾張守、遣士卒於

曾於郡城、同十七年庚辰八月廿一日、忠兼主着

陳、攻之無功、忠兼公自幻<sup>⑨</sup>與兼親為親子約、故

兼親<sup>年五</sup>怒不利戰、定死於一途、堅我清水、數謀

數戰敢不退、終城兵勞、同十一月廿七日降參矣、

大概挙此功、将来不変約也、

○ 六〇 島津忠兼勝久契状

けいやくしやうの事

一 ようせうよりしんくのけいやくいまにあいかは  
らす候、しかれハすきしゆミヤにそのこほりの事、  
すてにてきしやうになり候をも、その一人ふミ  
こたへられ候ゆへに、ほとなくてにいり候、その  
ほかちうくちうせつの事、ゆくすゑはうきやく  
あるましき事、

一 みかハふしいよくとうかんあるましき事、

一 ふしんのしさい候するときは、たかひにかたりひ  
らくへき事、

みぎ、このてうくよきなくほうゐんをひるかへ  
し候、

右條々一言一句偽申候者、

奉始上者梵天帝釋四大天王、下者堅牢地神地祇冥  
道、惣而日本國中大小神祇、別者正八幡大菩薩

當所鎮守諏訪上下大明神 春日大明神可蒙御爵者  
也、

仍起請文之趣如件、

大永二年壬午八月五日

修理太夫忠兼（花押）

本田因幡守殿

（本文書ハ「旧記雜錄前編二」一九七三號文書ト同一文書ナルベシ）

大永六年丙戌、嶋津實久望為 忠兼主之継子行潜

謀、忠兼主憂之、同年十月、授國家之政事於相模

守忠良公、而被遣南郷城、玄佐自記與世錄記少異、不知何是、今所考據世錄記、

其後 忠兼公往伊集院重封日置於忠良公、當此時

國中未一和、故 忠兼主欲使兼親押其他豪傑、以

有功於一和、而同年十一月四日、賜曾於郡城於兼

親、略見樺山自記、故并所賜證状以兼取其理矣、

○ 六一 島津忠兼勝久書状

就頼入候儀、曾於郡之事所宛行也、仍可被抽忠節事

專一候、恐々謹言、



「朱カキ」  
大永六年丙戌

十一月四日

忠兼（花押）

本田因幡守殿

「ハリシニ」

「親孚考、是文書大永六年非也、忠兼公在伊集院時也、時代相違、傳記之趣能く可考候。」

「季安云、六年十一月七日御帰府ナレハ非ニアラス」

（本文書ハ「旧記雜録前編」二二〇四九・二〇五〇一ノ文書ト同一文書ナルベシ）

法名近山了親上座、葬于楞嚴寺、未考逝去年月日、雖石塔在楞嚴寺亦無年

月、生于寛正三年、歴事忠國・立久・忠昌・忠治・忠隆・忠兼六主、至大永六年得六十五歳、不知壽終乎幾年也。

自家旧記曰、兼親之代帖佐と此方ハ、大父以来弓矢ニ而候つるを、さまざま被仰分候而、無為ニ御（稅カ）なし候て、敦所殿・本田殿ふるまひ的者修理介殿めされ候而、もたしかたく、帖佐へ御的ニ被参候を、兩人ともに召籠候而、清水・曾於郡を被渡候へと堅承候、曾於郡へ心よわく被渡候、清水椿立なおし城戸をさし、兼親ハ帖佐にてはらをきらられ

候へ、清水之事ハ千代なへとのをとりたて、よきなく御屋形様の御奉公させ可申由、老若若衆一同ニ被申遣候者、さ様候ハ、本田殿ハ被帰候而、我々にしたかい奉公肝要のよし、吉田殿を御使者にて堅承候間罷帰、わうはんを五年帖佐ニかゝせ申候、六年めに帖佐よりおひに御移候間、如元かこしまへ御奉公被申候、兼親廿之とし也、

親安

千代鍋 又次郎 三河守

親貞

因幡守 初親治

加世田地頭職

天正六年十二月十二日、於日向高城戰死、

親賢

式部大輔

親豊

藏人

永祿十一年正月廿一日、日向飢肥領於  
篠ヶ峯戰死、

親高(商カ)

源右衛門

慶長年中任老中、數有勲功、

親  
(44)

式部少輔

薩藩

本田家記文書及系譜 下

〔十五代〕  
董親

又二郎 紀伊守 從五位下 入道董親

○永正二年乙丑生、母

○大永六年丙戌十月、忠兼主委國政於 忠良君、

乃使執事本田親尚上見、益君封於南郷、公如伊集

院又加封 君日置、十一月六日、忠良君往拜 公

於伊集院、七日、忠兼公還魔島忠良君亦從、時

董親以公臣持君之劍、阿多加賀守以君臣持 公之  
御劍、結盟故也、此月、忠兼公養虎壽君為世子、

稱又三郎貴久主、乃 忠良君之長男也、時董親年二十二

七年丁亥四月、忠兼公遜位於 貴久主公而老于伊作、

島津實久欺 忠兼公讚讚之貴久公、六月、實久奉 忠

兼公復守護位於魔島、乃改勝久、由是三州大乱、

董親及新納氏〔久兼〕〔兼濟〕・北原氏〔忠勝〕・樺山氏・肝付越前守謀與

加治木不〔等力〕、十一月及新納・北原謀與社衆戰于宮内、

二十八日、社頭天火遂取加治木・帖佐兩城、樺

山・北原・祁答院・肝付越前守各分領之、董親乃

領社領、

〔享〕享祿年中、豐州忠朝及董親・新納近江守・樺山助

太郎・祢寢孫二郎・肝付三郎等朝于魔島、

天文三年甲午、實久殺末弘伯耆守於谷山皇德寺、

勝久公奔于禰寢、董親及豐州・新納・樺山・肝付

如祢寢、勸 公還也、

四年乙未、公還自禰寢、修本城及東福寺城、於

是 貴久公率兵於伊集院、實久自谷山逼魔島、十

月、公及實久戰于麿島、公師不利、出奔帖佐、實久入麿島、後與南方爭伊集院、南軍數克之、實久不能支去麿島、使其黨成谷山諸城、于時 公遁眞幸在般若寺、

六年丁酉、董親遣士卒如麿島、成東福寺城、且鎮向島、十二月二十四日、公賞其忠、賜董親荒田名八十町・澤牟田名十二町及向島嶽・藤野・松浦・西道・赤水、為向島地頭職、

○ 六二 島津勝久宛行狀

一 鹿兒嶋荒田名八十町

一 澤牟田名十二町

一向嶋地頭之事并嶽・藤野・松浦・さいたる・赤水之事、今度之仍忠節進候也、

天文 十二月廿四日 勝久(花押)

本田紀伊守殿

(本文書ハ、「旧記雜錄前編二」二二二一六号文書ト同一文書ナルベシ)

天文七年戊戌、實久自欲守護、往謀豊州・北郷、二氏應之、董親與焉、新納忠勝不聽、由是同伐忠勝、

八年己亥、憑樺山善久、使本田又八聘于南方、既而董親及形部大輔朝 貴久公於伊集院、致之向島、

○ 六三 口宣案

口 宣案

上卿 日野大納言

天文十五年八月十一日 宣旨

從五位下藤原董親

宜任紀伊守

藏人頭左中辨左近衛權介藤原國光奉

○ 六四 日野町資將書狀

受領叙爵等之事、被 宣下候、於子之孫之不可相違候、弥國家長久基不可過之候也、謹言、

天文十五年 日野町資將 (花押)

本田紀伊守殿

○ 六五 近衛植家書狀

家門由緒之事、如言上吳于他事候、弥可申通之段、不可有別儀候、仍金欄老端赤到来候、懇之儀、尤祝着之至候、猶日野中納言可申候也、かしく、  
〔天文十六年〕  
九月十五日

(近衛植家)  
(花押)

本田紀伊守殿

(本文書ハ、旧記雜錄前編二二五二〇号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 六六 日野町資将書狀

對万徳寺一書之旨、令披覽候、御一家之儀、右大将以来吳于他之条、無余儀候、殊就藤家御由緒之趣、先年内々以柏甫承候キ、具申入家門候、只今弥無別儀候、然者可被仰 公武之旨、尤可然御思召之由候、此段又彼上人申含候也、謹言、

(天文十六年)  
九月十五日

(日野町資将)  
(花押)

本田殿

本田殿

資将

(本文書ハ「旧記雜錄前編二二五三〇号文書ト同一文書ナルベシ」)

○ 六七 近衛植家書狀

芳墨披見、本望之至候、殊段子一端青・官用茶坑(碗)廿到来候、種々懇意之至、祝着此事候、仍色紙卅六、雖其憚多候、染筆進之候、於以後者、切々可申通事可為本意候也、かしく、  
〔天文十六年〕  
九月九日

(近衛植家)  
(花押)

本田紀伊守殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二二五五〇号文書ト同一文書ナルベシ」)

○ 六八 日野町資将書狀

就万徳寺上洛、被猷芳札令披露候、仍色紙卅六、被染御筆候、殊彼上人被御覽候、尤面目候、委曲可相見御返事之間、令省略之也、謹言、  
〔十六年〕  
九月十五日

(日野町資将)  
(花押)

本田紀伊守殿

本田紀伊守殿

資將

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二五五号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 六九 日野町資將書狀

万徳寺以上洛之次、預芳札候、則令披見候、本望候、誠久不申通候、御床敷候、殊(趣)段子一端青・白髪一斤到来候、芳情候、先年如尊意、無失念至當年、音問尤大切候、仍當今宸翰十枚献之候、随分候、委曲彼上人申含候条、閣筆候也、謹言、

「十六年」  
九月十五日

(日野町資將)  
(花押)

本田紀伊守殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二五五号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 七〇 近衛植家書狀

去年為使左大辨宰相着下候処、別馳走之段、祝着此事候、抑對貴久忠切無比類之由、於家門本望候、併國中安寧基候、弥無油断義肝要候也、穴賢く、

(天文十五年)  
二月廿九日

(近衛植家)  
(花押)

本田紀伊守とのへ

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二五三号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 七一 島津貴久起請文

条々

一如承候、從此方茂聊隔心不存候、於御丁嚙者、向後可頼存外、不可有他事、

一此前柁山殿隣所之間、雜説之儀、我等少茂不致同心事、

一諸家此方江可被取懸時者、捨有間敷之由承候、祝着之至候、萬一其方難義之節者、見續可申事、

右、此旨於偽申者、

奉始上者梵天帝釋、下者堅牢地神、惣者熊野三山大權現 彦三所權現、當國鎮守開門正一位 新田八幡

大菩薩、別者當所鎮護諏防上下大明神 天満天神

稻荷五處等御罰可罷蒙者也、仍起請文趣如件、

天文十一季壬霜月十三日 藤原貴久(島津) (花押)

本田紀伊守殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二四四二号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 七二 島津貴久宛行状

大隅國之内小濱名六町・同城付怒久見田十貳町・西郷八町・小田名六町・加治木郷之内日木山名十二町并加河限之外諏訪山懸前後在之、右都合四拾四町之事、為奉公賞處宛行也、早任此旨、可被領知之状如件、

天文拾一年十貳月六日 貴久(花押)

本田紀伊守殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二四四号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 七三 島津貴久宛行状

大隅國之内牛祢三町・同城付邊田三町・二川三町・堺三町、合拾貳町之事、為奉公賞所宛行也、早任此旨、可被安堵之状如件、

天文拾四年卯月十八日 貴久御判

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二四九六号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 七四 島津貴久宛行状

大隅國東郷六町并日當山城用富名六町、以上十貳町之事、為奉公賞所宛行也、早任此旨、可被安堵之状如件、

天文十四年卯月十八日 貴久(花押)

本田紀伊守殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二四九七号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 七五 島津貴久書状

不存寄候處<sup>(⑩預)</sup>被音書候、祝着不少候、此方無替義候、當日谷山ニ及罷越候、仍羊鈴珍物此時候、何様參會之節可申承候、恐々謹言、  
〔朱カキ〕  
天文十三年也、卯月廿一日御状并羊鈴<sup>(⑩可)</sup>献上之御返札也  
四月廿弐日 貴久御判

本田紀伊守殿

三郎左衛門尉  
本田紀伊守殿  
貴久  
御報

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二四七〇号文書ト同一文書ナルベシ)

〇 七六 島津貴久書狀

追而珠玄去月末之此者、雖待居候、于今延引、  
所存之外候、(⑩今)三月者被越候様ニ頼存候、

此前度之預音信処、祝着之至候、仍今程其境之躰如何ニ候哉、承度候、此方無替儀候、就中來月可有越之由聞得候、大慶此事候、何様以面可申承候条、不能巨細候、恐之謹言、

一朱 天文十三年也、此御礼狀五月十四日ニ差上候也」  
五月十三日 貴久御判

本田紀伊守殿  
御宿所

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二四七二号文書ト同一文書ナルベシ)

〇 七七 島津貴久書狀

追而此前珠玄与風被罷越、万辛煩方不及申候、

次之時御心得可然候、

如承候、從此方者連之無沙汰之至非本意候、依此境無恙儀候、就中鹿預送候、祝着候、万期後音之時候、

恐之謹言、

(⑩十三)  
「朱 天文十二年也、十月十二日ニ鹿一丸并ニ伏サシ上候、町田伊賀守殿へ當書之披露狀御返礼也」  
神無月十三日 貴久御判

本田紀伊守殿  
御返報

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二四六一・二四七九号文書ト同一文書ナルベシ)

〇 七八 島津貴久書狀

尚之此方珍物候<sup>(マヤ)</sup>蛉羊預荒卷候、祝着候、

如承候、從此方も依無題目無沙汰罷過候処、預御音信候、畏入候、厥方無何事候哉、可然候、此方無吳義候、萬端期後音之時候、恐之謹言、

(天文八年)  
潤六月十五日 貴久御判

本田紀伊守殿  
御報

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二三六四号文書・「同附録」一八五九号文書ト同一文書ナルベシ)



○ 七九 島津義弘書下

渡唐船一圓不廻候之条、彼舟にて高麗へ渡海候船頭、粉骨無比類候、仍可加褒美之条、帰國之刻、栗野へ

可罷出之旨可申聞候、仍状如件、

〔天正廿年〕

五月六日

義弘御判

本田紀伊入道殿

〔本文書ハ「旧記雜錄後編」二八八五号文書ト同一文書ナルベシ〕

○ 八〇 近衛植家書状

去年連々音信、尤以本望候、抑殿祈事内々申候処、

嶋津三郎左衛門尉領状、祝着此事候、雖然遅々無

心元候、急度京着候様馳走偏頼入候、猶日野中納言

可申候也、かしく、

二月廿八日

〔近衛植家〕  
〔花押〕

本田紀伊守とのへ

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二二五二七号文書ト同一文書ナルベシ〕

○ 八一 近衛植家書状

三十首歌逐一覽候、執々殊勝感悦無比類候、乍憚付墨候、更不可足信用候、仍孺子一端赤到来候、懇意

之至、一段祝着候、尚期後音候也、状如件、

〔天文十五年〕

八月十六日

〔近衛植家〕  
〔花押〕

本田紀伊守殿

〔本文書ハ「旧記雜錄附録」三三五号文書ト同一文書ナルベシ〕

○ 八二 近衛植家書状

懇報本望候、自最前切々可申通之段、自然懈怠背本

意候、去春相煩目以他筆申候キ、仍丁香五斤到来、

尤祝着之至候、由緒共早于他儀候條、以後者別而可

申承事可為本懷候、将又百人一首雖其憚多候染筆候、

猶重而可申候也、状如件、

〔近衛植家〕  
〔花押〕

〔天文十五年〕  
八月十六日

本田紀伊守殿

〔本文書ハ「旧記雜錄附録」三三六号文書ト同一文書ナルベシ〕

〇 八三 松尾頼元書狀

去年者罷下御懇之儀共難忘存候、仍入江殿御上洛御進物共持參被申候、隨而御官位之儀、従本所涯分調可被申之由候、珍重々々、仍拙者方へ重寶拜受、祝着之至候、將又此天神名号青蓮院殿御判在之、御手跡候間進覽候、委細御侍者可被申候間、不能一二候、恐々謹言、

(天文十五年)

八月十七日

松尾民部少輔

頼元(花押)

本田紀伊殿

参

(本文書ハ「旧記雜錄附録一」三七号文書ト同一文書ナルベシ)

〇 八四 日野町資將書狀

猶々弥無御悉(志)(御ナシ)〔等〕之段、所希候、將亦本庄新次郎(心)有子細、他國させ候由、去年申下候、今度陳中令登城、種々為 家門被仰付候間、出頭させ候、然者如前申次申付候、ことくしく候へ共、為御案内存候、貴殿之儀、乍恐親子同前存

候間、(御ナシ)〔聊〕不殘御心底諸事承候ハ、尤可為喜悅候、

柏甫いまた在國候らん、珠賢其分候哉、何も面白金玉共候哉と、可然候と、又嶋津家よりやかて可被上洛人之由、堅約束候、于今無音、且者愚臣令難儀候、万徳寺へも大方申候ま々、彼仁躰さしこされ候て存候、可然様罷立候ハ、可進候、京都にて相應事候、諸事(御ナシ)〔可申沙汰候〕、旁期後便、段々申てもく、先年下國之砌、懇切難申盡候、あはれ、いかなるたよりも候ハ、再會の望までにて候、乱中取乱ながら染自筆、一度ニさをし述候事候、

將亦愚臣當官權中納言候、然者副家名候て、日野中納言申候、左大弁宰相迄共候事候、以後為御意得申候、あはれ、被得上洛も候ハ、於家門御會等参申沙汰催興度候、たゞし如此申候へ共、京都何も可成行哉、不存知候、入江兵部殿自然御参會候ハ、御言傳之よし申度候、

儘可届及候、頼入候、貴久無何事候哉、朝夕御床しく候計候、

切々鹿子嶋へハ御出候哉、伊大和守殿又<sup>御</sup>床し

候、忍室和尚無殊事候にて、何もく不失念候、来春問状可申由申度候、無御等閑書中努

く不可有外見候也、

万徳寺令對談、誠見參<sup>②</sup>を入候心ちして、祝着無是非候、さまくの儀候處、亂中之事候間、菟角う

ち過候、無念存候、在京さへ玉さか得まし、彼是

相似如在候欤、口惜候、

一御息左京兆之事、令申沙汰、口

宣案庭田<sup>重保</sup>と申公

家、只今頭中將にて候、羽林家の人依家中將にて、

貫首にふし候て、公事政を奉行候、これを頭中將

申候、辨しく貫首之補る人を頭弁と書候、御分別

にて候らんすれとも、為御意得もしやと申候、

一叙爵之事、則一紙に宣下候事も御面目候、然乍父

子同然候、

一今度万徳寺貴殿四品事内談候つる、いまた叙爵已

後加級も候へぬまゝ難調候、此段又上人江申分候、如此申候へ共、可依事哉、何か、公武江御礼等被申者、おのつから御面目なる計共存候、

一御家門愚臣江種々重寶共給候、毎々懇意不知所謝候、珍さまなる物も入見参度候へとも、亂世秀取亂候、其上来春に召下人可申間、期其時候、

一誠憚多乍申事、從去年大亂者、弥一家之段及大破、

無正躰候、愚臣頼入候仁躰只今貴殿計候、家門御

儀、嶋津御請被申候、善惡其<sup>②</sup>以各を殘候様、預御

馳走候者、尤可畏入候、更非別事候、如形新殿其

望候、於公儀別而可奉公候、何事にても可承候、

一禁裏江御礼被申由候、轉奏廣橋ニ尤可然候、彼

家申次速水右近大夫候、去年為礼被上人對顔候、

尤可然候、但又愚臣かたへ成共可承候、

一武家御礼之事へ、申次大館左衛門佐候、又伊勢守

ニても可為尊意次第候、只今取亂候間、来春便宜

猶可申候、

一左京兆無何事哉、御床敷候、年々御音信候にて、

御家門御祝着計候、又何にても一冊御所望事候ハ、承候て、家門へ御筆を染させ可進入旨申度候、返々此度如何様の馳走も申すて、對上人失面目候也、被加筆言候て可被下候、猶細期春閏筆候、恐々謹言、

(天文十六年)

九月十五日

(日野町資將  
(花押))

本田紀伊守殿

資將

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二五五九号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 八五 日野町資將書状

上洛以後御床敷候処、不寄存芳問、誠不知所謝候、抑當春福昌寺僧下國之砌、献書状候、相達候哉、令祝着候、將又御家門御請被申候、則令披露御返事、同百人一首御本被染御筆候、尤御面目至候欵、兼又唐皮一枚・同玳瑁瓶一對・唐食籠一・段子一端淺黄(被)送給候、不思寄芳情自愛此事候、仍時又可令對顏候

哉、朝夕念願此事候、猶本庄右兵衛尉可申候也、謹言、

(天文十五年)

八月十八日

(日野町資將  
(花押))

本田紀伊守殿

(本文書ハ「旧記雜錄附録一」三八号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 八六 日野町資將書状

去年下國候処、條々御入魂、殊懇意至共祝着無極候、抑為家門被成下直書候、尤御眉目之至候、將亦御殿新造之事、無相違申御沙汰候様、各馳走肝要候、尚差下使者可申候條、不能詳候也、謹言、

(天文十五年)

二月廿九日

(日野町資將  
(花押))

本田紀伊守殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二五二八号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 八七 日野町資將書状

幸便之采令啓候、去年者懇札、殊種々重寶令祝着候、公私御報申候、相届候哉、抑嶋津御請被申候御殿料

之事、于今御無音、於私令迷惑候、先不寄大小京進候様、別而御馳走頼入候、委曲宗覺可申候也、謹言、

三月二日

(日野町資將  
花押)

本田紀伊守殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二五二九号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 八八 日野町資將書狀

就賀茂社造營之儀、社司縫殿助下國候、仍太守献書候、御分國中奉加之事、被加下知候者、尤可為御神忠候、彼社傳奏事、令存知間、染筆候、惣別如此举狀無心之儀候、向後不可申下候条、頼入候也、謹言、

(天文十六年カ)  
卯月十日

(日野町資將  
花押)

本田紀伊守殿

○ 八九 日野町資將書狀

返々唐扇送給候、重宝此事候、

珍書再三披見、不知所謝候、誠以今度者不寄存參會、

本望此事候、殊重疊御懇意共令迷惑候、於向後相應之儀涯分可令馳走候、聊不可有相違候、將亦出船之事、来廿日比候、一入御残多候、旁期後信、令省略也、恐々、

(天文十四年カ)  
六月十三日

(日野町資將  
花押)

本田紀伊守殿

○ 九〇 日野町資將書狀

出船後未申承候、御床敷候、面白御遊共候哉、柏甫御在國之条、朝夕詞花言葉共令推量、御浦山敷存候、愚臣在旅方暑氣旁相煩候事、可有賢意候、此間在有馬候、明日如豊州乘船候、御残多候、旁期後便、令省略候也、恐々謹言、

(天文十四年カ)  
七月九日

(日野町資將  
花押)

本田紀伊守殿

○ 九一 牧雲齋常真書狀

雖未申通候、以書次令啓候、仍珠玄長々御在京候、

別而申承候、本望候、与風薩州為一見可罷下候之間、自然之儀可奉憑候、於京都相應之題目蒙仰、涯分可被馳走候、委曲珠玄可有演說候之条、不能一二候、恐々謹言、

〔天文十一年〕

閏三月二日

常真（花押）

本田紀伊守殿

御宿所

牧雲齋

常真

本田紀伊守殿  
御宿所

○ 九二 小笠原晴長書狀

度々御懇望候之間、親類衆拔官之方々計仁犬指南候而可被射候、一段之儀候、恐々謹言、

六月廿三日

晴長（花押）

本田紀伊守殿

本田紀伊守殿

〔懸イ〕  
小笠原

晴長

○ 九三 小笠原晴長書狀

唐皮行騰之事、御懇望候間、容合同前赦申候、此已後者可被用候、恐々謹言、

〔天文十一年〕

六月廿三日

晴長判

本田紀伊守殿

○ 九四 小笠原光清書狀

去年下向之砌以滞在申承候、本望候、其以後可申之處、遼遠之条、于今相過候、餘々無音之旨、小何進之候、然者御執心之条、笠懸之日記一卷可有御秘藏候、旨趣猶彼者可申候、恐々謹言、

七月十一日

光清（花押）

本田紀伊守殿

御宿所

本田紀伊守殿

御宿所

小笠原  
光清

○ 九五 河崎祐固・飯田良勝連署書狀

去春之比、御使僧越着候、則雖可被致其還禮候、依  
遠方延引本外候、隨而御方北原方代々儀候、弓箭之  
躰、於御分別者尤肝要候、巨細之段尋光院可被申候、  
心事、恐々謹言、

『天文十一  
壬寅』 六月六日

良勝 (花押)  
祐固 (花押)

本田殿  
參御宿所

飯田肥前守

河崎三河守

祐固

本田殿  
參御宿所

○ 九六 伊東義祐書狀

先刻尋光院進之候處、丁寧之會尺、一入喜悅候、就  
夫重而申上候、納得肝要候、仍青蓮院殿御手本ニ火  
打袋一・鴻之羽二鳥用之候、巨細彼使僧申候、恐々  
謹言、

『天文十一  
壬寅』 七月四日

義祐 (花押)

本田紀伊守殿

○ 九七 本田董親書狀案

『前日尋光院御越候、其還礼未申通候之処、重而御  
越、御懇懃之至、令祝着候、仍青蓮院殿御手跡ニ  
火打袋一・鴻羽二鳥髓到来、快悦不少候、兩三種  
之中、手本一段之御芳情候、誠難盡翰墨候、委曲  
尚御使僧申承候條、不能書候、  
追而依御所望瀬崎野鹿毛一疋進之候、  
』

追而依御所望瀬崎野鹿毛一疋進之候、

伊東殿へ返案 天文十一  
七十七 董親

(本文書ハ前号文書ノ行間ニアリ)

○ 九八 祢寢清年書狀

誠新春之御吉兆重疊、雖申舊候尚更不可有休期、珍  
重々多幸々々、抑從當年者諸事御満足之由承候、千  
秋萬歲此方以御同前候、目出度候、仍五明令拜領候、  
自是茂同令進覽候、誠表祝禮計候、佳事、恐々謹言、

正月十四日

建部清年(花押)

謹上

本田紀伊守殿  
御返報

「上フウラ」  
「衾寢」

〇九九 北原龜菊丸書狀

誠歳晩之御吉兆重疊、雖事旧候尚以不可有際限候、萬幸々々、抑如此之為御祝詞被仰、御賀例預御慶書候、千秋萬歳候、何様螢明覚候、自他之御満足可申承候、賀事、恐々謹言、

十二月廿六日

龜菊丸

謹上

本田殿  
御返報

「上フウラ」  
「北原」

〇一〇〇 菱刈重州書狀

歳暮之御吉兆重疊、雖申事旧候猶更不可有其期候、幸甚々々、抑為此等之御祝詞、任嘉例用賀札候、何様明春者最前御慶可申加候、慶事、恐々謹言、

十二月廿六日

相模守重劾(花押)

謹上

本田紀伊守殿  
御宿所

「上封ウラ」  
「菱刈」

〇一〇一 島津忠將書狀

正八幡宮江前豊後守忠朝御寄進候金三枚  
本田紀伊入道殿爰迄持參、此節被上候、一段神妙之至候、則彼金三原遠江守方へ令渡候早、  
永祿二年五月廿三日 忠將(花押)

本田紀伊入道殿  
御宿所

「上包ウラ」  
「右馬頭」

(本文書ハ「旧記雜錄後編」一三三五号文書ト同一文書ナルベシ)

〇一〇二 島津忠廣書狀

如示預候、去十八九伊東足輕至東少々相絡候、其砌依洪水、此方之人衆河<sup>不</sup>可渡候、乍去退足之刻足輕付送、別府治部少輔為始名字之者七人討執候、中途手負四人捨置候、大慶此事候、其以後者定而深々可動存候處、無其儀引退候、不審之至候、將亦以瀬戸



戸口美作守、御懇之儀共承候、御頼敷令祝着候、爰元義、<sup>(◎方)</sup>彼者委物語可被申候間、令省略候、恐々謹言、

三月廿四日

忠廣(花押)

本田紀伊守殿

御報

「上フ」「豊後守」  
ウラ」

(本文書ハ「旧記雜録附録二」一四〇七号文書ト同一文書ナルベシ)

〇一〇三 島津忠廣書状

就鶴戸堺目之儀、早々御使僧示承候、誠畏入存計候、<sup>(◎)</sup>弥可被添御心事頼存候、外無他候、恐々謹言、

卯月一日

忠廣判

本田殿

御返報

(本文書ハ「旧記雜録附録二」一四〇八号文書ト同一文書ナルベシ)

〇一〇四 他阿弥書状

就念佛寺新命之儀、預芳札、誠以珍重候、就中香爐麝香如御状到来、為悦之至候、仍彼住持職之事、會下之衆雖可申付候、止任難遂候之間、彼仁任御所望

相授候、弥御入魂候而、寺家繁昌可然候、次見来候条、真羽一尾・鳥子紙百枚寺家可令申候、穴賢々々、

南無阿弥陀佛

(天文十六年)

八月廿三日

他阿弥道士

本田紀伊前司殿

〇一〇五 相良為清書状

連々雖可申通候、依遠方每事乍存候、非疎意候、仍去月以來、一家之者共少々如<sup>(真脱カ)</sup>幸院罷退候、然者伊東方以馳走頼彼衆當郡乱入、無是非候、北原方事、伊東指南之外無別義候之間、<sup>(北原)</sup>祐兼分別難計候、此節可被心添候、心事頼存、尚彼使僧可相達候、恐々謹言、

七月廿六日

為清(花押)

本田殿

進之候

「上フウラ」  
「相良」

〇一〇六 本田董親書状案

如示承候、從是依遠方無音之処、御書音令承悦候、

仍一家人と被企逆儀候、言語道断候、然処如斯違逆人共如真幸退出候て、利伊東方以懇望、御方領内へ少く乱入候哉、無是非候、就其万一真幸・山東同意之儀候者、至境目可相動之由候、尤以所希候、委曲御使僧申承候条、聞筆候、

相良殿へ  
御返事

董親

粟田口家則作ノ脇指ハ累代ノ宝刀トシテ帶則家ニ怪異アルト云傳フ、シカリト云トモ董親治世之始、此更ヲ押テ常ニ帶トコロノ刀トセント欲ス、而治刀者ニ遺之如則家傳家中奇怪多シテ消除シガタシ、故ニ靈劔ノ徳カクスニトコロナシトテノウリニ納テシソンニ傳フ、

〇一〇七 本田董親書状案

謹言上、今度於度々奉遂参謁、希代眉目不可過之奉存候、仍自然於向后 京都御家門言上付者、雖恐繁

多候可奉憑之段、尽未來際如此候、又何比御出船候哉、諸每相當之御公儀不可別候、此由能く可預御披露候、誠恐謹言、

(天文十四年カ)  
林鐘十二日

董親

謹上

日野殿  
参御人々御中

「あて所」  
小羽新次郎殿

謹上

日野殿  
返案  
かこしまより之

前紀伊守董親

〇一〇八 本田董親書状案

乍恐去年以來奉受御尊意候条申入候、田舎与申隙味之上、長短雖無案内候、「柏甫之御祝」冊之恩款詠草一卷御家門様入御上覽度奉存候、公私之惶、偏不可過御高察候、但如何候哉、千言万句申而茂有餘事候、仍孺子一端赤奉進上候、此旨条々、可預御披露候、誠恐謹言、

「天文十五年」  
六月五日

藤原董親

「日野殿一案」  
進上 本庄殿

「世戸口美作守伊勢・高野へ  
参候時御傳達候」

「日野殿一哥之儀、たのミ存候間、あて所本庄殿へ出候、  
この系殿より御返書下候」

〇一〇九 本田董親書状案

本田愚家事、事新雖非可申入候、為自然之申入候、

一 隅州守護職之事、右大将頼朝以御下知拜領、引

付文書（嫡カ）慥（嫡カ）相傳候、其以後嶋津殿下向之時、彼

屬門家進退依頼入候、号守護代、今其儀候、

一 久壽二年三月、悪源太殿下文代々本田郷郷司職安堵、藤原兼  
乍恐藤家之事、嘉禄年中、近衛殿様御一流之由、

総ニ被下候古文書兼阿流之家ニ有之、久壽より嘉禄ハ七十餘  
引付分明候、其以後將軍家御世、嶋津ニ進退相任

年已後なり、然者藤原氏久壽年間より代々本田の郷司職動來候  
候付而、近年、公武之言上申事も断絶候、誠以載

ゆへ、本田と名乗に似たり、季安考にハ合へぬ説なり」  
天恩油断申候段相似候欵、於向後者、先々以筋目

身軀雖不肖候、於心中所曲不可存候、自然為御一

覽之、如此候、

万徳寺へ

本田

〇一一〇 某覚書

此万徳寺念仏寺七代之舍弟新納時宗にて渡候、然

者念仏寺住持定藤澤へ参上之時、董親日野殿自然  
為御一覽ニ、愚家之事かの万徳寺へ一書を遣候、  
然者日野殿御覽せられ候て、委御返事候、則彼状  
相そへ候事、為後日候也、

「他之不有家御状」

〇一一一 本田董親書状案

謹言上、抑去年為 御由緒之御下知御上意、誠恐至

極畏入之段此事候、仍雖輕淺之至候、金欄一奉進上

候、以此旨、御披露奉頼候、誠恐誠惶謹言、

「天文十六年」  
六月二日

紀伊前司董親

進上  
「近衛殿へ進上之草案」

左大辨宰相殿  
「念仏寺留主坊主藤沢清浄光寺へ参上之  
時、十日之立にて候を、吉日にて二日  
之日付追而之状」

〇一二二 本田董親書状案

追而去年者自中途尊書被送下候、慥拜受候、随

而此度愚息（親兼）又次郎へ御傳筆之段、忝存之由候、

別番雖可申上候、無題目之条、不能其儀候、仍

雖輕微之至候、丁香二斤令進上候之由候、

去二月尊書、同五月下着、具令拜領候、如蒙仰候、

去年者御下國之時節、得御尊意候、于今忝候、抑愚

領之者伊勢・高野へ巡礼参存立候条、乍惶可捧一翰

之覚悟候處、御報罷成候事、非本懷候、殊不存重

御家門様御書奉拜戴候、併御所持之故、面目之至不

可過之候、誠々雖其恐繁多候、奉成御請文候、可然

之様御披露奉頼計候、仍雖輕微之至候、御家門様

へ丁香五斤奉進上候、可預御取成候、就中御殿新造

之事、嶋津被蒙仰候、不可有餘義候哉、(本脱力)将亦所様へ

唐皮一枚・唐玳瑁之毘一對・唐食籠一・(總)段子一端淺

黃遂進上候、誠表微志計、以此旨、可預御披露候、

誠惶謹言、

六月五日

進上 本庄殿

「日野殿へ一案」  
「世戸口美作守伊勢・高野へ  
参候時御傳達候」  
「日野殿へ進上物少事過候へ共、依子細候、如此候」

藤原董親

〇一二三 本田董親書状案

御書謹奉拜戴、過當此事情、抑 嶋津就 御門家之

累葉、去年御上使御下着、面目之至被奉存候、盡未

来弥可奉仰之段、以此旨、具可預御披露候、誠惶誠

恐謹言、

六月五日

進上 左大辨宰相殿

「近衛殿御請文」  
「世戸口美作守伊勢・高野へ  
参候時御傳達候」  
前紀伊守董親

〇一二四 本田董親書状案

好便之条可用一書覚悟候處、御音問、殊青蓮院殿様

御名号送給候、祝着不少候、御名号者于今無下着候、

如仰之去年者為御供之御下向之節、遂向顔申承候、本

望此事情、仍御本所様無事御上洛之由、乍惶満足奉

存候、就中 御殿御造作之事、嶋津被蒙仰候、定可

被致馳走欵、隨而令進献候、猶彼巡礼可申展候、

追而愚息(親卷)又次郎、雖輕少候、唐鈴毘一對令進入

候まゝ、去年遂交顔申承候、于今残多存之由候、  
〔天文十五年〕  
六月五日 藤原重親

謹上 本庄殿  
御返報

〇一一五 本田董親書状案

謹言上、仍彼時宗藤澤清浄光寺へ罷越候、以其次乍  
憚申上候、殊去年者御自筆之百人一首一冊奉拜戴候、  
希代之面目奉存候、随而雖左道之至候、<sup>(殿)</sup>段子一端青・  
官用茶碗廿奉進上候、此等之趣、御披露奉頼候、誠

恐誠惶謹言、

〔天文十六年〕

六月二日

〔近衛殿へ進上之草案〕

進上

左大辨宰相殿

〔念仏寺留主坊主藤澤清浄光寺へ參上之時、十日之立に  
て候を吉日二日之日付〕

紀伊前司董親

〇一一六 本田董親書状案

宣下趣

任紀伊守之事

先以過分驚入奉存候、當國御下向、鹿兒嶋於御末申

談候分、愚子又次郎官爵一儀奉覚候、委旨彼時宗可  
達上聞候、誠恐誠惶謹言、  
〔天文十六年〕

六月二日

紀伊前司董親

進上 本庄右兵衛尉殿

〔宣旨趣につけて日野殿迄御進上御案文候、このことへハ  
よの御状に見へ候間、此返事と  
してへなく候〕

〔念仏寺留主坊主藤澤清浄光寺へ參上之時、十日之立にて候  
へ共、吉日にて候間二日之日付〕

〇一一七 本田董親書状案

去年悴者伊勢・高野へ巡礼參仕候、以其次、乍惶  
御家門様并左大辨宰相殿へ申上候事、本庄新次郎殿  
迄頼存候處、境節夷中へ御逗留之間、貴所様御懇調  
之儀祝着不少候、然者御本所様御下向之刻、本庄殿  
以面承事、愚子又次郎官爵之事、可為御調法之由承  
候、然處、先々拙者被任紀伊守事、驚入存候、以前  
之御一諾相連之様覚候、就中 廣橋殿様・烏丸殿様  
御両所之事、同御申次速水世民之事迄細々示給候、  
〔右〕  
委得其意候、随而彼万徳寺藤澤清浄光寺へ御十念為  
頂戴之參上被申、乍次如斯候、定可被述口上候、仍

唐綾一端水色進獻候、誠之礼及候、恐之謹言、  
〔天文十六年〕  
六月二日

紀伊前司董親

「去年世戸口美作守上洛之時、本庄新次郎殿へ用一書候處、折  
し、在國候故、同名右兵衛尉殿返事候、此度念仏寺之上洛  
ニ、右兵衛殿用書状候へ共、新次  
郎殿本服之段、彼返事にて候、新次  
本庄右兵衛尉殿  
御宿所 月十六日下着候」

「念仏寺藤澤清浄光寺へ參上之時十日之立にて候へ共、吉日に  
て今日二日之日付」

〇二一八 本田重親親書状案

兼書状案

謹言上、抑御下向之砌、奉拜顔候、乍恐其後御床敷  
奉存候、然者去年薰衣香頂戴、過當之至候、仍白髮  
一斤・官用皿十進上、於向后每事可得御尊意候、此  
由能之可預御披露候、誠恐誠惶謹言、  
〔天文十六年〕  
六月二日

藤原重親  
(親兼)

「左大辨宰相殿へ草案」  
進上

本庄右兵衛尉殿 「念仏寺藤澤清浄光寺へ參上之時、  
十日之立にて候へ共、吉日にて候  
間二日之日付」

〇二一九 本田重親親書状案

兼書状案

謹言上、抑兩年以往乍恐紀伊守申上候、過當之至候、

仍官用香爐一・丁香三斤進上、於未来併可為御青侍  
候、此旨具可預御披露候、誠恐誠惶謹言、  
〔天文十六年〕  
六月二日

藤原重親

「近衛殿へ草案」  
進上  
左大辨宰相殿

「念仏寺留主云々同前」

〇二二〇 本田董親書状案

謹言上、抑去年悴者參洛之節、以御取成 御家門様  
被御覽候、於拙者面目奉存候、就中拙詠之分、乍憚  
奉入御上覽候處、剩 御家門様少々御點等、不可有  
古今事候、仍雖輕略之至候、白髮一斤奉進上候、此  
旨具御披露願入候、恐惶謹言、  
〔天文十六年〕  
六月二日

紀伊前司董親

「日野町左大辨宰相殿へ草案」  
進上

本庄右兵衛尉殿 「念仏寺留主坊藤澤清浄光寺へ參上  
之時、十日之立にて候へ共、吉日  
にて候間二日之日付追而之状」

〇二二一 本田董親書状案

猶之彼時宗拙者一入知音候、嶋津家にて被居候、  
為高察候、

謹言上、仍御下向以往不奉拜顔候、二六時中乍恐御

床敷奉存候、随而彼時宗万徳寺藤澤清浄光寺へ被罷

越候、以其次申上候、雖輕微之至候、段子一端青奉

進上候、以此旨、御披露願入候、恐惶謹言、

「天文十六年」

六月二日

「左大辨宰相殿へ之草案」

進上

本庄右兵衛尉殿

「念仏寺留主坊主藤澤清浄光寺へ參上之時、十日之立にて候へ共、吉日にて候間二日之日付」

「日野殿為御音信之一通之状ニ青段子一、又去年哥日野殿以御納得近衛殿御合點候為御礼状一通白髮一斤、二通分ニ音物書のせ候、御返事にハ状一通ニ二種の御礼候まゝ、愚文ニそへ置候」

〇一二二 本田董親書状案

御書謹奉拜領候、然賀茂之杜再興之儀、社司縫殿助

下國候、仍嶋津へ御書被成下候、定馳走之旨候哉、

然者隅州之内之面々半分、當時者鹿兒嶋へ不忠之刻

候条、奉加判無之候、拙者事、蒙 尊意候間、雖輕

微候千足奉進宮候、此等之儀、向後不被仰下之旨候、

奉得其意候、為祝言之奉加之加判、愚息左京大夫令

申候、委曲彼方可申上候、以此旨、可預御披露候、

誠恐誠惶謹言、

「天文十六年九月到来」

十一月三日

「日野町權中納左大辨宰相殿返案」

進上

本庄新次郎殿

紀伊守董親

〇一二三 本田董親書状案

貴書之趣具致拜見候、抑嶋津御殿料之事、不寄多少

京着候之樣可申聞候、定而可被奉馳走候哉、委曲猶

宗覺公可有御披露候、仍雖輕薄之至候、丁香一斤令

進上候、以此旨、可被御披露候、誠惶謹言、

「天文十六年」

十二月七日

「日野殿へ返案」

進上

本庄新次郎殿

紀伊守董親

「此年上使伊集院へ下着候、其名宗覺齋、民衆宿齋、御書之豆ハ石谷伊賀守殿以御傳達到來候、彼御使ハ高來へ所領被持候て年々被下候ト也」

〇一二四 本田董親書状案

御書之旨謹奉拜讀、過當此夏候、抑嶋津三郎左衛門

尉被仰下候趣可申聞候、定而可被奉馳走候、就中輕

淺之至雖多其憚、丁香一斤奉進上候、以此旨、可預

御披露候、誠恐誠惶謹言、

〔天文十六年〕

十二月七日

紀伊守董親

進上 中納言殿

〔近衛殿へ之返案〕「此年 上使伊集院へ下着、其名ハ宗覺齋、民ハ桑宿齋、御書之夏ハ、石谷伊賀守殿氏改以御傳達到來候、彼御使ハ、高來へ所領被持候て年々被下候ト也」

〇二二五 島津忠興書狀

改年之御大慶千喜万祥、雖申上喜舊候、猶更不可有際限候、多幸々、抑就如此之御祝詞、任佳例捧慶書候、如何様以參上自他御満足之儀、重疊可申加候、仍五明式本致進上候、誠万歳不易奉表御祝儀計候、以此旨、可預御披露候、恐惶敬白、

正月十一日

薩摩守忠興（花押）

進上 本田因幡守殿

〔本文書ハ、「旧記雜錄附録」一三二二号文書ト同 文書ナルベシ〕

〇二二六 伊集院忠朗書狀

追而申候、前日土佐木にて候間、弓木進覽候之處、御礼之儀被仰候、御隔心之様存候、

如承候、前日從相州入道、鯨之油被進候之處ニ、此

〔島津日新〕

前以上田殿御礼承候、又此節被仰候、即時致披露候、相州へ被進候、愚者請取申候、定而從彼方追而御礼可被申候、殊此方珍物候、 忠良 貴久大慶之由被申候て聆賞翫候、能々御礼可申之由候、又直ニ茂被申候哉、恐々謹言、

卯月廿二日

忠朗（花押）

本田因幡守殿

伊集院大和守

本田因幡守殿

忠朗

〔本文書ハ、「旧記雜錄附録」一三三八号文書ト同 文書ナルベシ〕

〇二二七 島津日新忠朗書狀

就無音之儀、懇書祝着此事候、連々伊集院大和守被仰談候哉、專一候、珍物之羚羊是又賞翫無他候、事々、恐々謹言、

四月廿三日

日新（花押）



本田殿  
御報

(本文書ハ「旧記雜錄附録二」八四号文書ト同一文書ナルベシ)

〇一二八 島津忠朝書状

如蒙仰候、歳暮之御満足重疊、雖申事舊候、猶更不可有御邊際候、萬歳々、抑就是等之御慶儀、御佳例之以御書被仰下候、誠目出忝奉存候、明春者早々御繁榮之兆可申上候、此旨宜預御披露候、恐惶謹言、

十二月廿七日

藤原忠朝(花押)

進上 本田因幡守殿

(本文書ハ「旧記雜錄附録二」一四〇六号文書ト同一文書ナルベシ)

『董親没失年月、法名寶鑑清珍居士』

(ママ)

女子二人

(ママ)

『十六代』

親兼

初重親 童名千代二郎 又二郎 左京大夫 従

五位下 大炊大夫 法名玄齋

享祿元年戊子誕生、

従父董親没落清水城、其後改先非奉仕于 太守義

久公、

此時 帝ヨリ左京大夫朝臣ト代々ナサレ候ヘトモ、

清水城シテ 太守ヘ御奉公ニ付 義久様ヘ託申、

大炊大夫ニマカリナル也、大夫ノ官ヲソレアル故

也、号玄齋、法名隣岳舜徳居士 市来地頭

〇二二九 口宣案

口 宣案

上卿 日野中納言

天文十六年九月十五日 宣旨

従五位下藤原重親

「代々子々孫々」  
宜任左京大夫

藏人頭右近衛權中将兼甲斐權介源重保奉

〇一三〇 日野町資將書狀

左京大夫口 宣為冥加申調進之候、尤御面目候、弥  
國家長久基候、仍太刀一腰令献候、併表祝儀計候也、  
謹言、

(天文十六年)  
九月十五日

(日野町資將)  
(花押)

本田又次郎殿

(本文書ハ、「旧記雜錄前編二」二五五六号文書ト同一文書ナルベシ)

〇一三一 近衛植家書狀

玆札祝着之至候、抑官用香爐一・丁香三斤到来候、  
懇意之至、芳情喜悅此事候、仍一冊花月百首乍憚染筆進  
之候、於向後者、切々可申通事可為本望候也、かし  
く、

(天文十六年)  
九月九日

(近衛植家)  
(花押)

本田又二郎殿

(本文書ハ、「旧記雜錄前編二」二五五一号文書ト同一文書ナルベシ)

〇一三二 日野町資將書狀

乍乏少、薰衣香袋三献之、唯今廻来候而加筆候、  
上洛已後御床敷候、抑不寄思音信、令祝着候、殊丁  
香二斤到来、重寶秘藏不過之候、猶期後便候也、謹  
言、

(天文十五年)  
八月十八日

(日野町資將)  
(花押)  
「上フ」「資將」

本田又次郎殿

(本文書ハ、「旧記雜錄附録一」三九号文書ト同一文書ナルベシ)

〇一三三 日野町資將書狀

以万徳寺被献芳札候、則令披露候、仍花月集一冊被  
染御筆候、御自愛令推察候、巨細猶可相見御返書之  
条、抛筆候也、謹言、

(天文十六年)  
九月十五日

(日野町資將)  
(花押)

本田左京大夫殿

(本文書ハ、「旧記雜錄前編二」二五五七号文書ト同一文書ナルベシ)

〇一三四 日野町資將書狀

玆書披見、併成再會思候、尤令満足候、殊官用皿十・

白髮一斤送給候、祝着候、抑 勅筆短冊十枚進之候、

委曲万徳寺可有演説候条、不能詳候也、謹言、

(天文十六年)  
九月十五日

(日野町寛将)  
(花押)

本田左京大夫殿

(本文書ハ「旧記雜録前編」二二二五八号文書ト同一文書ナルベシ)

〇一三五 伊東義祐書状

両度使僧、殊仁馬毛黒預候、宍段自愛此事情、

為御礼先用飛脚候、尚年行可申候、恐々謹言、

十二月十八日

(伊東)  
義祐 (花押)

本田殿

『 稻津越前守

野村越後守

閏三月十一日

景綱判

祐将判

東条出羽守殿

野口大和守殿

本田因幡守殿

(本文書ハ行間ニアリ)

〇一三六 可水伊東義祐書状

今度新納忠重于戈之次第、言語道断候、至于今者志

布志・末吉被取延度存候、其方肝付於同意者、飢肥

境聊顯形可入魂候、余者年行共細碎可申候、恐々謹

言、

(天文七年也)  
三月廿九日

(伊東義祐)  
可水 (花押)  
「上フウラ」「伊東」

本田殿

(本文書ハ「旧記雜録前編」二二二六三号文書ト同一文書ナルベシ)

〇一三七 本田董親書状案

『伊東殿返案

天七  
卯廿六

董親

従是一通之处、遮而尊書畏恐不少候、仍今度之弓

箭、就新納殿御對儀、可被残彼御家之御遠慮、肝

付殿・北原殿被仰渡、於御同意者、不可有余儀候

欵、猶從年行可申入候条、不能詳候、此旨可得御

意候、恐々謹言、

追而愚拙身上之事、始末可得御扶助事奉憑之  
外、不存他事候、以上、

(本文書へ前号文書ノ行間ニアリ)

〇一三八 北郷忠相書状

改年之御慶珍重多幸、雖申舊候、猶更不可有邊限候、  
萬歳々、抑當春勝例年如意御満足由、千秋万歳候、  
永日倍吉兆可申承候、仍五明二本進覽候、表嘉瑞計  
候、万吉、恐々謹言、

正月十一日

讚岐守忠相(花押)

謹上 本田殿

御宿所

〇一三九 北郷忠相書状

追而都城女中様弥御有付過御推量候、千万々目  
出度候、如何様以使者御祝言可申加候、恐々、  
御札之旨委細令披見候、仍念仏寺藤澤江御登、以其

次近衛殿江被音信候處、被成 宣下之由、千万目出  
度候、誠御面目此事候、如何様從是御札可申條省略  
候、恐々謹言、

(天文十六年)

霜月三日

忠相(花押)

本田左京大夫殿

御返報

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二五六〇号文書ト同一文書ナルベシ)

〇一四〇 北郷忠相書状

歳暮之御大慶重疊、雖申舊候、猶以珍重多幸々、抑  
如此之為祝詞、預御賀礼候キ、目出度候、自是モ任  
佳例用賀書、明春者最前吉兆可申承候、慶事、恐々  
謹言、

(天文十六年)

十二月廿八日

讚岐守忠相(花押)

謹上

本田左京大夫殿

御宿所

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二五六三号文書ト同一文書ナルベシ)

○一四一 肝付省鈞兼統書狀

始而預芳翰處、快然之至候、仍自近衛殿様官途御給  
之由、目出候、如何様從是御礼可令申候、佳事、恐  
々謹言、

(天文十六年)  
霜月七日

(肝付兼統)  
省鈞 (花押)

本田左京大夫殿

御返報

本田左京大夫殿

御返報

肝付河内前司入道

省鈞

『死去年月墓所無傳、法名隣岳舜徳居士』

(ママ)